R E H K

第 8 号

目　次

《講　演》

ポストモダンにおける政治哲学の一側面
—その人間学的基礎：人格システムの目的性・時間性と仏教的「無」性・「空」性—……長谷川　高　生（1）

《論　文》

ピカソのバルセロナ時代……浅　若　みどり（15）

シルヤブとセヘル……上　間　篤（33）

アメリコ・カストロと『スペインの歴史的現実』
—スペイン人解釈についての一考察—……梅　田　咲　絵（47）

インディアスにおける真珠の発見
—植民地支配の構図に関する一考察—……立　岩　礼　子（59）

日本人のスペイン論(その三)……坂　東　省　次（71）

Condiciones gramaticales de la coordinación copulativa de los pronombres, artículos y adjetivos determinativos ……Ichiro MIKI（81）

《研究ノート》

ペルーの社会運動
—首都リマの低所得者居住区に見られる人民食堂について—……小　林　由記子（95）

Bodas de sangre de Federico García Lorca y el instinto ‥ Naoka MORI（105）

《新刊紹介》

国立国語研究所編『日本語とスペイン語(1)(2)(3)』
くろしお出版　1994年，1997年，2000年……橋　本　和　美（115）

若桑みどり著『象徴としての女性』
—ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象—
筑摩書房　2000年……加　藤　さやか（119）

《資　料》

スペイン関係文献目録(1999～2000年)……坂　東　省　次（123）

2000

京都外国語大学イスパニア語学科修士会

ポストモダンにおける政治哲学の一側面

－その人間学的基礎：人格システムの目的性・時間性と仏教的「無」性・「空」性－

近畿福祉大学　長谷川高生

Ⅰ．はじめに

ポストモダンの政治哲学における人間学的基礎を考察するにあたり、まず「近代」が設定した人間像を検討しておかなくてはならない。「近代」という時代に典型的に生きた人間を、ルソー、カント、マルクスなどの近代の思想家が想定した人間像に代表させるとすれば、そこには現実の社会から遊離した抽象的個人としての人間が浮かび上がってくる。これに対して、ハイデガー、ヤスパース、オルテガなど実存主義や生の哲学の現代思想家が設定する人間像は特定世界のなかでの具体的個人である。すなわちポストモダン時代に想定される人間像はオルテガの、自己と環境との相互交流から成る人間的生、ハイデガーの世界内存在、東洋では西田幾多郎の絶対無の場所などの思想に代表されるように、時間と空間においてなんらかの広がりをもった具体的個人なのである。筆者もまた拙著『大衆社会のゆくえ』でアメリカの社会学者T．パーソンズのAGIL図式を援用して、来るべきポストモダン時代の人間像の構築に向けて意味世界のなかに人格システム・社会システムを設定した。そこで本稿では、こうしたポストモダンの人間像に関わるオルテガの生・理性、筆者の人格システム、西田の絶対無などの思想をたどりつつ、筆者の人格システムの時間性と仏教的「空」性、人格システムの目的性と仏教的「無」性の対応性・類似性を検討してみたい。

Ⅱ．近代社会からポストモダン社会へ

1．ロックウッドのシステム・インテグレイション理論

ポストモダン社会の人間像を捉えるためには、まずその社会の現実世界観はいかに構成されているのかを検討すべきであろう。そのためには、ポストモダン社会の前の時代であった近代社会を代表する社会理論を紹介しておくことが必要であろう。そうすることによって「近代社会」と「ポストモダン社会」の現実世界観の差異が明確になってくると思われるからである。ここでは近代社会の社会変容を巨視的に定式化したロックウッドのシステム・インテグレイション理論を紹介しよう。

すなわち、

①社会システム内の緊張と可能な変化との源泉は、その支配的制度秩序とその物質的土台との適合性の欠如から生ずる。②この場合の物質的土台は、もし活性化されるなら、現存制度秩序を直接的に脅かす社会関係の発展を容易にする。③システムは、その制度秩序と物質的基礎との機能的非両立性から起こる典型的な“緊張”により特徴づけられる。④システムの潜在的社会関係の活性化は、制度秩序に利益を見出している集団が、特別の緊急事件に直面して、システムの逸脱機能的傾向に対処できる成功性に依存する。⑤もし、これらの緊急事件が、システムの機能的非両立性を深化したり、諸利益集団による補償方策が、（無意図的に）、システムの潜在的社会関係をさらに活性化すると、社会不統合と制度秩序変化との悪循環が進行する。一方、もし補償方策が効果的なら、制度秩序はそのままであるが、システムの機能的非両立性が永続化するかぎり、緊急の焦点は明白であり続ける。さらに、ロックウッドは、以上の仮定を社会の生産システム分析・生産様式による社会タイプの分類に限定使用せず、生産関係が政治的目標にかなり制度化されている時、経済的秩序を支配的政治制度の物質土台とみて、これらの定式を用いることの可能性を示唆する。[1]

さて、このロックウッドの社会変容理論は近代社会全体の変容過程を理論化していると同時に、近代社会の想定する現実世界が「唯物論的世界」であることを如実に示している。というのはこの理論は、生産諸力と生産関係との矛盾・拮抗による社会変化を唯物論的に解明したマルクスの理論を再定式化したものであるからである。

2．オルテガ意味論

ではこうした近代社会の唯物論的解釈に対して、ポストモダン社会が想定する現実世界はどのように説明されるのであろうか。それは現代の多くの哲学者や社会学者が言明しているように「意味的」に構築されるのである。ここではオルテガの意味論にしたがって、ポストモダンの「意味論的世界」の様相を考察してみよう。

---

[1] 拙著『独裁から民主主義へ －スペインと日本－』、ミネルヴァ書房、1999 年、36-37 ページ：D. Lockwood, “Social Integration and System Integration” in G. K. Zollschan and W. Hirsch eds., *Exploration in social change*, London, 1964, p. 245, pp. 252-253.

オルテガは自己の周囲に広がる環境の存在を自明のものとするが、ではこうした環境の現実の事物は、いかなる意味をもっているのであろうか。彼によれば、環境内の「もの」は「純粋な印象」によって成り立つ表層の「顕在的世界」の背後に、「印象の構造」によって成り立つ深層の「潜在的世界」を擁している。この表層世界と深層世界との距離は、「主体のなす行為のおかげで」、つまり「私の精神がある感覚と他の感覚との間に設定する諸関係の構造から」発生するのである。[2] 前者によって自己を顕現する宿命を背負った後者の世界の現実は「構造」、すなわち「単純な物質的諸要素プラスそれらの要素が組み合わされている秩序」、「相関関係」をもち、「それらの物質的諸要素そのものの現実とは異なる価値、あるいは意味」を有している。[3] 「一つ一つのものには、さらに多数のものたちになり得るという、ある潜在能力が秘められており」、「他の一つの、あるいはいくつかのものたち」と「相関関係をもつ」ことによってその「潜在能力」を自由にし拡大するのである。[4] 「環境の再摂取」が「人間の具体的目標」であるなら、「概念」こそがそれを可能にする道具なのである。[5] そして「印象」が「ものたちの肉体をわれわれに与える」任務を負っているのに対して、「概念」は「ものたちの形相を、それらの物質的ならびに精神的な意味をわれわれに与える」のである。したがって「概念」は、「ものたちを所有するためのもの」、「ものたちを知覚し、捕捉するための真の道具、あるいは器官」である。確かに「思考がすべてではない」。しかし「思考なくしては」、われわれは「なに一つとして完全に所有することはできない」。「視覚は概念を通してはじめて完全な視覚となる」のである。[6]

すなわち、オルテガの想定する意味世界は表層の「顕在的世界」にある「印象」の多数が、「思考」や「概念」によって「相関関係」を織りなし、深層の「潜在世

---

2 J. Ortega y Gasset, "Meditaciones del 《Quijote》"(1914) en *Obras Completas*, Tomo I, Revista de Occidente, 1983, p. 325; 長南実訳『ドン・キホーテをめぐる省察』オルテガ著作集1、白水社、1970年、56-57ページ。

3 *Ibid.*, p. 334, p. 350; 同上訳書、54ページ、85ページ。

4 *Ibid.*, pp. 350-351; 同上訳書、85-88ページ。

5 *Ibid.*, p. 322; 同上訳書、31ページ：H. Larraín Acuña, *La Génesis del Pensamiento de Ortega (La Metafísica de Ortega y Gasset)*, Buenos Aires, 1962, pp. 97-99.

6 *Ibid.*, pp.351-354; 同上訳書、88-93ページ：H. Larraín Acuña, *op. cit.*, pp. 99-101.

界」の「構造」を形成しているのである。五感や感覚を通して得られる現実世界の「印象」が、「思考」や「概念」によって「物質的・精神的意味」を獲得するのである。しかし「思考」や「概念」のみに依存しすぎると、現実との接触を失って、思考や概念本来の目的である現実を正しく捉えることができなくなるであろう。逆に感覚や「印象」だけでは現実を正しく捉えられないのであるから、思考による「概念」と現実からの「印象」との弁証法的往復運動によってしか現実を正しく捉えられないと言えるであろう。

3．環境的意味世界

さて以上の意味論的世界観によってポストモダン社会の現実世界は構築されるのだが、具体的にはいかなる意味世界が構造化され得るのか。現実世界に対する認識が「近代」の唯物論的解釈からポストモダンの意味論的解釈に移行するや、想像力によって人間が感得・理解する意味世界が一挙に広がるゆえに、人間の認識の視野は国際世界や精神世界、宇宙世界にまで拡大すると容易に予想されるであろう。ここでは筆者が拙著で提示した人格システム論・社会システム論を紹介しよう。それは人文科学的意味世界、社会科学的意味世界、歴史的意味世界、宇宙的・自然科学的意味世界（精神世界を含む）などの多重的な相互主観的意味世界のなかに、パーソンズのAGIL図式を用いた人格システム・社会システム・国際システム・宇宙システムを設定しその発展論を試みるものであった。（図1参考のこと）[7] このような無限に外に向かって拡大する意味世界を認識するために、そこに設定される人間像は必然的に空間的な環境性の視野をもっているのである。さらにまたここで考案される発展論は、時間的・歴史的に展開する質的な発展性を兼ね備えている。かくしてポストモダンの人間像はオルテガなら「環境」、筆者の人格システムなら「宇宙」、西田幾多郎なら「場所」のごとく「空間性」・「環境性」を視野におさめ、さらにオルテガの人間的生にしろ、筆者の人格システムにしろ、西田の絶対無にしろ、時間・歴史に沿った「質的発展性」を内在させているのである。たとえば筆者の構想する発展論は、後述するように、システム上の「目的性」と「時間性」という二つの逆方向への運動によって形成される。こうすることによって、静態的

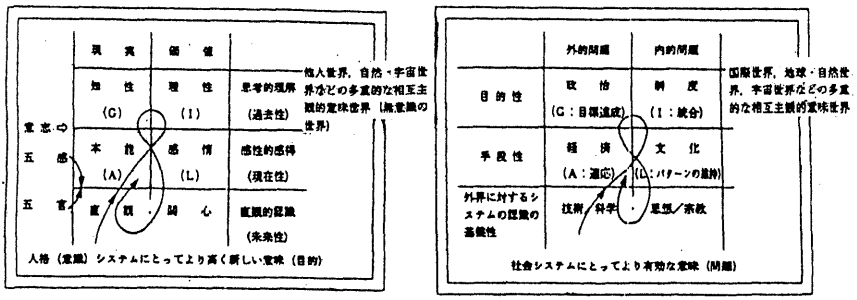
---

[7] 拙著『大衆社会のゆくえ －オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座－』、ミネルヴァ書房、1996年、216-217ページ。

すぎると批判されるパーソンズの構造機能主義のシステム論が相当の程度動態的に構成され自己運動するようになると思われる。[8]

図１：人格システムと社会システム

人格（意識）システム　　社会システム



出所：拙著『大衆社会のゆくえ』、216、217ページ。

以上のごとき意味世界のなかに構築される発展論の目的・意図は、「近代」のマキアベリズム、すなわち「権謀術数主義」に満ちた現代の大衆社会状況から脱却するための、ポストモダンのスピリチュアリズム、つまり「精神主義」に基づく人間発展論を構築することであった。筆者の見るところ、「近代」の魅力なき古きマキアベリズムは真実のところ精神主義者の諸々の善行に頼ってしか生きれないにもかかわらず、あの世や神仏を忘れ真に正当なものを正当と評価せず、「他人を騙すことこそ実力だ」と公言しているのである。それゆえ今後は当然消え去っていくべきであり、これに代わって、ポストモダンの未来への希望に満ちたスピリチュアリ

---

[8] C. Ramos Mattei, *Ethical Self-Determination in Don José Ortega y Gasset*, New York, 1987, pp. 76-78; J. Ortega y Gasset, "Conciencia, Objeto y Las tres distancias de éste"(1915) de "El espectador.-I"(1916) en *Obras Completas*, Tomo II, Madrid, 1983, pp. 61-66; 西澤龍生訳、「意識、対象、対象の三つの距離」、『現代文明の砂漠にて』、新泉社、1974 年、6-17 ページ。＊人格システムの三つの位相である「直観・関心」、「感性」、「思考」はオルテガの論文「意識、対象、対象との三つの距離」にある対象との第一の距離の「原初的経験としての距離」、対象との第二の距離の「現前のイメージ」、対象との第三の距離の「記号や観念や理論」に対応・一致するものであろう。

ズムとこれに基づく確固たる人間像こそが、これからの地球社会における人間の真の再生を実現していくべきであろう。ちなみに精神主義には世俗的精神主義と宇宙的精神主義とが考えられようが、シャカやキリストが精神世界と同通する後者の真の精神主義者とするなら、オルテガや西田幾多郎や筆者などは精神世界を設定するにせよしないにせよ、世俗世界において精神的偉大性を目指す前者の流派に属することになろう。

Ⅲ．オルテガの生・理性主義、歴史的理性主義の世界

ところでここで、オルテガの生・理性主義の人間像を紹介しておこう。というのは、その大衆社会批判で名声を博したオルテガによって構築された人間的生の哲学は、大衆社会状況の克服を企図する筆者の人格システムやポストモダン思想のための人間学的基礎や原型を提供すると思えるからである。

まずオルテガ哲学のスローガン「私は私と私の環境である」にも唱えられているように、根源的現実たる人間的生は自己と環境との相互交流によって成立する。この環境の一般的構造としては、（1）わずかの物によって構成された生的世界の背後に潜在した「共一現前」の世界があること、（2）われわれの世界には①われわれの注意を引きつける物、②物がそこから現れてくる視界の地平線、③現在は隠れているその向こう、の三つの面があること、（3）世界は「私」の「ここ」からパースペクティブされること、（4）われわれの世界は「実用的場」で組織されていることが指摘され、環境の具体的構造としては、鉱物、植物、動物、他者、共存・対個人的関係、慣習という準一共存の社会的生などが挙げられる。この環境の周囲世界に対して、人間は「生・理性」を駆使して、「かくあらねばならない自らの姿」、すなわち「存在の見取図」、「自らの独自の使命」、「召命」を悟り自己実現していくのである。

オルテガの思想は初期においては新カント主義の純粋理性を重視する①「客観主義」であったが、②「遠近法主義」の中期を経て、後期において③「生・理性主義」に至る。オルテガのこの生・理性はデカルトが「我思うゆえに、我在り」と宣言し「理性」を存在の出発点としたのに対して、「我生きるゆえに、我思う」として「理性」よりも「生」を優先させる。これは私見によれば、環境から提起される問題に対処していく人間的生の真摯な姿勢を如実に表している。さらにオルテガの生・理性主義は具体的人間のあり方や運命の問題に応えるために社会的環境だけでなく

歴史的環境をも要求し、そこに「歴史的理性」が要請されてくるのである。[9]

以上、オルテガの人間的生の哲学が提供する人間像は「環境」という空間的広がりと、歴史における「使命」の弁証法的展開という時間的発展を視界におさめているという点で、ポストモダンの基礎的人間像の原型を提示するものと言える。

IV. 人格システム・社会システム・国際システム・宇宙システム

そこでオルテガの提供する生・理性の人間像をさらに精緻化し洗練すべく追求すれば、ポストモダンの求める人間像の一つの可能性として、筆者が拙著で提案した人格システム論・社会システム論のごときものが考案されてくると思われる。

筆者の人格システムは前述したように相互主観的意味世界のなかに構築され、現実と価値、思考と感性を交差させることによって知性（G）・理性（I）・本能（A）・感情（L）と四区分され、外界の意味世界は直観・関心によって認識される。人格システムの目的性は図示したように、思考（知性・理性）の目的性、感性（本能・感情）の手段性、認識（直観・関心）の基盤性より成り、また時間性は思考（知性・理性）の過去性、感性（本能・感情）の現在性、認識（直観・関心）の未来性と設定される。人格システムの発展・運動に関しては、システムに内在する相対立する逆方向の二つの運動、すなわち目的性・手段性・基盤性からなる「目的性」系列の運動と過去性・現在性・未来性からなる「時間性」系列の運動との相互作用によって、人格システム自体が弁証法的・螺旋的に発展・拡大していくのである。ここでの「目的性」とは「意味の発展・拡大」であり、「時間性」とは「意味の発見」である。ともに意味を充満・充実させることで人格（意識）システムの発展・拡大に寄与するのである。かくして人格システムにおいては、①エロスに基づく利己主義的人間（A）→②フィリアに基づく相対主義的人間（L）→③アガペーに基づく人格主義的人間（I）→④神に祈る運命愛に基づく中道主義的人間（G）→⑤宇宙即我の体験という弁証法的・螺旋的な発展段階が想定される。この人格システムの構造・機能・運動は、政治（G）・制度（I）と経済（A）・文化（L）より成る社会システム、先進諸国(G･I)と発展途上諸国(A･L)より構成される国際システム、精神

---

[9] J. Lasaga Medina, *Ortega y Gasset (1883-1955)*, Madrid, 1997; A. Gaete, *El Sistema maduro de Ortega y Gasset (La Metafísica de Ortega y Gasset)*, Buenos Aires, 1962; J. Marías, "Ortega, Circunstancia y vocación", *Obras*, Tomo IX, Madrid, 1982; C. Morón Arroyo, *El Sistema de Ortega y Gasset*, Madrid, 1968.

世界（G·I）と世俗世界（A·L）より成る宇宙システムにも同じように適用できるはずである。ちなみに社会システムにおいては、①プレモダン社会における伝統的統治（A）→②近代社会における民主主義的統治（L）→③ポストモダン社会における人格発展を基盤とした正義による統治（I）（→④（G））と弁証法的・螺旋的に発展する社会発展論が考えられよう。

さて人格システムにおける「目的性」はウェーバーやパーソンズの行為論でも前提されているように、目的ー手段の連続的・弁証法的連鎖で構成される人間的思惟や行動には普遍的な概念である。また「時間性」はフッサールやハイデガーの現象学で考察されている時間性をヒントに考案された概念であり、この概念はハイデガーやアドルノの「垂直存在観」批判・同一性的形而上学批判、オルテガの言う「人間的生」の態様、ベルクソンの「流れる時間」としての「持続」、ミンコフスキーの「生きられた時間」、デリダの「脱構築」、フーコーの「知に内在する権力性」の批判などにも通じる概念であろう。したがって人格システムにおける「目的性」はいわゆる「同一性の真理」を追求するのに対して、「時間性」は「差異の真理」を探求していると言えるであろう。そしておそらく、今後のポストモダンの思想は、この「同一性の真理」と「差異の真理」との統合の方向へ、すなわち「目的性」と「時間性」との弁証法的発展・統合の方向へ向かうのではなかろうか。さらに筆者はこの「時間性」と「目的性」の概念が、東洋の仏教思想上の「空」性と「無」性の概念に相応するのではないかと考えている。以下、これについて考察してみよう。[10]

V．人格システムにおける時間性と仏教的「空」性

筆者は人格システムの「時間性」はおおむね、仏教が言及してきた「空」性にあたると考えている。「空」概念は仏教の根本的立場を示すキータームの一つであるが、初期の仏教では『小空経』などに定義がある。すなわち「何物かがそこに存在しないとき、それは何物かということでは空なのだ、とみる。しかもなおそこに何か余れるものが存在するとき、それこそは実在であると知る」。つまり、欠如・非存在が空であると同時に、その空において究極的実在が見いだされる、と言うので

---

[10] 前掲拙著（注7）：今村仁司、「形而上学批判」の項目、鷲田清一、「時間性」の項目、今村仁司編、『現代思想を読む事典』、講談社、1988年、180-183ページ、254-256ページ。

ある。また『般若経』の空観の大成者である龍樹は主著『中論』において「縁起せるほどのもの、それが空性であるとわれわれはいう」としている。縁起とは「これあればかれあり、これ生ずればかれ生ず・・・」という成句で言い表される。[11] さらに龍樹は『中論』の冒頭の立言において、有名な八不、すなわち「不生、不滅、不常、不断、不一、不異、不来、不去」の帰敬序を述べている。すなわち、「（宇宙においては）何ものも消滅することなく、何ものもあらたに生ずることなく、何ものも終末あることなく、何ものも常恒であることなく、何ものもそれ自身と同一であることなく、何ものもそれ自身において分かたれた別のものであることはなく、何ものも（われらに向かって）来ることもなく、（われらから）去ることもない、というめでたい縁起のことわりを、仏は説きたもうた」と言うのである。[12] 事物はすべて他の事物と相対的、相互依存的であることを意味し、それゆえに「実体がない」、「自性がない」、すなわち「無自性」が「空」の意味であるとされる。自性とは「自己に固有の性質」（龍樹）であり、①変化しないもの、②他に依存しないもの、という性格の絶対存在を意味する。したがって「縁起ゆえに無自性空」は、有と無、生と死を超越する「中道」と同義語となる。「中道の空においては、有と無とを超越するゆえに、有はそのまま無である」。同様に、「生死は自性として生死ではなく、涅槃は涅槃ではないゆえに、『生死はそのまま涅槃（生死即涅槃）』なのである」。[13] かくして龍樹は「空」そのものの「真実」を「他によらず、静寂であり、戯論によって戯論されず、分別構想がなく、多種多様性をもたない。これが真実の特徴である」と言っている。[14]

さらに、仏教の「四法印」の①一切皆苦・②諸行無常・③諸法無我・④涅槃寂静のうち、諸行無常と諸法無我は一般的縁起に言及したものと言われる。「諸行無常」は「現象の時間的な因果関係についていい、諸法無我は現象の時間空間における具体的または論理的関係を示したもの」であって、「それらの関係を法則化したものが縁起説である」。つまり、諸行無常とは「すべての現象世界は無常である」とい

---

[11] 長尾雅人、「空」の項目、『国際ブリタニカ百科辞典』第6巻、ティービーエス・ブリタニカ、1994年、1-3ページ。

[12] 中村元、『ナガールジュナ』人類の知的遺産13、講談社、1980年、103ページ、126-128ページ。

[13] 長尾雅人、前掲項目、2ページ。

[14] 斎藤明、「空」の項目、広松渉他編、『岩波思想辞典』、岩波書店、1998年、373-375ページ。

うことを意味する。「無常とは変化すること」である。しかし「無常であるから衰え亡びることもあるが、無常であるから生成し発展することもある」のである。[15]

以上から考察するところ、「空」とは縁起であり、諸事物の空間的な相互依存関係だけでなく時間的な原因結果関係をも意味し、「移ろいゆくこと」、「変化してゆくこと」、それゆえ「執着しないこと」を意味していると思われる。こうした解釈は「空」概念を筆者の人格システムの「時間性」概念に非常に近いものにするのではなかろうか。というのは筆者の呈示した人格システムのAGIL図式はパーソンズの構造機能主義の発想に基づいた仮説であり、そのA・G・I・Lの各領域・各下部システムはやはり、多重的なシステムのなかで相互依存関係にあるからである。さらにそれと同時に、人格システムにおける「時間性」は、直観・関心としての未来性が本能・感情としての現在性に増幅され知性・理性の過去性を「変化」させることから、時間的な原因結果関係である「縁起」としての仏教的「空」性と同じものと言えるからである。あるいは社会システムにおいても、時間的に技術／科学・思想／宗教などの未来性が経済／文化の現在性に受け入れられ、政治／制度の過去性を改変していくという「時間性」は、時系列的な因果関係を経て「変化していく」仏教的「空」性を表している。

VI. 人格システムにおける目的性と仏教的「無」性

他方、「諸法無我」とは「一切の存在は時間的にも空間的にも、他のものと相関的相対的に存在するのであって、孤立し固定したものは何一つ存在しない」ことを意味する。すなわち諸行無常は時間的な因果関係としての縁起を示し、諸法無我は空間的・論理的な因果関係としての縁起、すなわち相互依存関係を意味している。[16] とすれば、諸行無常は筆者の「時間性」に、諸法無我は筆者の人格システムの単位間の相互依存関係、あるいは、人格システムの「目的性」に当たると言えよう。

以上に対して、一切皆苦と涅槃寂静は価値的縁起と呼ばれる。すなわち、「一切皆苦」の意図は、「理想を求める宗教心に目覚めるときには、かならず現実世界を苦であるとか罪垢に充ちているとかいうように、現実への不満や欠陥を見るように

---

[15] 水野弘元、「初期仏教の縁起思想」、宇野精一・中村元・玉城康四郎編、『仏教思想Ⅰインド的展開』講座東洋思想５、東京大学出版会、1967年、134ページ。

[16] 水野弘元、同上書、131-137ページ。

なる」ことである。それゆえ「一切皆苦の命題は宗教信仰への出発点として、なくてはならないものである」。他方、「涅槃寂静」とは、一切皆苦という現実の観察の結果得られる「さとりの理想の状態」である。前者の一切皆苦は「迷いの苦悩に至る場合の反価値的な縁起」、「生死の苦界に輪廻流転する」「流転縁起」を意味し、後者の涅槃寂静は「悟りの浄楽に至る場合の正価値的な縁起」、「迷いの世界から苦の滅した浄楽の悟りの世界へ還る」「還滅縁起」を言う。かくして仏教的に人間の「発展性」を考察すれば、人間は①「一切皆苦」の「この世は生老病死、すべて苦に満ちている」という環境世界なかで、②「諸行無常」（「時間性」＝仏教的「空」性）と③「諸法無我」（「目的性」＝仏教的「無」性）を通じて、④「涅槃寂静」の「天地一切・森羅万象が明らかな悟りの世界」をめざすことになる。[17]

ところで「無」は、中国の老荘思想が強く打ちだした思想であるが、仏教の中国「禅」が「空」理解にあたって「無」の思想を生かした。無着・世親に代表される大乗仏教はその無我説にもあらわれているように、末那識や阿羅耶識のごとき自己も「無」に消し去る。しかし筆者の考えるところ、シャカの説いた原初の仏教では自己は存在するのであって、ここでは「無」は「有」の対極にあるものとして用いられ、「自己目的の実現」や「悟り」のための有効な契機を与える思想であった。[18] 日本ではとくに西田幾多郎が「絶対無」や「場所」の思想によって「無」の思想の体系化・深化に努めた。筆者は最終的な「悟り」・「宇宙即我」の実現のために、「有」・「存在」に対極するように「無」の思想体系が考案されたと考えている。したがって東洋的には「空」思想に媒介されて、人間が声聞→縁覚→菩薩→如来と上昇することによって、また西洋的には「目的性」・「時間性」の弁証法的相互作用により人間が利己主義→相対主義→人格主義→中道主義と上昇することによって、「有」（目的性）から「無」（時間性）に向かうその最終地点に「悟り」があるのである。

さてここで東洋思想の中核観念の「無」を西洋の論理で解明しようとした日本を代表する独創的哲学者西田幾多郎の「絶対無」にいたる発展段階を検討してみよう。

---

[17] 水野弘元、同上書、138-140ページ。

[18] 金子武蔵、「無」の項目、『国際ブリタニカ百科辞典』第19巻、ティービーエス・ブリタニカ、1994年、180-182ページ：玉城康四郎、「無我」の項目、山崎正一・市川浩編、『現代哲学事典』、講談社、1970年、581-583ページ。

西田の無の発展段階は自然界（有の場所）、意識界（対立無の場所）、叡知界（絶対無の場所）と三段階に構成される。すなわち物（自然的事象）が「有の場所」（自然界）にあり、意識現象（意識的事象）が「意識の野」（意識界）にあり、叡知的・人格的自己（叡知的事象）が「絶対無の場所」にあるのである。西田特有のこの「場所」とは、一般に「ものが（そこに）於てある」場所のことであり、「ものを自己の内に包摂するもののこと」である。さらに西田は、「場所」の思想を『一般者の自覚的体系』において体系化し、『無の自覚的限定』において具体化する。すなわち『働くものから見るものへ』の三種の場所、「有の場所」、「意識の野」（対立無の場所）、「絶対無の場所」を『一般者の自覚的体系』で「判断的一般者」（自然界）、「自覚的一般者」（意識界）、「叡智的一般者」（叡智界）と規定し、それらの間に他の一般者を挿入し一般者の自覚的体系として体系化し、『無の自覚的限定』ではそれらの一般者を絶対無の自覚的限定・自己限定の諸相として具体化したのである。すなわち「判断的一般者」と「自覚的一般者」の間に両者を結ぶ「推論式的一般者」が、また「叡智的一般者」の極限に超一般者・最終一般者としての「絶対無の自覚」が、「叡智的一般者」と「絶対無の自覚」の間に「表現的一般者」と「行為的一般者」が考えられるようになった。つまり三種の場所で成立していた「場所」の体系は七種の一般者（①「判断的一般者」（有の場所・自然界）→②「推論式的一般者」→③「自覚的一般者」（対立無の場所・意識界）→④「叡智的一般者」（絶対無の場所・叡知界）→⑤「表現的一般者」→⑥「行為的一般者」→⑦「絶対無の自覚」）から成る「一般者」の体系へと発展していったのである。[19]

---

[19] 小坂国継、『西田哲学と宗教』、大東出版社、1994年、202-204ページ：小坂国継、『西田哲学の研究 －場所の論理の生成と構造－』、ミネルヴァ書房、1991年、221-282ページ：西田幾多郎、「一般者の自覚的体系」、安部能成他編、『西田幾多郎全集』第5巻、岩波書店、1978年：西田幾多郎、「無の自覚的限定」、安部能成他編、『西田幾多郎全集』第6巻、岩波書店、1978年。＊判断的一般者の前に分類的（類概念的）一般者を立てたり、狭義の表現的一般者を叡知的一般者の前に置く場合もある。＊西田は「根本的実在」、すなわち「最も直接的に与えられていると同時に日常的なものの最内奥にあり、主観と客観の対立以前の（あるいはかような対立を超越した）、個物的であると同時に普遍的でもあるような非対象的・非実体的な実在」を求めて、①「純粋経験」、②「自覚」、③「絶対自由意志」、④「場所」、⑤「弁証法的世界」、⑥「絶対矛盾的自己同一」と発展する各時期を経験する。（同上書、75ページ、78ページ。）

さて、こうした「無」とは実際にはいかなる境地なのか、これに関しては久松真一が「東洋的無」について次のように考察している。久松は「東洋的無」の内容を消去法によって解明している。まず第一に、通常の無としては「存在の否定としての無」（たとえば、机がない、喜びがないなど）があるが、東洋的無とは、「無差別平等であって、そこにはなんら、[実体的に]あるべきものはない」という、「無的な境涯」をいうのである。第二に、「賓辞的否定としての無」としては、たとえば、喜びは悲しみではない、真如はどれでもないなどと使用されるが、東洋的無は、あらゆる賓辞を絶した「積極的な無、絶対的なもの、実在」である。第三に、「理念としての無」には、たとえば、無は有ではない、というような抽象的・論理的理念としての無、ヘーゲルの、有一無一成の弁証法の無、同じ理念としての有に対立するものとして、相対的な概念としての無などが考えられる。しかし東洋的無とは、有無の対立を絶した絶対的な意味での「絶対無」であり、むしろ「真の有」であり、無即有、有即無であるような「無」である。それゆえ言葉の超言語的使用、論理の超論理的使用が必要である。第四に、「想像された無」としては、有る者が無いように想像される、主観的な「想境」が挙げられるが、東洋的無とは客観性、必然性、さらに現実性、実在性を有す。「所観の境」ではなく、「能観の心」であり、両者一体の「能所一体心境雙忘の無的主体」である。第五に「無意識的な無」の例としては、熟睡、気絶している状態があり、ここでは無ということも意識されない。これに対して、東洋的な無とは、最も自覚的な無であり、「無念無想のときほど覚めた状態はなく、犬死のときほど真に生きている状態はない」。その自覚は主観的な自覚ではなく、能所一体的ないし三昧的な自覚である。

さらに久松は「東洋的無」の性格について次のような規定を挙げている。それは第一に、個人の無的な境涯、私自身の無性をいう「無一物性」、第二に、「虚空性」としては、①万物のなかで障害なきをいう「無障礙」、②あまねくいきわたっている「周遍」、③好嫌なく一切のものに平等にいきわたっているを意味する「平等」、④広大にして際限がない「広大」、⑤色相を絶し、形がない「無相」、⑥虚空自身は少しも汚れはない「清浄」、⑦生成も消滅もない「不動」、⑧量ることができない「有空」、⑨空でありながら空に執着しない「空空」、⑩ものに執着しない「無得」、⑪唯一不可分をいう「唯一性」、⑫内外の区別なく、内に対立を絶し、外に差別なき自己としての「無内外」、第三に、「自心是仏」、「即心即仏」を意味する「即心性」、第四に、対象的・ノエマ的ではなく、主体的・ノエシス的な心であ

る「自己性」、第五に、感性的自由や、カントの意志の自律や、孔子の「心の欲するところに従って矩をこえず」という理性的自由をも越えた「独脱無依の自由人の境涯」、すなわち「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺す」の境地や、無分別の世界や分別の世界を超えた「無分別の分別」の境地を意味する、自由の弁証法たる「自在性」、第六に「一切唯心造」と悟る、能動性と創造性とを結合する「能造性」などである。[20]

Ⅶ. おわりに

以上、筆者はポストモダンにおける政治哲学の一側面として、筆者の人格システムの「時間性」と仏教的「空」性、「目的性」と仏教的「無」性との照応性を論述してきた。オルテガの生・理性による人間的生の哲学にしろ、筆者の人格システムの自律的発展論にしろ、また西田幾多郎の「絶対無」の場所の思想にしろ、東西にまたがるポストモダンの思想が求める人間像は「近代」の原子論的・抽象的個人ではなく、空間的・時間的に広がり伸びゆく環境性と発展性をもった具体的個人であった。ちなみにこれらの三者の見解を意味の多様化・相対化からその統一・統合に向かうとする発展論で捉えた上で、オルテガ哲学の発展段階と西田の絶対無にいたる発展段階とを筆者の人格システムの発展論に対応させれば、オルテガの①客観主義と西田の①判断的一般者（有の場所）には筆者の①利己主義の段階が、オルテガの②遠近法主義と西田の③自覚的一般者（対立無の場所）には筆者の②相対主義の段階が、オルテガの③生・理性主義以後と西田の④叡知的一般者（絶対無の場所）以降の段階は筆者の③人格主義以後の段階が照応するであろう。これらの新しい人間像によって担われるスピリチュアリズム（精神主義）の思想こそが今後のポストモダンの人類社会を形成していくべきではなかろうか。筆者はこうした考察が、ヨーロッパ「近代」を超えるポストモダン時代の東西両思想の統合・融合の可能性を開拓していくにちがいないと思っている。

---

[20] 小坂国継著、『西田幾多郎をめぐる思想家たち －近代日本哲学と宗教－』、ミネルヴァ書房、1997年、298-311ページ：久松真一、『東洋的無』、講談社、1987年。

ピカソのバルセロナ時代

浅若みどり

序

バルセロナの出版社から出ている子ども向けの絵本に「ピカソとカタルーニャのつながりは、様々な時期と作品において決定的なものだった」という一節がある[1]。

ピカソは青年時代をバルセロナで過ごした。モンカダ通りのピカソ美術館には初期の作品が集められている。また、現代美術を一新したとされるキュビズムの様式を初めて実現した《アヴィニョンの娘たち》のアヴィニョ通りもバルセロナの一角である。だが、外国人による評伝や画集などの一般向けのものには、ピカソとカタルーニャの関係を強調する記述はあまり見られない。ピカソの生きた93年という長い生涯の内、バルセロナで過ごした期間は通算してもわずか8年足らずに過ぎない。最も代表的な作品は、ほとんどフランスで制作されている。フランスでも闘牛と地中海を愛したピカソが、ペンローズの言うように「本質的にスペイン人」だったことは確かだとしても、ことさらカタルーニャを特筆するには及ばないようにも思われる。

しかし、19世紀末当時の保守的なスペインにおいては、革新的な芸術様式を受け入れる土壌の整った都市は、バルセロナをおいて他になかった。ピカソがその才能を開花させるためにはスペインを出る必要があったが、スペインの外に目を向けさせ、さらに異国において「本質的にスペイン人」でありつづける青年ピカソを育てることができた都市は、バルセロナ以外に考えられない。本稿ではピカソのバルセロナ時代を再考し、その意味で「ピカソとカタルーニャのつながりが決定的だった」ことを確認したいと思う。

I　マラガからラ・コルーニャへ

1881年10月25日、パブロ・ルイス・ピカソは、絵画教師の父ホセ・

---

[1] Fina Duran i Riu, *Pequeña historia de Picasso*, Editorial Mediterrànea, Barcelona, 1985.　シリーズの第4巻。上記の記述は同書最終頁。

ルイス・ブラスコと母マリア・ピカソ・イ・ロペスの長男としてマラガに誕生した。マラガには叔父サルバドールを始めとする親戚が住んでおり、ピカソ一家も毎年のように帰省している。父ドン・ホセは闘牛に目のない、根っからのアンダルシア人だった。だが家計の事情から91年にラ・コルーニャの美術学校に転勤。ピカソはこの頃より父の指導の下に絵を学び始め、間もなく個展を催すほどの腕前を見せている。

95年3月、ドン・ホセはバルセロナのロッチャ（ラ・ロンハ）美術学校と契約を結んだ。アンダルシア人のドン・ホセにとって、再び地中海近くに居を構えるのは願ってもないことだった。一家は夏のマラガ帰郷の際マドリードに立ち寄り、ピカソはこの時初めてプラド美術館を訪れ、ベラスケスの作品を模写している。9月にバルセロナに入り、波止場近くのクリスティナ通りのアパートに移り住んだ。

ピカソは父の勤めるロッチャ美術学校に入学した。その際、通常は1ヶ月かかる課題をたった1日で仕上げ、古典芸術・静物上級コースに飛び級で入ったというエピソードが伝えられている。学校は「きまりきった訓練が天賦の才能を持たない生徒たちの想像力と才能とを破壊」[2]する代物だった。ピカソは後日、以前に父親のアドバイスだけで描いていた頃の方が良かったと述懐している。年上の同級生たちの間でもませた少年だったというが、早熟というよりは学ぶ前から既に完成の域に達していたような所があり、いわゆる「子ども絵」は一度も描いたことがなかった[3]。

この冬、大作《初聖体》（図版 1）が完成した。流れるような白いヴェールをつけ、祭壇の前に跪く妹のローラと、その横で威厳をたたえて娘をじっと見守る父ホセ。聖体を初めて授かるカトリック教の儀式である。計算の行き届いた構図と確かな質感の表現力は高い評価を得た。この作品は翌年の4月23日から6月26日までバルセロナ美術工芸展に出品され、既に名声を博していたサンティアゴ・ルシニョールやイシドレ・ノネイ[4]の作品と共に並べられた。

II　アカデミズム

1896年夏、一家はついの住まいとなるメルセ通り3番のアパートに移った。この年ピカソはマラガで叔母のペパの肖像画（図版2）の他、風景

---

[2] ペンローズ『ピカソその生涯と作品』新潮社　1978年　42頁。
[3] 神吉敬三編著『ヴィヴァン 25人の画家　ピカソ』講談社　1995年　67頁。
[4] Santiago Rusiñol (1861-1931). 画家、作家。
Isidre Nonell (1873-1911). 画家。

画を数点制作した。ほとんどが単純にアカデミックな作品で、淡々と抑制された画面にはベラスケスに通じる静謐さが感じられる。

バルセロナに戻った頃から、「エデン・コンサート」など若い芸術家の集まりを催すようになった。この年バルセロナではミュシャやロートレックのポスター展が開かれた。こうした中、ピカソは友人を通して国際的な世紀末芸術の動きに親しんでいくのだが、それが画面に表れるのはもっと後のことになる。

97年には《初聖体》に続くアカデミックな大作《科学と慈愛》(図版3)が完成した。前作よりも軽やかな筆致で描かれている。主題は父親のすすめに従ったもので、当時こうした主題は批評家の受けが良かったとされる。画面中央のベッドには病に付した女性が横たわり、その奥におそらく患者の子どもを腕に抱いたシスターが立っている。左手前では医者が患者の脈を取っている。この医者はドン・ホセがモデルを務めた。脈を取られている患者の手は土色で、どう考えてもこれは手袋だという手厳しい批評もあった[5]。瀕死の患者は実際そんな手をしているはずだと思ったのだろうか。いずれにせよ、デッサンの正確さ、それも描く対象を観察して感情をまじえずに表現する力は明らかにずば抜けていた。この作品はマドリードの国展の佳作と、後にマラガの展覧会で金賞を受賞する。展示後は、経済面でずっと一家を支えてきた叔父のサルバドールに贈られた。

この年マラガに帰った時、ピカソはいとこのカルメン・ブラスコに淡い恋心を抱いたが、結局何もないまま終わっている。一族の誇りとなろうピカソをマラガに留めたがった親戚一同は、こぞって落胆した。これが周囲の期待を裏切る手始めとなり、次第に家族の手から離れていく。父ホセと叔父のサルバドールは、乏しい中からやり繰りして、そんなピカソをマドリードのサン・フェルナンド美術アカデミーに送る計画を立てた。

97年10月、ピカソはサン・フェルナンドに転校した。再び課題を1日で仕上げ、風景画と彫塑デッサンのコースに入った。だが、アカデミーの授業は1にも2にもデッサンを叩き込む、伝統に凝り固まったものだったため、その段階をとうに越えていたピカソには退屈極まりなかった。マドリード生活の唯一の利点は、初めて本当にひとりで好きなように描く機会を得たことだった。授業に出るよりも通りやカフェで人々をスケッチする方を好み、プラド美術館にも足繁く通った。エル・グレコやベラスケスの模写に打ち込んだが、その模写が「モデルニズム」風だったため、父ホセは「間違った道を歩んでいる」と嘆いた。

---

[5] ペンローズ　前掲書　44頁。



図１《初聖体》

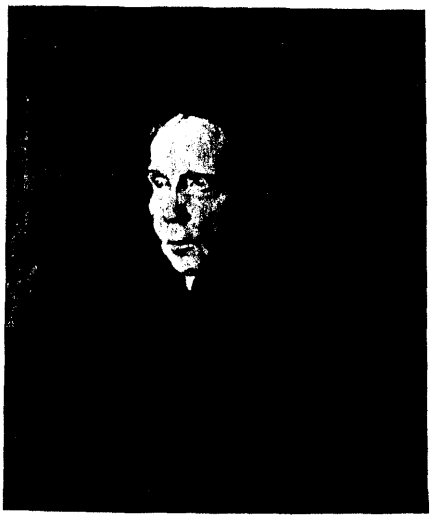


図２《ペパ叔母の肖像》

おそらくピカソは《科学と慈愛》を完成した時点で、古典的な手法による描写力は完成している、今の課題はその殻を打ち破ることだと考えたのだろう。ひとところに収まってよしとしない、ピカソが生涯貫いた信念である。

マドリードでは金銭的にも逼迫し、結局冬にはアカデミーを退学、春には猩高熱に倒れた。98年5月にバルセロナに戻り、6月からマニュエル・パリャレスの実家オルタ・デ・エブロで療養した[6]。ここで松林や山々など田園風景を描きつつ、農夫たちに交じって過ごす内にカタルーニャ語を覚えた。

Ⅲ　「四匹の猫」

ピカソは99年2月にオルタ・デ・エブロからバルセロナに戻ると、メルセ通りの家を出て、グラフィックアーティストとして身を立てることにした。アンダルシア訛りのスペイン語とカタルーニャ語を話す17歳の天才は、浮いた存在ではあったが、親切な友人に恵まれてはいた。カルドナ兄弟[7]のアトリエ「エスクディルィルス・ブランクス」に転がり込み、続いてラモン・ピチョットのアトリエに押しかけて占拠した挙句、「エデン・コンサート」で知り合ったソト兄弟[8]の兄マテウと共同で借りたアトリエに落ち着いた。

この頃バルセロナの街には、米西戦争で負傷した帰還兵が溢れていた。芸術の潮流としては、フランスのアール・ヌーボーやイギリスのラファエル前派といった外国の世紀末美術様式が、ほぼリアルタイムで届いていた。そうした中でピカソの住みついたアトリエは、いわゆる「バリオ・チノ」にあった。料理屋の匂いが立ち込める通り、売春婦の立つ街角、人々がひっきりなしに行き交う大通り。下町の生き生きした空気の中で、ピカソは友人等をモデルに、エル・グレコやロートレックを思わせるパステル画を量産した。ピカソがのびのびと制作した、というよりは気兼ねなく新しい芸術の流れに浸ることができたのは、この時が初めてだった。

4月頃から「四匹の猫」に通うようになった。この店名はボードレールやヴェルレーヌ、ランボー等が通ったモンマルトルのカフェ「黒猫」(Le Chat

---

[6] Horta de Ebro、現在は Horta de San Joan。Manuel Pallarès(1867-1974)は美術学校時代の友人で、画家。

[7] Joan(1877-1957), Josep Cardona (1878-1923). 兄ジョアンはイラストレーター、弟ジュゼップは彫刻家。

[8] Mateu (1881-1938), Angel (1887-1938) Fernández de Soto.

Noir)をもじったものだが、カタルーニャ語の Els Quatre Gats には「我々はたかが4匹の猫、大した奴はいない」という意味合いがあるという。ここにはルシニョールや思想家のエウヘニオ・ドールス、画家ラモン・カサス、美術史家のミケル・ウトリリョ等が出入りしていた。一世代下のノネイやジョアキム・ミールなど、近代バルセロナ画壇の代表的存在も常連だった。ピカソの親友となるカルレス・カサジェマス、1930 年から没年までピカソの秘書を務めることになるハイメ・サバルテスも通っていた[9]。ピカソは店主ペレ・ロメウの依頼で店のメニュー（図版4）や広告ビラなどを描いた。また翌 1900 年の2月と7月には店で個展を開催している。

彼らは「四匹の猫」に集まってはカタルーニャの独立問題など、共和主義思想に基づく政治議論に花を咲かせた。歳若いピカソはこの種の話題で息巻くことはなかったようだが、ブルジョワを嫌い、民衆側につく姿勢を身につけた。この頃、無政府主義者のジャウメ・ブロッサが次のような評論を書いている。「個人が自由に思想を育むことにはどんな妨害も許されるべきではない。…神であれ人であれ、個人の全き自由を阻むべきではない。この理論が全体を崩壊することになると言う人々もいるが、…失われた力を新生し再建する積極的な精神でもあるのだ。『私』というカメラ・オブスキュラの奥深くに潜む、素晴らしい世界像につながるターニングポイントへと導くものだ」[10]。ペンローズはピカソが 40 年経ってからブロッサの思想に対する反響として「私の作品は破壊の歴史だ」と述べたことを指摘している[11]。ピカソが終生まとった破壊的な性格は「四匹の猫」で培われたのかもしれない。ピカソは「いつもひとを周囲に集めずにはいられない」が、そうしておいて「誤解を挑発」する。だが、ピカソの破壊は常に建設的な意図に裏打ちされている。「持続を認めない。だからこそ、逆に、いたるところに道が見える」のだ[12]。

この頃のピカソはアカデミズムの持続を認めることこそやめていたものの、まだ周囲を渦巻く新芸術の潮流に呑まれるばかりで、道が見えるまでには至っていない。ともすれば女性との関係ばかり取り沙汰されがちなピカソだが、決定的な役割を果たした男性の友人は数多い。「四匹の猫」

---

[9] Eugenio d'Ors (1882-1954), Ramón Casas (1866-1932), Michel Utrillo (1862-1934), Joaquim Mir (1873-1940), Carles Casagemas (1880-1901), Jaime Sabartés (1882-1968).

[10] Patrick O'Brian, *Pablo Picasso; A Biography*, W.W. Norton & Company, New York, 1994, p.71.

[11] ペンローズ　前掲書　57 頁。

[12] 引用は W.ベンヤミン『複製技術時代の芸術』　紀ノ国屋書店　1965 年 100-102 頁。



図３《科学と慈愛》



図４《「四匹の猫」メニュー》



図５《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》



図６《カサジェマスの死》

でピカソは多くの友人を得た。中でも最大の鍵を握るのはカサジェマスだろう。このカサジェマスが失恋を痛手に自殺したことが、ピカソが活路を見出す契機になったとされる。

Ⅳ　カサジェマスの死

ピカソよりひとつ年上のカサジェマスは、ペンローズの言を借りれば「ぶざまな風貌」の変わり者だった。1899 年夏、ピカソはカサジェマスと共にマラガで過ごしている。この時地方美術展に《最後の瞬間》を出品した。この他にもピカソは「四匹の猫」における個展や、『ジョヴェントゥ』『カタルーニャ・アルティスティカ』などの進歩的雑誌で盛んに作品を発表している。いずれもアール・ヌーボーの影響が色濃く、独創性には欠けていた。

明けて 1900 年、ピカソとカサジェマスはリエラ・デ・サン・フアン 17 番地にアトリエを借りた。2 月 24 日、4 月開幕のパリ万博に《最後の瞬間》が展示されることが決定した。10 月にピカソはカサジェマスと共に初めてパリに向かい、ノネイの借りていたガブリエル通り 49 番のアトリエに住みついた。この際旅費が不足したので、その分はカサジェマスが負担したという。

万博会場ではロートレック、セザンヌ、ドガ、シニャック、ヴュイヤールなどの作品を初めて直に見ることができた。また劇場に通って描かれた場面を目の当たりにし、そうする内に作品にも変化が現れ始めた。パリで制作した《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》（図版 5）は、ロートレックやルノワールの筆でよく知られる老舗のキャバレーが舞台である。主題としてはありふれているが、漆黒の夜に灯火の明かりや女性たちの衣装で色が散りばめられ、匂うような熱気を醸した画面には、他の画家とは異なる若さが感じられる。他に「抱擁」や踊り子を主題とした作品を制作している。中には、幻想的で、むしろシャガールを思わせるものもある。

10 月末には二人のアトリエにパリャレスが移ってきた。3 人はそれぞれ女性のモデルを雇った。カサジェマスは自分のモデルのジェルメーヌ・ガルガロを恋するようになったが、悲恋に終わる。ピカソは親友を励ますため、新年をマラガで一緒に過ごす計画を立てた。だが、パリ帰りの二人がとてつもない服装で現れたため、今回は全く歓迎されなかった。痛手の深いカサジェマスは酒浸りになり、ピカソも筆があまり進まなかった。ピカソはこれ以降二度とマラガに行かなくなった。

翌 1901 年 1 月 28 日、ピカソはマドリードに向かった。一方のカサジ

ェマスはジェルメーヌへの想いを断ち切れぬまま、バルセロナに戻った後再びパリに赴いた。2月17日、ピカソはカサジェマスがモンマルトルのレストランでピストル自殺を遂げたとの知らせを受ける。ピカソはそのままマドリードに残り、4月にはパリに飛んだ。評伝の多くはこれ以降を「青の時代」として区分している。

ピカソがカサジェマスの死を消化して形にしたのは、この年の8月になってからである。それまではまるでまともに向き合うのを避けるかのように、バルセロナからも遠ざかり、別の活動に打ち込んでいた。

V「青の時代」へ

カサジェマスを慰めるのに失敗したピカソが、およそいい思い出のないマドリードに向かったのはなぜか。サン・フェルナンドに通った時よりはましなことになっているのではないかと期待したのかもしれない。だが、相変わらず「最初に着いた所では、…きちんとした時間で動くのにうんざりした。…モデルニズムはこの『非ヨーロッパ』の都市マドリードにやっと入ってきた所だった。…バルセロナがパリと比べると地方に見えるなら、マドリードは、プラドを除けば、砂漠だった」[13]。3月、マドリードにも芸術の新風を吹き込むべく、友人のソレール[14]と雑誌『アルテ・ホベン』を発刊するが、結局5号で廃刊に追いやられる。これでマドリードに見切りをつけ、4月にバルセロナに戻るが、すぐにパリに向かっている。

モデルニズム一辺倒になっていたピカソは、マドリードにいた時も新たな境地を求めて、トレドに足を運んでいる。パリではルーブルで古代エジプトやフェニキア美術に親しみ、クリュニー美術館でゴシック彫刻を眺め、リュクサンブール美術館で印象派の作品をみて回った。「多くの先人の技法を借りて、それを自己のものにしてゆくみのり豊かな研究と実験の時代であった」[15]。いつもに増して精力的な活動を展開し、カフェ「ラ・ジュット」の装飾をまかされ、第一級の画商ヴォラールのギャラリーで展覧会を開いた。この展覧会はバスク人画家イトゥリーノとの二人展だったが、18歳のピカソが出した64点は好評を博した。

この間、ピカソはカサジェマスが所有していたクリシー通りのアトリエ

---

[13] O'Brian, *Op.cit.*, pp.93-104.

[14] Francisco Asis Soler (1880?-1903). カタルーニャ人作家。ソレールが文学、ピカソが美術記事の編集と挿絵を担当した。この活動を通じて、ピオ・バロハやウナムーノなど「98年の世代」との交流もあった。

[15] ペンローズ、前掲書、79頁。

に別の友人と住んでいた。親友の死から半年経った８月、まず《カサジェマスの埋葬（追憶）》を完成させた[16]。画面下部に横たわる遺体とそれを囲んで悼む人々、その上に雲に乗って上昇する人物群が配せられている。おどろおどろしいタッチにも拘らず、人々が悲しみをこらえて硬直している様子がわかる。ペンローズは、間近で体験した親友の死を適切に表現することを課題としたものだとしている。他にも同主題で数点手懸けているが、とりわけ《カサジェマスの死》（図版６）は、鮮やかな蝋燭の光に照らし出されて、水の流れに浮かびあがったように青ざめたカサジェマスの横顔が首から上だけ描き出されている。鮮やかな色使いと激しい筆運びにも増して、時が止まったような静謐さが感じられる。彼の死を真正面から見つめることができるようになった証といえよう。

この冬に制作した《髭のある自画像》の背景は青一色になった。「青の時代」の名称は、文字通り青を基調とした作品が多いことから来ている。それ自体はピカソ独自の手法ではない。ただし、やるせなさに満ち満ちていながら感情過多にならず、訴えかけもせず攻撃的でもない、それでいて確かに生を感じさせる叙情性は、ピカソの「個」から発したものだ。助けになれなかったカサジェマスの死、ひいては人生の痛みと向き合えるようになったピカソは、「芸術とは『悲しみ』と『痛み』の子どもで、…痛みは人生の基盤だと信じる」までになった[17]。

翌 1902 年１月、ピカソはパリで画商マニャックと結んでいた制作契約を突然打ち切り、バルセロナに戻った。1904 年４月まで再びパリとバルセロナの往復を繰り返し、それ以降は専らパリで活動するようになった。ピカソを「異国で生きる本質的にスペイン人の画家」に仕上げたこの２年間の活動を、最後に追うことにしたい。

VI《人生》

ピカソはいつものように友人宅に居候を決め込み、今回はアンヘル・フェルナンデス・ソトのアトリエに入った。「四匹の猫」やその他のランブラス通りのカフェで友人と話しこむ他は、ひたすら制作に打ち込んだ。昼近くなって起き出し、部屋が暑いのも気にせず、「新聞紙や椅子やサイドテーブルや、床をそのままパレット代わりに使った」[18]ほどの無頓着さで、

---

[16] ただし構想はスペインを出る前から練っていたらしく、細部は大分異なるものの、同じように上下３層構成の下絵が残っている。
[17] O'Brian, *Op.cit.*, p. 105.
[18] *Ibidem*, p.109.

夢中になって描きつづけた。

バルセロナに来て以来、どこか悲哀を帯びたサーカス団やアルルカン、貧しい「母と子」、乞食、狂人、盲人…取りようによっては社会批判とも取れるような主題が増えていった。《海辺の母子像》（図版７）のモデルは、パリのサン・ラザール監獄で見かけた母子である。「青自体もパリの夜の青からバルセロナの昼間の青に変わったが、それよりも大事なことは、パリのキャンバスに残っていた印象派の面影が完全に打ち砕かれたことだ。青はひとつの言語となり、…この女性の人生、ひいてはそもそも人生とは何か、考えずにはいられなくなる。…青は悲哀の表現手段なのである。」[19]。その他に、サバルテスなど「四匹の猫」の友人たちを次々とスケッチした。またこの頃エミリ・フォンボナの工房で彫刻も試している。

こうした作品は残念ながらバルセロナでは理解されず、思いが強すぎて形になっていないと批判された。再びパリが恋しくなった秋頃、バルセロナでカタルーニャ・ロマネスクおよびゴシック美術の大規模な展覧会が催された。ピカソは「古代イベリアとローマ帝国…という二つの文明が衝突して生まれたこの芸術を糧にした」[20]。この年制作の《二人の姉妹》、あるいは1907年の《アヴィニョンの娘たち》（図版８）に原始イベリア彫刻から霊感を受けたあとが見られる。展覧会後の10月パリに赴き、転々とした挙句マックス・ジャコブ[21]の部屋に転がり込んだ。この時はともかく困窮しており、キャンバスどころか食べるものすらまともに買えないありさまだったため、専らデッサンを制作していた。そのデッサンも大半は暖を取るために燃やしてしまったという。11月15日、ベルト・ヴェイユのギャラリーに作品が展示され、詩人シャルル・モリスの知己を得た。モリスはポール・ゴーギャンの友人でコレクターでもあり、ピカソに《ノア・ノア》のコピーを贈っている。フォーヴィズムの旗手ゴーギャンの描く、たっぷりとしたタヒチ女性は、腕や脚といった身体部分をそれぞれひとつのフォルムと捉えることを示唆したと思われる。

1903年の年明けには、ピカソはいつも通りバルセロナに戻った。当時パリで活躍したカタルーニャの芸術家は１年の内数ヶ月をパリで過ごし、残りはバルセロナで制作するのが普通だった。しかし、ピカソは国際的な名声を確立するためにはパリに留まる必要があると思い始めていた。この頃バルセロナは失業者が増え、大学が閉鎖され、街は荒廃し切っていた。

ピカソは１月から「抱擁」の主題に取り組み始め、５月にその頂点とも

---

19 Pierre Daix, *Picasso*, Preager, New York, 1965, p.37.
20 *Ibidem*, p.25.
21 Max Jacob (1876-1944). フランスの詩人、美術評論家、画家。

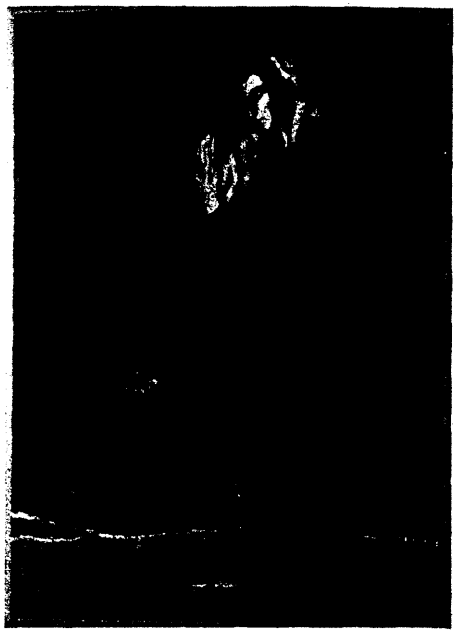


図７《海辺の母子像》



図８《アヴィニョンの娘たち》

いえる《人生》（図版９）を完成した。キャンバスがなかったため、この作品は《最後の瞬間》をつぶして描かれた。画面構成は、当初の構想では左側にピカソ自身、右側にエミリ・フォンボナを配する予定だった。最終的にフォンボナは「母と子」に変えられ、左の男性はカサジェマスに、彼に寄りそう女性はジェルメーヌになった。背景はアトリエの内部で、二つの人物群の間には身体を丸めた裸体画が上下に並べられている。ペンローズはこの作品が難解であることを認めつつ、背景に別の絵を書き込んだのは「苦しみをいっそう強く象徴するため」であり、後にピカソがキャンバスに物を貼り付けるコラージュの手法を用いたこととの関連性を指摘している[22]。ダニエル・ブーンは、カサジェマスの赤子を指差す左手は自殺の原因が不能だったことを表すとし、青を基調とした悲観的な画面は「芸術は死からの救済をなしうるであろうか」という究極の問いを投げかけていると述べている[23]。元のキャンバスの主題が「最後の瞬間」だっただけに、ふと亡くなったカサジェマスを連想したのだろうか。「人生」の名称はピカソが考えたものではない。「私はただ目の前に浮かんだイメージを描いただけだ。そこに潜む意味を探すのは他人の仕事だ。私の知る限り、絵は自ら語るものだ」[24]。

夏から秋にかけて《貧しい食事》、《セレスティーナ》、《ギター弾きの老人》といった「青の時代」の傑作が生まれた。様々な要素を吸収して、ピカソだけの様式をここに結実させたのである。

結び

1904 年 4 月からピカソは事実上パリの画家となった。その後も夏にはしばしばスペイン各地を旅したが、反フランコを掲げた手前、内戦以降はスペインの地を踏んでいない。だが国籍は変えなかった。ピカソはスペイン以外ではいつもよそ者だと感じていた。父親が地中海を求めてガリシアからカタルーニャへ移ったように、ピカソも晩年はカンヌ、ヴァロリス、アンティーヴといったプロヴァンス地方の街を転々とした。

「青の時代」以降、「ばら色の時代」、分析的キュビズム、綜合的キュビズム、新古典主義、シュールレアリズム…次々と新しい様式を確立しては「破壊」と再生を繰り返した。後年ピカソの好んだ、文字通り「破壊と再生」

---

[22] ペンローズ　前掲書　94－95 頁。
[23] D.ブーン　『岩波世界の巨匠 1　ピカソ』岩波書店　1992 年　50 頁。
[24] O'Brian, *Op.cit.*, p. 121.



図 9 《人生》



図 10《ベラスケスによる＜ラス・メニーナス＞》

のひとつに、古典作品のパロディーがある。中でも《ベラスケスによる＜ラス・メニーナス＞連作》(図版 10) は 44 枚を数える壮大なものだった。このシリーズは 1957 年、カンヌの海辺に別荘「ラ・カリフォルニー」を構えた時の作品である。地中海の青が、帰ることの叶わぬ祖国を思わせ、ひいては若い頃幾度も訪れたプラドの巨匠に挑む気にさせたのだろうか。この連作はサバルテスの尽力で 63 年に開館したバルセロナのピカソ美術館に、68 年 2 月 13 日に他界したサバルテスを悼む形で寄贈された。

ピカソの革新性はパリを経て、世界に受け入れられた。そのパリへ若きピカソを導いた都市がバルセロナだった。間接的にではあるが生き方を決定した「四匹の猫」、「青の時代」への経路を示したカサジェマス、キュビズムの契機を与えたアヴィニョ通りの娼婦たち。自身が戻ることはなくなっても、生涯スペイン人たり続けたピカソにとって、バルセロナは家族と友人の住む街だった。晩年になっても、バルセロナの港へと続く地中海をプロヴァンスから見つめ続けた。その意味で、ピカソとバルセロナのつながりは、やはり決定的なものだったといえるだろう。

図版一覧

1)《初聖体》　1896 年　バルセロナ、ピカソ美術館
2)《ペパ叔母の肖像》　1896 年　バルセロナ、ピカソ美術館
3)《科学と慈愛》　1897 年　バルセロナ、ピカソ美術館
4)《「四匹の猫」メニュー》　1899 年　バルセロナ、ピカソ美術館
5)《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》　1900 年　ニューヨーク、グッゲンハイム美術館
6)《カサジェマスの死》　1901 年　パリ、ピカソ美術館
7)《海辺の母子像》　1902 年　日本、個人像
8)《アヴィニョンの娘たち》　1907 年　ニューヨーク、近代美術館
9)《人生》　1901 年　クリーヴランド美術館
10)《ベラスケスによる＜ラス・メニーナス＞》　1957 年　バルセロナ、ピカソ美術館

参考文献

神吉敬三『巨匠たちのスペイン』毎日新聞社　平成9年。
神吉敬三編著『ヴィヴァン25人の画家　ピカソ』講談社　1995年。
ダニエル・ブーン著、太田泰人訳『岩波世界の巨匠1　ピカソ』岩波書店　1992年。
ウォルター・ベンヤミン著、高原宏平他訳『複製技術時代の芸術』　紀ノ国屋書店　1965年。
ローランド・ペンローズ著、高階秀爾訳『ピカソ　その生涯と作品』新潮社　1978年。
堀田善衛他『ピカソ美術館めぐり』新潮社　1984年。
季刊『みづえ』1986年冬号　No.941　美術出版社。
Daix, Pierre. *Picasso*. Praeger (World of Art Profiles), New York, 1965.
Duran i Riu, Fina. *Pequeña historia de Picasso*, Editorial Mediterrànea, Barcelona, 1985.
Kahnweiler, Daniel-Henry. *Six entretiens avec Picasso*. L'Echoppe, Paris, 1995.
O'Brian, Patrick. *Pablo Picasso: A Biography*. W.W. Norton & Company, New York, 1994.
Richardson, John. *A Life of Picasso: 1881-1906*. Random House, New York, 1991.
Zervos, Christian. *Picasso Œuvres I*, Cahier d'Art, Paris, 1957.
Museo Picasso Barcelona (catálogo), Everest, León, *s.d.*
Museo Picasso Paris (catalogue), Seuil, Paris, 1991.

シルヤブとセヘル

上間 篤

はじめに

中世に東方のイスラム世界からヨーロッパに伝えられた弦鳴楽器・リュートはもともと四弦で音を創り出す工夫が施された楽器である。西洋史上、四弦リュートに一弦が加えられて五弦のリュートが登場するのは、9世紀のアル・アンダルスでの出来事である。アル・アンダルスの五弦リュートのおこりは、西オメイヤ朝のアブデラマン2世(852年~886年)に仕えた楽士シルヤブ(Ziryab、860年頃没)の考案によるとされている。シルヤブの来朝は9世紀のアル・アンダルスにかけがえのない音楽文化を開花させた。

シルヤブは西オメイヤ朝でその類い希な才能を発揮することとなったが、元来彼はアッバース朝に仕えた宮廷楽士であった。バグダッドでシルヤブに災いの火の粉が降りかかったのは、卓越した彼の才能が他の楽人たちの影を薄くしてしまったからであった。シルヤブの存在に脅威を覚えた勢力が彼の排斥に乗り出したとき、身辺に危険が迫り来るのを察知したシルヤブはただちにバグダッドを脱出し、しばらくチュニジアのカイルワンに身を寄せた。ほどなくしてシルヤブはコルドバの西オメイヤ朝の計らいでアル・アンダルスへの移住を果たした。シルヤブを迎えた西オメイヤ朝の宮廷社会では東方趣味が加速した。

一方、シルヤブの来朝はアル・アンダルスの音楽に大変革をもたらした。一世代遅れてアル・アンダルスの文壇にセヘルと呼ばれる短詩形の抒情詩が誕生する経緯などは、シルヤブが行った音楽改革に文学が呼応した現象である。大衆歌謡の性格を帯びたセヘルは、盲人ムカダム(Muqáddam、840年~920年)の創作によるとされる。アル・アンダルスの民衆に爆発的な人気を博したセヘルは、やがて中世の地中海周辺地域(北のキリスト教世界ではフランスのプロヴァンス地方やイタリア、南は対岸のマグレブから中東のイスラム世界)に広く伝播して愛唱された。ところでセヘルが流布したルートを東へ辿れば、中東地域がその東限ではない。メネンデス・ピダルによれば、その東限はインドであり、そこではイスラム教徒たちがいまだにセヘルを歌い継いでいるという。[1] セヘルは、海のシルク・ロードと呼ばれたアッバース朝のイスラム・ネットワークに便乗して、東は中世のインドにまで到達したのである。

本論では、シルヤブが音楽のジャンルで成し遂げた功績とそれに触発されて誕

生したセヘルについて理解を深め、中世の庶民に愛された音楽と文学について考える。

(一)

シルヤブについて

1. 楽士シルヤブ

楽人シルヤブの本名はアブ・エル・ハッサン・アリ・イブン・ナフェである。[2] シルヤブは彼の芸名である。ロジャー・ガラウディによれば、シルヤブという合成語には「黒い鳥」という意味が込められているという。思えばアッバース朝の軍旗は「黒」で染められた。両者が「黒」を共有するのは単なる偶然であろうか。何か因縁めいたものを感じる。シルヤブの楽人としての血筋は先祖伝来のものであった。シルヤブの家系は、アッバース朝が数々の文化事業を推進するにあたって手本にしたペルシャ系種族の出であった。シルヤブの父は帝都バグダッドに音楽学院を創設した人物である。当時アッバース朝に仕えた楽人たちはその多くがマワーリーと呼ばれた解放奴隷によって占められ、彼らは卓越した音楽の才能によって自由を獲得した外国人であった。シルヤブの出自も同様であった。代々アッバース朝の宮廷楽士には圧倒的にペルシャ系の人物が名を連ねたとある。[3] 当初アラブ種族は軍事力ではペルシャ種族を従えたものの、文化の発達度においては先進地のペルシャを凌駕するほどではなかった。ササーン朝ペルシャの影響はアッバース朝の宮廷儀式にも及んだ。楽士が解放奴隷の身分であったにせよ、その出自がペルシャ系とならば、宮廷社会では一目おかれる存在であった。シルヤブはその典型的な人物であった。シルヤブを闇に葬り去ろうとした陰謀はバグダッドの宮廷社会を震撼させと考えられるが、事件は断片的にしか伝えられておらず、その全容は明らかでない。文献資料によれば、事件はシルヤブとイシャク・アル・マウシリ(767年~850年)という二人の巨星の確執に起因したものであった。状況証拠と見なされる二、三の歴史的事実を手掛かりに、事件の輪郭を描き出してみる。

750年以降カリフ、ハルン・アル・ラシド(786年~809年)に代表されるアッバース朝では音楽を王朝文化の象徴と見なす気風が高まった。ハルン・アル・ラシドはそれに呼応して785年、その頃メディナで最も名声の高かった音楽教師イブラヒム・アル・マウシリ(747年~810年)をバグダッドに招き入れ、声楽、歌唱法、詩学、リュート奏法などを伝授する音楽学院の設立を要請した。要請は実り、バグダッドにカリフのお墨付きの音楽学院が誕生した。創設者が引退すると息子イシャク・アル・マウシリが父の遺志を継いで学院の運営に当たる。シルヤブの好敵手イシ

ャクである。イシャクはユークリッドの音楽理論に基づいて音楽を研究した人物とされるが、一方彼は哲学者アル・キンディー(796年~874年: アレキサンドリアの新プラトン主義、アリストテレスやピタゴラスの理論などを取り入れた音楽理論の著作を残した)と音楽について共同研究を行ったことでも知られる。また両人は共同研究で確立した音楽理論に基づき六弦リュートの開発も試みた。[4] シルヤブがこのような理論家たちとどのような音楽論争を展開したのかは定かでない。一方シルヤブの音楽理論の知識はプトレマイオスに比べられ、また演奏家としては実に一万曲を記憶していたと伝えられる。[5] 西オメイヤ朝のアブデラマン2世にいたっては、シルヤブのたった一曲の演奏に金貨で二万ディナールを報奨金として授け、楽人シルヤブの非凡なる才能を称えた。[6] シルヤブの活躍は音楽世界における私学の隆盛とペルシャ的要素の優越性を具現するものであった。その結果シルヤブはイシャクを筆頭とする御用学者の面々を敵に回すことになった。四面楚歌の状況下におけるシルヤブの振る舞いについては重要な検討項目であるが、そのことに言及した文献資料が欠如しているために詳細なことは分からない。真相はともあれ、アッバース朝の宮廷社会でシルヤブの排斥に暗躍したグループは、奸策を練ってシルヤブを窮地に陥れ、彼をバグダッドから排除することに成功した。シルヤブの追放に加担した御用学者の思想には、その頃アラブ種族に芽生えつつあった狭量な民族主義が絡んでいたことは明らかである。

2. シルヤブの来朝とアル・アンダルス

ほどなくしてアル・アンダルスのエミール、アル・ハカム1世(796年~822年)はバグダッドを脱出したシルヤブの獲得に乗り出した。王の要請を受諾してアル・アンダルスへ渡った(822年)シルヤブであったが、彼の到着を待たずに王が他界したため、両者の出会いは実現しなかった。後継者アブデラマン2世(822年~852年)は、前王の遺志を継いでシルヤブを温かく迎え入れ、給金を気前よく与える一方、資産として肥沃な土地を提供した。楽士にアル・アンダルスに留まることをうながすためであった。コルドバに活動の拠点を得たシルヤブはやがて西方世界で一世を風靡することとなる。

シルヤブがアル・アンダルスで展開した音楽活動は東西両世界の音楽事情に画期的な足跡を残すものであったといわれるが、今日その全容を明らかにすることは以下の理由で不可能だとされている。歴史家の断片的な言及によれば、かつてアル・アンダルスにはアル・アバシ、アル・アジズと呼ばれた二人の音楽理論家がいた。彼らの著作はアル・アンダルスの音楽に理論的解釈を与えるものであった

といわれるが、イスラム教徒とキリスト教徒が国土の領有をめぐって争いを繰り返している間にこれらの貴重な書物は失われた。ちなみに後者のアル・アジズはシルヤブに関する書物を著したことで知られる。[7] 幸いなことに、今日北アフリカに伝わる伝統音楽には、イスラム時代のコルドバ、セヴィリア、グラナダなどで盛んに行われた音楽なども含まれているといわれ、それらはシルヤブの音楽を知る手掛かりとして注目されている。

アル・アンダルスで活動を始めたシルヤブは、八音節のアラビア詩を巧みに操るアラビア音楽やキリスト教の礼拝用の宗教音楽などは避け、主に自らが携えて来た音楽のジャンルとカンティカ・ガディターナに代表される半島南部古来の伝統音楽との融合を図ることに専念した。シルヤブの活動は民衆の心をとらえ、彼の手で様々にアレンジされた曲目はたちどころに広まった。シルヤブを迎え入れたアル・アンダルスでは東方趣味が益々加速し、アブデラマン2世によって整えられた官僚体制には名誉大臣と呼ばれた異色の官位が設けられ、それには当代屈指の詩人や楽人が推挙された。これなどもアッバース朝の官位制度に習った一例である。シルヤブには千載一遇の機会が到来した。シルヤブは新天地で音楽活動を再開するにあたり、父親の偉業に習い、音楽理論、声楽、リュートの演奏法などを伝授する音楽学院をコルドバに設立した。鷲の羽根を模したリュートの演奏用の撥を導入したり、改良型の五弦リュートを考案したのもシルヤブであった。形式を重んじる宮廷音楽と即興性を尊ぶアル・アンダルスの伝統音楽との融合を図るには、四弦リュートに勝る表現力を備えた楽器が要求された。シルヤブの考案によって音楽界に登場した五弦リュートはさらなる感情表現を可能にしたといわれる。[8] ファーマーによれば、リュートは元来インドを起源とする楽器のようであるが、9世紀のイスラム世界で盛んに愛用された四弦リュートや五弦リュートのフレットの間隔はピタゴラスの音体系だけによるのではなく、それにはイラン的要素も補完されているという。[9] 後者の例は楽器の改良にもペルシャ系の楽人たちが関与したことを裏付ける。シルヤブが考案した五弦リュートもその一例に挙げられよう。

中世のイスラム社会では、詩を詠みリュートを弾きこなすことが人々に求められ、それらに秀でることが教養の証しとされた。数ある楽器のなかでもとりわけリュートは王侯貴族に重宝され、もてはやされた。当時の宮廷生活を描いた絵画には、王侯貴族の傍らでリュートを奏でる楽人が数多く描かれているが、絵画のモチーフにもリュートは欠かせないものであった。東方社会におけるこのような伝統は早くに西方のオメイヤ朝に継承され尊ばれた。アル・アンダルスの王侯貴

族は、バグダッドの宮廷社会の慣行に習い、夏にはそれぞれの館に客人を招いて園遊会を開き、学者にはシンポジュームを主催して討論の場を与え、詩人や楽人には非凡な才能を発揮する機会を与えた。園遊会の開催にあたり、主催者は慣例として格調高い韻文でしたためた招待状を友人や知人に送り届けた。[10] 宴の席では、主催者の慈悲にすがって暮らすジャリヤートやカイナート(歌姫や踊り子を指す)たちが、歌と踊りで客人をもてなした。シルヤブの息子や娘たち(ウバイダラー、アブデラマン、アル・カーシム、ハムドゥーナ、ウライヤ)はいずれも音楽と踊りに長けていたといわれ、それぞれに宮中や園遊会の席で活躍したものと思われる。[11] 園遊会を楽しむ社会慣行はアル・アンダルスのイスラム社会において久しく継承され、中央集権体制崩壊後のタイファの時代に至っても、それは衰えることがなかった。その頃に詩人ならびに楽人として活躍したのがセヴィリアの支配者モタミド(1095年没)である。モタミドは、詩才に長け、リュートの演奏家としても名を馳せた。モタミドがロマイキアという女性を溺愛したことは周知の通りであるが、彼女自身も女流歌人として一世を風靡した人物であった。[12] セヴィリアの王侯貴族たちは近郊のグヴダルキヴィル川に舟を浮かべて饗宴を張り、詩と音楽を堪能した。中世に広く音楽を育成したセヴィリアの風土はかの地における数千年来の混交文化に培われたものであった。イスラム教徒は8世紀の初頭にイベリイア半島南部に到着したのであるが、その頃すでにそこには東方の音楽に勝るとも劣らぬ豊かな伝統音楽が庶民の間に継承されていた。古代にこの地で栄えたタルテッソ人の民族的起源やその文明に思いを馳せれば、シルヤブが新天地の音楽の要素や特徴に不思議な親和感を覚えたであろうことは想像に難くない。哲学者アヴェローエス(1126年~1198年)の時代、音楽家が死ぬと故人の愛器はセヴィリアに送られ、学者が死ぬとその蔵書はトレドへ運ばれたという。当時セヴィリアは楽器職人を育成した町でもあった。ファーマーによれば、1226年以降ムルシアを支配したキリスト教徒は、自国にアブー・バクル・ムハンマド・アリ・クーティーを音楽教師として招聘し、彼が携えて来たリュートを始めアラブの諸楽器を受け入れたという。[13] 当時は音楽でもイスラム世界はキリスト教世界をリードする立場にあった。トレドの『翻訳官の館』の学者に師事したアルフォンソ10世(1221年~1284年)は、三つの宗徒(ユダヤ・キリスト・イスラム)が相和して学ぶことの重要性を説き、その実現に向けてイスラムの哲学者モハメド・アリ・リクーディーと協力して高等教育機関、いわゆる大学、をムルシアに設立した。また王は中世世界におけるアラビア語の重要性を訴え、教養の育成とアラビア語とラテン語の語学教育を行う学院をセヴィリアに設立することに情熱を注いだ。[14] 中世の芸

術の都セヴィリアは教養と文化を涵養した町であった。

シルヤブの来朝はアル・アンダルスにおける従来の風俗や習慣にも変化をもたらした。それまでは男性も女性と同様に頭髪を肩まで伸ばすのを習わしとした。このヘアースタイルもシルヤブの登場によって消滅し、新に短く円形に刈り上げたスタイルがはやり出す。シルヤブのイラク風のスタイルに真似たものであった。貴族の男性が alheña（いぼたと呼ばれる樹木)から抽出した染料で髭や頭髪を橙色に染めたのもイラク風の流行を取り入れたものであった。女性たちは同じ染料で指の爪を染め上げた。そのほか四季折々に服装の色を使い分けることも行われた。それは、春には種々の色、夏には白、秋と冬にはくすんだ茶色系統の服を身にまとうというものであった。このような身だしなみに関する新たな風俗・習慣はシルヤブが創設したファション学院で上流階級の女性たちに伝授され広まった。インド伝来の娯楽チェスもシルヤブによって伝えられたとみなされている。このように、アル・アンダルスにおけるシルヤブの功績は多岐にわたるが、西洋の音楽事情においては、11世紀に至ってもシルヤブの影響は顕在であったという。[15]

（二）

セヘルについて

1. セヘルの発生

セヘル(zéjel)とは、9世紀末から10世紀初頭のアル・アンダルスに誕生した短詩形の抒情詩である。セヘルの生みの親は、カブラ(コルドバ近郊)出身の盲目の詩人ムカダム(Muqáddam、アラブ系出身、840年~920年)である。[16] セヘルの発生はアル・アンダルスを生誕地とするアラビア詩モアクサハ(moaxaja)に由来する。今日この詩に関しても生みの親はムカダムであるとする説が有力である。モアクサハからは他にハルチャ(jarcha)と呼ばれる短詩も出現した。ハルチャはモアクサハの末節が独立したもので、音節の数ではセヘルのそれよりも少なく、文学の形態としては最も小さい部類に属する。

スペインを代表するアラビスタ、ラモン・メネンデス・ピダルの著書に『アラビアの詩とヨーロッパの詩』(POESÍA ÁRABE Y POESÍA EUROPEA)と題名されたのがある。この著書の前半を構成する『アラビアの詩』は、中世にキリスト教世界とイスラム世界との文化交流を促進させたセヘルの希有な歩みについて論じたもので、論考を支える様々な史実の検証は説得力と示唆に富み、セヘルの文学上の真価を説き明かす。

先ずセヘルの形式であるが、その骨格は基本的に三つの部分から成り立ってお

り、それらは各々エストゥリビーヨ(estribillo), ムダンサ(mudanza), ブエルタ(vuelta)と呼ばれる。エストゥリビーヨは“返し”あるいは“畳句”の役割を担い、言葉に込められた意味内容は詩の主題を伝える。“返し”の役割を担うエストゥリビーヨは、“あぶみ”、“支え”、“根拠”などを意味する「estribo」という言葉の縮小辞である。馬具の一つ“あぶみ”が文学用語に用いられているのは面白い。ちなみにアラビア語で詠まれたセヘルの場合“返し”を“markaz”と呼ぶが、それも“estribo”すなわち“あぶみ”と同義語である。ヨーロッパにおける“あぶみ”の使用は中世に始まるとされるが、アラブ馬の導入によりヨーロッパの馬が大型化して“あぶみ”が使用されるようになった経緯などは、アラビア文化の影響を反映する一事例である。[17] 文学用語に昇華した“あぶみ”を意味する言葉には中世イベリア半島の混交文化の要素が凝縮されていて味わい深い。以下にセヘルの一篇を考察し、それぞれの構成部分について形式と機能の側面から検討する。

Vivo ledo con razón,	a
amigos, toda sazón.	b
Vivo ledo e sin pesar	c
pues amor me fizo amar	d
a la que podré llamar	e
más bella de cuantas son.	f
Vivo ledo con razón	a
amigos, toda sazón.[18]	b

上例のセヘルはメネンデス・ピダルの著書『アラビアの詩とヨーロッパの詩』の中に紹介されているもので、それはアルフォンソ・アルバレス・デ・ビヤサンディーノの作品だとされる。上例では a-b 行がエストゥリビーヨ(返し)にあたり、ムダンサは c-d-e 行、ブエルタは f 行にあたる。一行七音節の二行で構成されるエストゥリビーヨは行末に同音の脚韻が現れる。ムダンサは別名トゥリスティコ(trístico)とも呼ばれ、各行末の脚韻はエストゥリビーヨと同様に同音の韻が占める。ブエルタは(返ること、回転の意)は内容的にはトゥリスティコに連動するが、行末の脚韻には同音ではなく類音が現れる。そのことはブエルタが詩の主題

を伝えるエストゥリビーヨへの回帰を促す役割を担っているからである。アラビア語ではセヘルの形式上の生成要素を以下のように呼ぶ: Markaz(=Estribillo); Agsan(=Mmudanza); Simt(=Vuelta)。これらの比較事例は、セヘルの形式が異なる言語圏においても違うことなく踏襲されていたことを物語る。

2. セヘルの性格形成

セヘルの発生は中世スペインの混交文化に由来し、その文学的特徴はアラビア文学とローマ文学の流れを汲むといわれる。メネンデス・ピダルは、セヘルの性格形成を担った言語、形式、文学的素材に言及して、次のように論評している。

アラビア文学の系譜

a. セヘルは本来アラビア語で詠まれた。ただしセヘルを育んだ言語は正統なアラビア語ではなく、それは大衆性と不正確な言語運用に彩られた巷の話し言葉であった。
b. 脚韻には同音が現れる。
c. 主題には二つの主流があり、それらは男女の愛の諸相を語るものと特定の人物の高貴な精神を尊ぶものに大別される。

ローマ文学の系譜

a. 定まった行数によって規定され、意味内容のまとまりを示す連節(伝統的なアラビア詩には見られない手法)の存在。
b. 各々の連節の後にエストゥリビーヨを介在させる。
c. 早朝に男女が交わす惜別の場面。
d. アラビア詩を彩るイスラム伝来の主題の欠如: 例えば、砂漠の旅情、遊牧生活、一族の生誕地、駱駝、その他。
e. ラテン文化に由来する暦や祭日の介在。
f. アラビア語に取り入れられたラテン語派生の語彙の使用。[19]

3. 大衆歌謡・セヘル

中世のアル・アンダルスにはイスラム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒がそれぞれに独自の社会を形成して存在した。三民族が混交し混在する中で、イスラム教徒はキリスト教徒からローマ文化を学び、一方キリスト教徒やユダヤ教徒はアラブ人やベルベル人との接触を通してイスラム文化に慣れ親しんだ。セヘルはこ

のような文化風土と社会環境を背景にして誕生した。セヘルの特色は、それが中世に生きた庶民の心情や生活感覚を巧に歌い上げたことにある。それらはエストゥリビーヨに主題として詠み込まれた。セヘルを広く世に知らしめたのは吟遊詩人であったが、それに関してはジャリヤートやカイナートたちが果たした役割も無視できない。セヘルはもともと庶民の生活の場で発展を遂げた。エストゥリビーヨに込められた主題に聴衆(庶民)が即興的に反応し、詩人と聴衆の間で歌の掛け合いが自由奔放に展開されるには、聞き手である庶民の側にも掛け合いを可能にする音楽性と詩的感性の豊かさが求められた。セヘルの形式は詩人ムカダムによって確立されたが、それを可能にした源泉はまさしくアル・アンダルスの混交文化に培われた成熟した庶民生活にあった。中世社会におけるセヘルの隆盛は庶民の文化的成熟度や芸術的感性を推し量る指標にもなり得るもので興味深い。かつてメネンデス・ピダルはチュニスの歌手サフィア・ルスディーの曲目に注目し、それに習って中世のセヘルの歌唱方式の再現を試みた。以下にそれを紹介する。

> 始めにソリストがエストゥリビーヨを歌い、次ぎにコーラスがそれを繰り返す。後にしばらくのあいだ歌を伴わない器楽演奏が続き、やがてソリストが最初のムダンサとブエルタを演奏を従えて歌う。ソリストがブエルタの脚韻にさしかかるとコーラスの参入が告げられ、ソリストとコーラスが楽器演奏を伴ってエストゥリビーヨを歌い上げる。
>
> その後ふたたび器楽演奏だけがしばらく続き、それから再度ソリストが参入して第二のムダンサを歌い始める。その後はこれまでと同様の方式で歌い継がれ、随時第三、第四のムダンサへと移行する。[20]

紹介した歌唱方式をコルドバの市井で歌われたセヘルのそれに見立てて解釈するならば、ソリストの役割が吟遊詩人のそれに相当し、コーラスは一般庶民が担った部分にあたる。器楽演奏には、先にシルヤブの項で述べたように、四弦リュートか五弦リュートが主な役割を担ったと解釈されるが、場の雰囲気を盛り上げるためには中東伝来の打鳴楽器や膜鳴楽器なども一役買ったと考えられる。

4. セヘルと西欧のキリスト教世界

セヘルは早くに周辺のプロヴァンス地方やイタリアにも伝わった。かつてバル

セロナを中心とした地域はマルカ・イスパニカの名称で呼ばれ、同地域は8世紀から10世紀の終焉に至るまで政治的にはピレネー北方のカロリング朝の覇権の下にあった。従ってこの間におけるマルカ・イスパニカのイスラム諸侯たちは、北方のカロリング朝と南方のオメイヤ朝の狭間にあって、保身と利権の擁護のために様々な政治的駆け引きや策略を伴う外交努力が強いられた。一例であるが、かつてサラゴッサを支配したイスラム領主マルシオは金銀の財宝、アラビア馬や酒、その他数多くのコンクビーナたちをカール大帝(742年~814年)に献上したと伝えられる。[21] 以後パリアと称された同様の貢納儀礼は種々の変容を遂げながらレコンキスタが完了するまで存続した。その間にキリスト教徒諸侯に献上されたジャリヤートやカイナートは、アル・アンダルスの芸能文化をキリスト教世界に伝える文化大使の役割を演じることとなった。メネンデス・ピダルは彼女らの動向を丹念に検証してセヘルの北方への伝播ルートを解明する手掛かりの一つとした。詩人の中の詩人とうたわれたアキタニアの君主ギエルモ9世(1071年~1127年)が残した11篇の詩が今日に伝えられており、その内の5篇はセヘルの形式を踏襲したものだという。[22] 11世紀の中葉にノルマン人とフランク人で組織された十字軍がアラゴン王に請われてマルカ・イスパニカに進攻した。その際バルバストロの戦役(1064年)に勝利したキリスト教徒の軍勢は、数千人(その数7千とする説もある)にのぼるイスラム教徒を捕虜として北方のキリスト教世界へ連行した。詩人ギエルモ9世は若かりし頃にこれらのイスラム教徒たちと親交を深めとされ、彼が後世に残した5篇のセヘルはこのような歴史的経緯を反映するといわれる。

セヘルは中世イタリアにも伝播した。12世紀から13世紀のヨーロッパのキリスト教世界では聖フランシス(1182年~1226年)やドミニコ・デ・グスマン(1170年~1234年)などが新たな会派の設立につながる伝導活動を開始する。なかでもフランシスコ会修道士たちは一切の所有物を退ける清貧の生活を重んじ、自らを「神に仕える吟遊詩人」と呼んで社会の底辺に暮らす民衆の中に積極的に溶け込んで福音を述べ伝えた。聖フランシスの癩病患者への献身的な奉仕の業はその珠玉の一例である。聖フランシスは自ら著述することはなかったと伝えられるが、スペイン王アルフォンソ10世(賢王)と同世代のフランシスコ会修道士ハコポーネ・ダ・トーディの作とされる『聖フランシス賛歌』が今日に伝えられている。この賛歌集には聖フランシスを称える102篇の詩が収録されているようであるが、その内の52篇はセヘルの形式を伝えるといわれる。よって『聖フランシス賛歌』は、ローマ文化圏内ではアルフォンソ10世が著した『聖母マリア賛歌』に次ぐセヘル文学の傑作と見なされている。聖フランシスの出生をめぐっては、聖人とセヘルを結び付ける

因縁めいた出来事が想起されておもしろい。デイヴィド・ヒュー・ファーマーによると、聖人がフランチェスコ(フランス人)と呼ばれたのは、反物商人であった父親がプロヴァンスで商売をしていたおりに土地の女性と結婚してフランチェスコが生まれたからだという。[23] この件に関しては異説を唱える研究者もおり、その一人マルシア・L・コリシュは、あだ名の由来について、聖フランシスの文学趣味との関連を指摘する。[24] この説は聖フランシスがプロヴァンス生まれの抒情詩をこよなく愛した事実に基づいている。ともあれいずれの説も聖フランシスとプロヴァンス地方との深い係わりを如実に示すもので興味深い。記録によると、聖フランシスは1210年代にフランス、ドイツ、スペインに伝導したと伝えられる。[25] 13世紀といえば、イベリア半島では市井のいたる所でイスラム教徒の楽士とキリスト教徒の楽士がセヘルを歌って共演していた時代である。伝導の最中に聖フランシスがこれらの光景を目の当たりにしなかったはずはない。



左図はアルフォンソ10世が著した『聖母マリア賛歌』に収められた楽士の絵で、エスコリアル図書館の収蔵品である。[26] 絵を見て明らかなように、描かれているのは向かって左がイスラム教徒の楽士で右がキリスト教徒の楽士である。絵画のモチーフは両者のデュエットを描くことにあったと思われるが、それは当時の音楽事情を反映するもので興味深い。キリスト教徒の楽士の口元は大きく開き、五弦リュートとおぼしい弦鳴楽器を奏でている。左手の髭面の楽士も同様で、その口元はかすかに開いている。そのことは両者がデュエットを演じていることの証左である。また中腰に構えた右手の楽人の姿勢には躍動感があふれ、楽しげな雰囲気が漂う。また同楽人が奏でている楽器には五つの弦が張られているのは明白で、それがリュートであるならばシルヤブが考案した五弦リュートとの関連性が指摘されて面白い。ところでイスラム教徒の楽人とキリスト教徒の楽人たちは、宗教や民族を超越して音楽の本質を享受し、久しく中世のイベリア社会を魅了し続けた。ところがこの自由闊達な音楽活動にもやがては変化の兆しが現れる。1322年、ヴァヤドリードの教区会議は異教徒の楽人を教会堂から排除することを決議し、その旨の条例を制定した。[27] ただしこの禁止条例は民意を反映したものではなかった。異教徒との共演を問題にしたのは教区の僧侶た

ちであった。庶民はむしろしなやかな心で宗教や民族を超越した普遍的な音楽を受け入れていた。繰り返すが『聖母マリア賛歌』と『聖フランシス賛歌』はセヘル文学を代表する二大詩集である。両者の存在は中世の宗教界がセヘルの啓蒙力と伝達力に並々ならぬ信頼を寄せていたことを物語る。セヘルはまさに中世のマス・メディアであった。セヘルの神学とのかかわりやそのマス・メディア的存在はイスラム世界においても同じであった。聖フランシスとほぼ同時代にアル・アンダルスに生まれ、神智学では独自の思想体系を確立したイブン・アル・アラビ(1165年~1240年)は、セヘルをこよなく愛した神秘学者であり詩人であった。

おわりに

9世紀にアル・アンダルスの庶民にもてはやされた音楽はシルヤブによって確立された新たなジャンルの音楽であった。広く大衆の支持を得た彼の音楽は後の芸能文化の大衆化の流れに拍車をかけ、やがては文学の形式や性格にも影響を与える結果となった。ハルチャやセヘルはこのような過程で産声を上げた文学である。前者の存在はスペイン語の歴史研究には欠かせない。一例を挙げると、1948年にエジプトのユダヤ教会で発見された数篇のハルチャは中世スペイン語の研究に飛躍的な進展をもたらしたことで知られる。一方セヘルは大衆文学の花形として中世世界に広く流布して文化交流の役割を担った。芸能文化が知の文化に先駆けて敏速に流布する様は、世の東西を問わず、今も昔も変わらない。中世においてセヘルがアヴェロエス、マイモニデス、イブン・アル・アラビなどの哲学思想に先駆けて中東のイスラム世界に瞬く間に流布した経緯も同様であった。

さて、中世イスラム世界の音楽文化は日本とも無縁ではない。つとにアラビア文学が日本に伝わることはなかったが、奈良時代には唐王朝を経由して西域の様々な楽器が日本に舶来した。正倉院に伝わる「螺鈿紫檀琵琶」などがその一例である。周知の通りこれらの琵琶には五つの弦が張られているものがあり、本論とのかかわりにおいては、この楽器の胴の表に施された楽人の姿が最も注目を引く。楽人は、駱駝の背にまたがって四弦琵琶を奏で、右手には鳥の尾羽を模した撥を握りしめている。側面から描かれた楽人の口元は開き、頭髪は短く円形に刈り上げられている。そのために耳があらわに描かれている。楽人をめぐるこれらの意匠やファションは先に言及したイラク風の伝統や風俗に酷似する。「螺鈿紫檀琵琶」の出所に関しては専門家のさらなる検討が必要であると見なされる。繰り返すが、中世のイスラム世界では、詩を詠み、リュートを弾きこなすことが教養の証しとされた。「螺鈿紫檀琵琶」はこのような精神を表象する文化遺産なのである。

注

1. Menéndez Pidal, Ramón. *POESÍA ÁRABE Y POESÍA EUROPEA*. p. 27.
2. Garaudy, Roger. *EL ISLAM EN OCCIDENTE*. p. 215.
3. ファーマー、ヘンリー・ジョージ:『人間と音楽の歴史イスラム』、38ページ
4. Garaudy, Roger. *EL ISLAM EN OCCIDENTE*. p. 211.
5. ファーマー、ヘンリー・ジョージ:『人間と音楽の歴史イスラム』、182ページ
6. Greus, Jesús. *Así vivían en Al-Andalus*. p. 81.
7. Garaudy, Roger. *EL ISLAM EN OCCIDENTE*. p. 210.
8. Garaudy, Roger. *EL ISLAM EN OCCIDENTE*. p. 215.
9. ファーマー、ヘンリー・ジョージ:『人間と音楽の歴史イスラム』、40ページ
10. Greus, Jesús. *Así vivían en Al-Andalus*. p. 81
11. ファーマー、ヘンリー・ジョージ:『人間と音楽の歴史イスラム』、182ページ
12. Menéndez Pidal, Ramón. *EL CID CAMPEADOR*. p. 62.
13. ファーマー、ヘンリー・ジョージ:『人間と音楽の歴史イスラム』、184ページ
14. F. O´Callaghan, Joseph. *EL REY SABIO*. p. 172.
15. ファーマー、ヘンリー・ジョージ:『人間と音楽の歴史イスラム』、182ページ
16. Sánchez-Albornoz, Claudio. *LA ESPAÑA MUSULMANA TOMO I*. p. 32.
17. Clutton-Brock, Juliet.(清水雄次郎訳):『馬と人の文化史』、180ページ
18. Menéndez Pidal, Ramón. *POESÍA ÁRABE Y POESÍA EUROPEA*. págs. 17~18.
19. Menéndez Pidal, Ramón. *POESÍA ÁRABE Y POESÍA EUROPEA*. p. 24.
20. Menéndez Pidal, Ramón. *POESÍA ÁRABE Y POESÍA EUROPEA*. p. 21.
21. María Mínguez, José. *Las Claves del Período Carolingio*. p. 45.
22. Garaudy, Roger. *EL ISLAM EN OCCIDENTE*. p. 217.
23. Hugh Farmer, David. *THE OXFORD DICTIONARY OF SAINTS*. p. 191.
24. L. Colish, Marcia. *Medieval Foundations of the Western Intellectual Tradition 400-1400*. p. 235.
25. ロイン、ヘンリー・R・:『西洋中世史事典』、446ページ
26. ファーマー、ヘンリー・ジョージ:『人間と音楽の歴史イスラム』、107ページ
27. Menéndez Pidal, Ramón. *POESÍA ÁRABE Y POESÍA EUROPEA*. p. 76.

参考文献

Clutton-Brock, Juliet. (清水雄次郎訳):『馬と人の文化史』東洋書林、1999。

ファーマー、ヘンリー・ジョージ:『人間と音楽の歴史イスラム』音楽之友社、1993。

F. O'Callaghan, Joseph. *EL REY SABIO*.
Sevilla: Universidad de Sevilla, 1996.

Garaudy, Roger. *EL ISLAM EN OCCIDENTE*.
Madrid: Editorial Breogán, 1987.

Greus, Jesús. *Así vivían en Al-Andalus*.
Madrid: Grupo Anaya, S.A., 1991.

Hugh Farmer, David. *THE OXFORD DICTIONARY OF SAINTS*.
Glasgow: Oxford University Press, 1997.

ロイン、ヘンリー・R・:『西洋中世史事典』東洋書林、1999。

L. Colish, Marcia. *Medieval Foundations of the Western Intellectual Tradition 400-1400*.
New Haven: Yale University Press, 1997.

María Mínguez, José. *Las Claves del Período Carolingio*.
Barcelona: Editorial Planeta, S.A., 1991.

Menéndez Pidal, Ramón. *POESÍA ÁRABE Y POESÍA EUROPEA*. 6.ª ed.
Madrid: Espasa-Calpe, S.A., 1973.

Menéndez Pidal, Ramón. *El Cid Campeador*. 10.ª ed.
Madrid: Espasa-Calpe, S.A., 1989.

Sánchez-Albornoz, Claudio. *LA ESPAÑA MUSULMANA TOMO I*. 7.ª ed.
Madrid: Espasa-Calpe, S.A., 1986.

アメリコ・カストロと『スペインの歴史的現実』
～スペイン人解釈についての一考察～

梅田咲絵

はじめに

1898 年の米西戦争敗北により、全ての海外植民地を失ったスペインは、領土と共にそれまでの大帝国としての威信や名声を失った。そして大帝国の失墜は国民生活にも及び、国内全体がそれまでの活力を失い、悲観的な状況に陥った。このような社会状況の下、ウナムーノなどを中心とした 1898 年世代と呼ばれる一群の知識人の間で、スペイン再生を目指す機運が高まり、「スペインとは何か」というスペインの本質を問い直す議論が起った。しかしながら、98 年世代の誰一人として、スペインの本質に迫る論を展開するには至らず、この命題は次の世代に明け渡された。

本稿で扱うアメリコ・カストロ・イ・ケサダ(Américo Castro y Quesada, 1885～1972 年) は次の世代のいわゆる 1914 年世代に属し、前世代の命題を受け継ぎ、精力的にこの論題「スペインとは何か」に取り組んだ思想家である。彼はそれまでの歴史観の枠組みを越えた、新しい視点をスペイン史に取り込むことにより、前世代より大きく踏込んだスペイン本質論を展開するに至った。

しかしながら彼の歴史観は非常に革新的なものであったため、発表当時は激しい批判の的となり、正当な評価を受けるまでにかなりの時を要した。そのため、彼の歴史観やスペイン人解釈などについての研究は、カストロが行った研究の重要さの割には非常に限定されている現状である。日本においても、佐々木孝及び西澤龍生による先駆的研究以外には、ほとんど発表されていない状況である。

このような理由により、カストロの歴史観を分析し、それを基にしたスペイン人解釈について考察する作業は意義のあることと考える。そこで本稿では彼の思想の集大成である著作『スペインの歴史的現実 *La realidad histórica de España* 』(増補改訂版、1962 年) の分析を通してこの作業を行う。

Ⅰ．カストロの生涯

アメリコ・カストロは、1885 年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロ州カンタガロにおいて、商用で当地に滞在中であったスペインのグラナダ出身の両親より生を受け、1900 年に両親が帰国するまでブラジルで過ごした。スペインへ移ってからは、グラナダで初等、中等教育を受け、1904 年にグラナダ大学の哲文学の学位を取得した。その翌年ソルボンヌ大学へ入学し1908年に卒業した後、マドリードに移った。カストロは当時の知識人が多く集まっていたマドリードで、以後の思想形成の上で大きな影響を受けることとなった自由教育学園の知識人達との交流を始めた。

1910 年から同施設の付属機関である歴史学研究所の辞書編纂部門を担当し始め、所長であるメネンデス・ピダルの下で精力的に研究・執筆活動を行った。1915 年にはマドリード大学スペイン語史の教授に就任し、所属する哲文学部の改革に尽力した。また 1917 年に「エル・ソル」紙の創設に参加し、同時に同紙及び「ラ・ナシオン」紙への記事掲載を始めた。

1923 年のアルゼンチンのブエノスアイレス大学による、イスパニア文献学研究所設立の際には、同大学を訪れ講演を行った。また翌年には、チリ、アメリカ合衆国、メキシコ、キューバ、プエルトリコを歴訪し、各国の大学で講演を行った。1930 年には 1 年の予定で、ベルリン大学より客員教授として招かれた。しかし任期半ばの 1931 年にスペイン政府からの要請を受け、1 年間ベルリン大使を務めることとなった。1936 年の内戦勃発と同時にアルゼンチンへ亡命後、翌年にはアメリカ合衆国へ移り、同国の様々な大学で教鞭をとった。[1]

1968 年に帰国した後はマドリードに居を定め、休むことなくそれまでの研究・執筆活動を続けた。そして 1972 年にバルセロナのリョレ・デ・マルにて 87 歳の生涯を閉じた。[2]

Ⅱ．マドリードにおける研究活動

彼の思想形成に重要な影響を与えたのは、ソルボンヌ大学卒業後に居を構えた、マドリードでの知識人達との交流・研究活動である。なかでも自由教育学園の創立者である、ヒネル・デ・ロス・リーオスとその弟子のマヌエル・バルトロメ・コシオ、また歴史学研究所所長のメネンデス・ピダルと同研究所哲学部門を担当したオルテガ・イ・ガセットが、カストロの研究活動に及ぼした影響は極めて大きい。

ヒネルとコシオからは、とりわけ教育者としての基本姿勢を学んだ。つまり教育者の人的影響による人格形成を第一の目標とし、その結果優れた人物を社会に輩出することでスペイン再生を図るという姿勢である。両氏の影響の大きさは、カストロの両氏についての言及によく表れている。[3]

また歴史学研究所時代、カストロは所長のメネンデス・ピダルからとりわけ方法論的な面で影響を受けた。メネンデス・ピダルは、ドイツの実証主義的方法論をスペインへ導入した人物で、カストロだけでなく歴史学研究所全体の方法論に影響を与えた。しかしながらカストロは、人間の「生」を考慮できないこの実証主義的方法論に常に限界を感じていた。そのためカストロはこの限界を克服する新たな方法論を模索し続けながら、実証主義的方法論で研究を行っていた。

さらにカストロは 1914 年に同研究所に発足した、哲学部門長に就任したオルテガ・イ・ガセットと知遇を得るようになり、彼から「生」の視座について影響を受けた。そしてオルテガとの知的交流が、カストロにとって実証主義の限界を克服する、新たな方法論確立の大きなきっかけとなった。

Ⅲ. 思想発展

数少ないカストロ思想の研究書の一つである『アメリコ・カストロの思想 *El pensamiento de Américo Castro* 』の著者、ギリェルモ・アラヤによると、カストロの思想発展は大きく二つの段階に分かれる。第一期は、歴史学研究センターで辞書編纂部門を担当し始めた 1910 年から 1938 年までであり、所長のメネンデス・ピダルの実証主義的方法論に従って、主に言語、教育、文学について研究した時期である。しかしながら、上述のようにカストロは、この時期にはすでに人間の「生」を考慮しない実証主義の限界を感じており、新たな方法論を模索していた。そしてオルテガの「生」理論との出会いにより、実証主義の限界を越える方法論の糸口をつかんだ時期でもある。

教育に関しては、大学の教育制度改善のために尽力した。特にカストロの関心は言語、文学、歴史の教授法に向かった。そして歴史教育の改善が急務であると感じたカストロは、歴史研究に強い関心を持つようになっていった。また文学研究はカストロがこの時期最も力を入れていた分野である。この分野最大の成果として 1925 年出版『セルバンテスの思想 *El pensamiento de Cervantes* 』が挙げられ、彼の著作の代表作として知られている。

第二期は、カストロの思想的危機が起った 1938 年から亡くなる 1972 年

までであり、オルテガの「生」理論を取り入れたカストロ独自の歴史学方法論の形成、そしてそれに基づくスペインの特殊性研究の時期である。ギリェルモ・アラヤによると、第二期はさらに次のように三つに分けて考えることができる。1）思想的危機から『歴史の中のスペイン *España en su historia: cristianos, morosyjudíos*』の出版までの独自思想形成期（1938-1948 年）、2）『スペインの歴史的現実』の増補改定版出版までの独自思想展開とその体系化の時期（1948-1962 年）、3）亡くなるまでの思想熟成期（1962-1972 年）である。

第二期の始まりとなった 1938 年の危機とは、それまでの伝統的歴史観の枠組みの中に、イスラムの要素を含めて考えることが非常に難しいと気づいたことである。カストロはこの危機を境に、イスラム的要素をスペインの歴史に取り入れようと、それまでの伝統的歴史観とは異なる歴史観を模索し始めた。そして最終的に、イスラムとユダヤの要素も近代スペインの主要構成要素であるとした歴史観を確立した。

またこの時期にカストロの活動に影響を及ぼした要因としては、思想の危機が起こる 2 年前の内戦勃発により亡命を余儀なくされたこと、亡命先のアメリカというスペインの外側の環境で、スペインとは何かの存在証明をしなければならなかったことなどが挙げられる。

著作については、1916 年の論文「16、17 世紀の名誉の概念に関するいくつかの考察 Algunas observaciones acerca del concepto del honor en los siglos XVI y XVII」において、はじめてオルテガの言う意味での「生」の視座が取り入れられている。そしてカストロ独自の解釈の萌芽を、初めてこの作品に見ることができる。さらに独自の解釈が具体的になって表されたのが、1925 年の『セルバンテスの思想』においてである。

第二期にあたる 1948 年の『歴史の中のスペイン』で、イスラムの要素をスペインの主要構成要素とした、完全に彼独自の歴史観が表明された。この時点で、ようやくオルテガの「生」の視座が、完全に彼のものとして確立された。彼の探求心はこの時点でとどまることなく、1954 年には『歴史の中のスペイン』の内容をかなり変更したものが出版された。また同時に、タイトルが『スペインの歴史的現実』と変更された。さらに 1962 年には 1954 年版の増補改訂版が出版され、この出版でもって彼の思想が完成したといえよう。

Ⅳ．理論的仮定

カストロはオルテガの「生」理論に着想を得て、「生」を考慮したそれまでの実証主義的方法論の限界を克服する、新しい独自の歴史解釈[4]に至ったわけであるが、この解釈を客観化するために次の二つの概念を定義した。それが‘morada vital’（生の住み処）と‘vividura’（生きさま）である。

この二つの概念はカストロの歴史観を理解する上でカギとなる概念[5]で、1962年版『スペインの歴史的現実』の中で初めて定義されている。

カストロによるとまず、‘morada vital’とは生の営みそのものを指し、歴史的様相を備えた全ての国民集団の中に、それぞれ異なった様式で存在するものである。そしてそれは各集団の行動様式、価値観などの基盤となっている。次に‘vividura’はその‘morada vital’の中で、その人間集団がいかに自らの行動を選択していくかというプロセスや、いかにその中に存在しているかを感じ取ることを指す。

本稿の主たる分析の対象である1966年版『スペイン歴史的現実』（1962年増補改訂版再版）に、この二つの概念についてカストロが簡潔に説明している箇所があるので以下に引用する。

「私はスペイン性（españolidad）が作り上げられている‘生の作業場’（el taller de vida）を、この歴史の中心であり、行為者としてみなしている。したがって常に包括的で、一貫性のない特徴である、部分的な精神的特徴を中心にしているのではない。また私は、まるで生が前もって与えられた１つの実体であるかのように、そしてその実体の上に、理由や原因があるかのように、外側の状況を生と同じ流れから離されうるものと考えなかった。歴史になりうる生は、内なる流れや経過から成り、その中で外的な動機が形と現実性を帯びるのである。つまりそれが意味を与えられた事実、出来事に変わるのである。この様な意味を付された事実、出来事はある国民特異な様相を描き出し、その生の内部（dentro）を明らかにするのである。そしてこの内部は決して他の共同体と同じになることはない。しかしこの内部とは、古典的本質と同じ静的で完成された実体ではなく、ある機能、あるいは後に示すような不変性に似た流動的な存在なのである。しかしこの内部という語はあいまいな定義である。つまりそれをある可能性の水平線と、障害の水平線を前にして生きるという事実と呼ぶことも出来る。このような意味の時には、私はそれを‘morada vital’（生の住み処）と呼ぶ。またその内部のことを、人間が自らの人生をこの‘morada vital’でどのように扱い、

そこに存在しているという意識を得ているかという様式ということも出来る。このような意味の時には、私はそれを‘vividura’と呼ぶ。この‘vividura’は生活体験の様式、つまり‘morada vital’の潜在意識下において機能していることを意識することの様式といえる。」[6]

この部分を中心にカストロの説明を分析していくと、一見‘morada vital’は国民性という概念に似ている印象を与えるが、「生」の考慮の有無という点が大きく異なっている。つまり彼の‘morada vital’は国民性では考慮されていない、ある人間集団の好みと周辺環境の可能性と不可能性の間でのゆれ、つまり人間の「生」の部分に光を当てた、動的な概念なのである。[7]

説明の中に‘morada vital’を家のように例え、その家の中に自分達が作ったものの他に、他から持ち込まれた家具があるというカストロの言及がある。[8] この言及から私は、次の例でカストロの‘morada vital’がよりよく理解できると考える。

私達が家にいると感じることが出来るのは、自分の家にいるときである。その理由は、その中の家具などが自分の好みによってその家に調和するように選ばれているからである。しかしながらその家具はずっと変化しないわけではなく、買い換えたりして少しずつ変化していく。そして買い換える際に私達にはどんな家具でも購入できる可能性はあるものの、自分の好み、他の家具などとの調和を考慮した上で選択される。だからこそ私達は家の中の家具が変わっても、そこが自分の家であると感じなくなったりしないのである。この例をカストロの言葉に合わせると、人間集団の好みが家具を購入する人の好みで、周囲の環境の可能性がどんな家具でも購入することが出来るということ、不可能性が自分の好みや家に合うものでなければ選択されないということといえる。また国民の価値観や生き方がこの場合の家具にあたる。

以上のことをまとめると、ある人間集団がある‘morada vital’にいる時が一番居心地が良いと感じるとき、その人間集団はその‘morada vital’によって作られた国民といえる。そしてその‘morada vital’にはもともと備わっている家具、つまり独自の価値観があり、それがその国民の行動の基準となっている。しかしその家具は永遠に同じではなく、その‘morada vital’の住民には他の価値観などを自由に持ちこむことが出来るという可能性を有している。しかしもう一方で、自分達の‘morada vital’に調和するものや自分達の価値観に合うものでなければ実際には取り入れられない

という不可能性も有している。各国民はこの不可能性があるからこそ他の国民の影響を受け、少しずつ変化はしても独自の特徴を持ち続けることが出来るのである。

そして国民集団が、自分の‘morada vital’の制約を意識して他から価値観を受け入れ、自分達のものにしていくプロセスが‘vividura’といえる。この‘vividura’に関してカストロはフランツ・キュモン Franz Cumont がローマの歴史について描いた『ローマ多神教における東方宗教 *Les religiones orientales dans le paganisme romain*[9] 』を引用し、ローマ人達がいかにして自分たちの特徴や気質（‘morada vital’）を変化させず、他国から入る数多くの宗教を自分たちの価値観として受け入れていったかというプロセスを‘vividura’の例として挙げている。[10]

この他にカストロは‘morada vital’について、永遠に続く存在ではなく、ある条件下で消滅し新しいものにとって代わられる可能性を有していると述べている。その条件とは、急激かつ長期にわたる社会的大変化、つまり他の言語を話すようになるとかそれまでの自分達の国民がどのようであったかの意識を失うとか、過去に書かれた記述が理解できないなどで、このような現象が起こると‘morada vital’は消滅する、つまりその国民の存在がなくなるのである。[11]

この二つの概念を基に、カストロは人間の「生」を考慮したスペイン史、スペイン人解釈を行いスペインの現実に迫った。

V．カストロが示したスペイン性

前章で説明した二つの概念を基に、カストロはスペイン解釈を行い、最終的に「近代スペインは、711年のイスラム勢力侵入により、イベリア半島で生まれたイスラム教徒・キリスト教徒・ユダヤ教徒という三つの血統＜カスタ＞の共存と葛藤から生まれた共同体である」という解釈に至った。

カストロにとって711年のイスラム侵入が、それまでのイベリア半島住民にとっての社会的大変化なのである。そしてこの大変化によりイベリア半島ではそれまでの‘morada vital’が消滅し、新しい‘morada vital’が誕生し、それが今のスペインの基になっているという解釈に至った。

そしてこの解釈が、1898年世代の「スペインとは何か」の問いに対するカストロの結論といえる。つまり711年以前、イベリア半島において各人間

集団は、キリスト教徒という宗教上のつながりの意識はほとんど無かった。それが以前の‘morada vital’であった。しかし711年にイスラムという異教徒が入ってきたことにより、宗教の意識が芽生え、自分達はキリスト教徒だと思うようになった。

この二つの概念を基に、カストロが指摘したいくつかのスペイン人の特殊性については、以下に「不確実性」と「生を破壊しながら生きる」の二つを挙げることとする。

カストロによると、「不確実性」という感情が生まれる背景には二つの要因がある。一つは異教徒から国土を守り、さらに拡大するという大事業への賛美と、その遂行に要する戦闘的能力への絶対的自信、もう一つは国土の肥沃さである。この二つのプラス要因の反動として生じ、次第に強くなっていったのがこの不確実な感情である。つまり自分たちの偉大さへの絶対的自信の裏で、諸外国に自分たちが思っているように評価されていないなどの現実に対する落胆、不安、不信などの気持ちが生じ、それが自分自身への絶対的自信を揺るがすようになったということである。

このような不確実な状況は当時の記述によく見られており、カストロは数多く引用している。

> フェルナンド・デ・ラ・トーレはスペインでは何でも育つものの、生産物は輸入されていると述べていた。[12]

これはスペインでは、国土の肥沃さゆえに何でも育つが創造性、技術の要する作業ができないため、国土で育ったものから製品を作ることができなかった当時の状況を表している。また以下の記述では、スペインの帝国勢力が強くなっていく半面、帝国の統治、経済活動の中枢で常に外国人知識人の頭脳が頼りにされていた状況が表されている。

> ミゲル・セルベットはスペイン人とポルトガル人の帝国勢力を賛美しているが、彼らが常に外国人の書物を頼りにしていていることに気づいていた。[13]

この様な不確実な状況の結果スペイン人はそれまでの生活を全て否定し、全く新しい別の人生を作り出そうとするようになっていった。それが「生を

破壊しながら生きる」というもう一つの特徴である。以下にカストロが著作の中で挙げている幾多の例から、現代スペイン人に見られるこの特徴の一例を挙げる。

> 慢性的な病気としてスペインの存在を説明しようとしてきた歴史家達、(例えば『無脊椎のスペイン』におけるオルテガ・イ・ガセットのように)はまさに「生を破壊しながら生きる」という生き方が顕著に表れているケースである。[14]

つまり、これまでの歴史家達は本当の過去を避けるために無意識に架空の歴史を作り上げてきたのであり、その姿勢がカストロのいうところの「生を破壊しながら生きる」なのである。

またドン・キホーテから次のような引用がされている。

> 面倒見のよい全諸悪の探検家であるドン・キホーテはもう人生が終わりに近づいた頃次のように言明している。「私は今まで一生懸命働いて手に入れたものがわからない。」[15]

カストロはこの他にも実にたくさんの文学作品、歴史記述などを引用し、スペイン人の「不確実性」と「生を破壊しながら生きる」という特質を明らかにすることを試みている。そしてスペイン国内はもとより、全世界に向けスペインとは何かという前世代の命題に一つの結論を示した。

結論

本稿では1898年世代の命題、「スペインとは何か」を受け継ぎ、この問題に対して前世代よりも大きく踏み込んだ結論を提示するに至った1914年世代の知識人、アメリコ・カストロの歴史観とスペイン人解釈について考察してきた。

命題に対する結論とは「近代スペインは、711年のイスラム侵入後にイベリア半島で生まれたキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒の三つのカスタ<血統>の共存と対立から生じた共同体である」という解釈である。そしてこの解釈の基となる概念がオルテガの「生」理論にその着想を得た、'morada vital'(生の住み処)と'vividura'(生きさま)であった。

カストロの解釈における第一の特徴は、イスラム教徒、ユダヤ教徒の存在をスペインの主要構成要素としたことであり、このような解釈に至った要因としては主に次の二つが挙げられる。一つは彼がブラジルという外地で幼年期を過ごしたこと、もう一つは1936年の内戦勃発と同時に亡命を余儀なくされ、スペインの外側からスペインとは何かの存在証明をしなくてはならなくなったことである。

カストロが解釈において最も重視したことの一つが、人間の「生」の考慮であった。人の残した言葉からその人の「生」がより正確に捉えることが出来ると考えていたカストロは、実に多くの文学作品や歴史的記述を分析し、スペインの現実を捉えようとした。

このような理由により、カストロの歴史観、スペイン人解釈をより深く理解するには彼の各文章における引用の意図を知る事が重要であると考え、本稿では部分的にではあるがこの作業を行った。そして、近代スペインの始まりは711年からであり、近代スペインの主要構成要素をイスラム教徒・ユダヤ教徒・キリスト教徒という三つの＜カスタ＞としたカストロの歴史解釈と、これによって明らかにされた「不確実性」と「生を破壊しながら生きる」というスペイン人の特徴をより正確に捉えることを試みた。

註

[1] カストロが教鞭を執った主たる大学は、ウィスコンシン大学1937-1939年、テキサス大学1939-1940年、プリンストン大学1940-1953年、ヒューストン大学1955年、カリフォルニア大学1964-1968年などである。1940年にプリンストン大学で行った開講講演「スペイン文明の意味」"The meaning of spanish civilization" (*Américo Castro and the meaning of spanish civilization*, University of California Press, Berkeley, 1976, pp. 23-40.) は当時、非常に注目され、多くの学生が聴講に集まった。

[2] カストロの生涯については Aniano Peña, *Américo Castro y su visión de España Y de Cervantes*, Gredos, Madrid, 1975 を主に参照した。

[3] 以下にカストロが両氏に関して言及している論文をいくつか挙げる。Américo Castro, "inmemoriam", *La Nación*, Buenos Aires, el 6 de junio de 1937. Américo Castro, "Francisco Giner", *Semblanzas y estudios españoles*, University of Princeton Press, Princeton New Jergey, 1956, pp. 413-419. Américo Castro, "Manuel B. Cossío. Fue él y fue un ambiente ", *ibid.*, pp. 421-435.

[4]「カストロの歴史観は、資料・記録に基づくこのような実証主義に対する、意識的不同意を歩んできた。というのは彼にとって歴史とは、何よりも一つの伝記であるからである。そのため彼の著作につけられたタイトル『歴史の中のスペイン』からは、スペインという概念が歴史の中で展開される空想の登場人物のようにとれる。」, José Luis Abellán, *Historia crítica del pensamiento español*, Tomo V(II), Espasa-Calpe, Madrid, 1989, p. 344.

[5] José Luis Abellán, *ibid.*

[6] Américo Castro, *La realidad histórica de España*, ediciòn renovada, 3ª ediciòn, Porrúa, México, 1966, p. 109.

[7] *Ibid.*, p. 115.

[8]「私の直喩であるmoradaは近隣住民のmoradaに対して閉ざされてはいないし、隔離された状態でもない。その住民は出かけるし、戻ってくる。そして（自分のmoradaの中で）作られた家具のほかに非常に多種多様な（他の）moradaから持ち込まれた家具を持っている。その住民の自由は自分のmoradaに持ち込まれたものがどのようなものであろうと自分の住処の可能性と制限に拠っている。」, *Ibid.*, p. 111.

[9] Franz Cumont, *Les religiones orientales dans le paganisme romain*, 4ª edición, 1929. Américo Castro, *ibid.*, p. 117 より引用。

[10]「ローマ人はこの件に関してはギリシア人とはかなり異なり、その歴史全体を通じて理論と原理を何よりもまず実践的結果によって判断してきた。そして常に彼らは思想家たちに対して、戦士と商人が思想家たちに対して感じていた軽蔑の念を感じていた。しばしばローマ世界においては、哲学が形而上学的思索からそれ、道徳に全ての関心が集中してしまうことが認められてきた。後に、同様にローマ教会は繊細な古代ギリシア人たちに、神的概念の本質について、あるいはキリストの二つの性質についての果てしない論争を残すだろう。ローマのキリスト教徒を興奮させ、分断している論争は、例えばギリシアの教義のような生きるという振る舞いに関する論争である。」, Franz Cumont, *ibid.*, p. 31. Américo Castro, *ibid.*, pp. 117-118 より引用。

「気質によって、そして伝統によって、ローマの精神は道徳と国家の支えとして宗教を使う必要性を感じていた。」Franz Cumont, *ibid.*, p. 34. Américo Castro, *ibid.*, p. 118 より引用。

[11]「moradaのvitalが変化するには急激かつ長期的社会大変化、つまりそれまでの自分がどうであったかの意識を失う、他の言語を話す。過去の記述が理解できない、他の集団生の様式に向かう、つまり力や名声あるいはその両方によって支配してきた他の集団の勢いのある行動の意のままになってしまうことが必要である。このような場合にそのmorada vitalはバラバラとなり新しい様式で再構築されてきた。」Américo Castro, *ibid.*, p. 111.

[12] Américo Castro, *Op.cit.* p. 97.

[13] Américo Castro, *Ibid.*

[14] Américo Castro, *Ibid.*, p. 105.

[15] Américo Castro, *Ibid.*, p. 81

参考文献

ABELLÁN, José Luis: *Historia crítica del pensamiento español*, TomoV(I-III), Espasa-Calpe, Madrid, 1989-1991.

-------: *Historia del pensamiento español: de Séneca a nuestros días*, Espasa-Calpe, Madrid, 1996.

ARAYA, Guillermo: *El pensamiento de Américo Castro*, Alianza, Madrid, 1983.

-------: "Evolción y proyeciones del pensamiento de Américo Castro", Estudios sobre la obra de Américo Castro, Taurus, Madrid, 1971, pp. 43-66.

BARCIA, José Rubia: "What's in a Name: Américo Castro (y Quesada)", *Américo Castro and the Meaning of Spanish Civilization*, University of California Press, Berkeley, 1976, pp. 3-22.

CASTRO, Américo: *La realidad histórica de España*, edición renovada, 3ª edición, Porrúa, México, 1966.

-------: *España en su historia: cristianos, moros y judíos*, 3ª edición, Crítica, Barcelona, 1984.

-------: "Las castas y lo castizo", *La torre, Revista General de la Universidad de Puerto Rico*, Sobresale del N° 35-36, Cvltvra, (julio-diciembre, 1961), pp. 65-85.

-------: *El pensamiento de Cervantes*, Noguer, Barcelona, 1972.

-------: *Semblanzas Y Etudios Españoles: homenaje ofrecido a Don Américo Castro, por sus ex-alumnos de Princeton University*, University of Princeton Press, Peinceton New Jersey, 1956.

GOMEZ-MARTÍNEZ, José Luis: *Américo Castro y el origen de los españoles: historia de una polémica*, Gredos, Madrid, 1975.

PEÑA, Aniano: *Américo Castro y su visión de España y de Cervantes*, Gredos, Madrid, 1975.

LAÍN ENTRALGO, Pedro (dir.): *Estudios sobre la obra de Américo Castro*, Taurus, Madrid, 1971.

ALONSO, Dámaso; LAPESA, Rafael; LAÍN ENTRALGO, Pedro y otros: "Breve encuesta española. Doce españoles hablan de Américo Castro", Papeles de son armadans, Tomo XXXVII, (mayo,1965), pp. 119-142.

GARAGORRI, Paulino: *Introducción a Américo Castro: El estilo vital hispánico*, Alianza, Madrid,1984.

木下　登　「ある歴史家アメリコ・カストロ」『吹き抜ける風』　行路社　1995 pp. 101-110。

佐々木　孝　「アメリコ・カストロに向かって」『常葉学園大学紀要外国語学部』第1号　1984年　pp. 11-23。

インディアスにおける真珠の発見
－植民地支配の構図に関する一考察－

立岩　礼子

インディアスは黄金郷としてヨーロッパの人々を魅了し，征服者たちは金を求めて密林の奥地まで分け入った。期待に見合うほどの金を獲得することはなかったが，銀の鉱脈が発見され，とりわけペルー副王領のポトシ銀山はスペイン帝国の経済的支柱となった。この金と銀と並んで人々の関心を集めたのが真珠であった。

金や銀は貨幣として使われたが，真珠は贅沢品であり，宝飾品として加工の対象にされたため，真珠そのものの経済的な価値を検証することは容易ではない。1977年にエンリケ・オッテが大部の研究書を出版したが，その資料解説によれば真珠取引についての資料が乏しいことは明らかである[1]。

従って，本稿ではクロニスタの記述[2]をもとに，真珠がとりわけヨーロッパ人にとっていかなる価値を持ち得たのかを検証する。そして，この真珠がスペインを介してヨーロッパへ輸出される過程を勅令をもとに辿り，インディアスにおける植民地支配構造の枠組みにおいてその重要性を考察する。

1．ヨーロッパにおける真珠の価値

もともと真珠はアレクサンドロス大王の遠征によってペルシャやインドから地中海沿岸に紹介され，珍重されるようになった。ペルシャ湾，紅海，インド洋は真珠貝の棲息地域で，イランではアケメネス朝の王女の墓から216個の真珠をあしらったネックレスが発見され，紀元前4世紀のものと鑑定された[3]。オリエントでは高価な宝飾品として男女を問わず高貴な人々の装束や道具を飾り，権力を象徴した。

古代ギリシアでは，哲学者プラトンが真珠を男女両性の特質を備えた本質的な人間を象徴する球体と見なし，詩人ホメロは神々の涙に喩えた[4]。しかし

---

[1] Enrique Otte, pp. 555-556.
[2] 16世紀のクロニカに見られる真珠に関する記述の収集にあたり，本学4回生の村田真喜子さんのご協力を得ました。この場を借りて，御礼申し上げます。
[3] Kritin Joyce y Shellei Addison, p. 76.
[4] *Ibid.*, p. 30.

ながら，当時，一般には，愛と美の女神アフロディテが海面から現れた際，身体から滴った水滴が海で真珠に変わったとして，女神の美しさを象徴する宝石として知られた[5]。

装飾品として使われ始めたのはエジプトであった。後期プトレマイオス朝以降，アレキサンドリアの市民は宝飾品としてだけでなく，化粧品にも用いていた[6]。

一方，初期キリスト教世界では，真珠は処女懐胎の象徴となった。腐敗した世に生を受けたキリストは，牡蠣の中の真珠に喩えられた[7]。その結果，祭壇をはじめとした教会の品々に真珠があしらわれるようになった。

こうして，ローマ帝国時代には，プリニウスが真珠を身につけるだけでなく，その上を踏んで歩いても飽き足らないのだと嘆くほど人々は真珠の宝飾品に夢中になった[8]。帝国崩壊後も真珠に対する憧れは衰えなかった。東ローマ帝国にはオリエントの真珠が大量に流れ込んだ。

当時は宝石の加工技術が進んでおらず，天然の真珠は珍重された。十字軍の時代には戦勝の記念や婚礼の祝いに盛んに用いられた。富や権威を象徴するだけでなく，結婚に幸せを呼ぶものとも信じられるようになり[9]，ヨーロッパでは夫婦和合のシンボルとして，婚礼の装飾品に多くあしらわれた。

ルネサンス期に入ると，真珠はベネチアにて活発な取引が行われた。マルコ・ポーロの『東方見聞録』にも真珠に関する情報は多い。例えば，チンギスハンの個人の財産として金銀，宝石，真珠，金銀器皿などを挙げ[10]，ジパングについては「この国には多量の真珠が産する。ばら色をした円い大型の，とても美しい真珠である。ばら色真珠の価格は，白色真珠に勝るとも劣らない。…真珠のほかにも多種多様の宝石がこの国に産する。ほんとうに富める島国であって，その富の真相は筆舌には尽くせない[11]」と記している。メディチ家からハプスブルグ家に嫁いだカトリーヌ・ド・メディシスとマリー・ド・メディシスは名だたる真珠のコレクターであった。

---

[5] *Ibid.*, p. 33.
[6] *Ibid.*, p. 84.
[7] *Ibid.*, p. 33.
[8] *Ibid.*, p. 87.
[9] *Ibid.*, p. 33.
[10] マルコ・ポーロ，Ⅰ, p. 202.
[11] *Ibid.*, Ⅰ, p. 130.

新大陸が発見されると，真珠取引の場はベネチアからセビーリャに移った。スペインはインディアス統治を通じて世界でも有数の真珠貝棲息地を手中にし，ヨーロッパ各地へとインディアスの真珠を供給することになった。

2．インディアスにおける真珠の価値

インディアスで最初に真珠を発見したのはコロンブスであった。1498年の第三回目の航海中，8月13日から14日にかけてベネズエラ沿岸で真珠貝の棲息地を発見した[12]。コロンブスの第四回目の航海に際し，国王は島々の地理と住民の様子のほか，金，銀，宝石，真珠，香辛料についての報告書を求めたが[13]，ここから真珠に対する王室の関心の高さを伺い知ることができる。

インディアスにおける最初の民族誌学者とも言われるフェルナンデス・デ・オビエドは1526年に『インディアス自然誌提要』を著した。最終章で新大陸について特筆すべき事項の二つとして香辛料取引の航路の短縮と豊かな財宝の存在を挙げている。そして，インディアス発見以来，金や真珠が毎日のようにカスティーリャに送られており，今後も送られることになるだろうと記している[14]。

さらに，金と真珠についてはそれぞれ一章を設けて説明している。真珠はクバグア及びクマナの沿岸で採れたが，オビエドによればさらに南やカルタヘナ沿岸でも真珠が採取される[15]。その後半世紀の間に真珠貝の棲息地が次々と発見され，アコスタは，「真珠は新大陸のいろいろな地方で取れる。中でも多産なのは，パナマの近くの南の海（Mar del Sur）で，そこには，真珠が採れるため，その名で呼ばれる島々がある。しかし，質，量の点でまさるのは，北の海（Mar del Norte）のアチャという名の川の近くである」と報告をし[16]，インディアスが真珠の宝庫であるとの印象を与えている。

興味深いことに，エルナンデスは『ヌエバ・エスパーニャ自然誌』において，住民は首飾りや腕輪などを花で作っており，彼らにとって真珠は何ら価値はないと記し[17]，真珠に対するヨーロッパ人と先住民の反応の差を指摘した。一方，ドランテスも，「インディオたちはスペイン人を盛大な食事に招待し

---

[12] Bartolomé de Las Casas, II, p. 9; Otte, p. 93; サルバドール・デ・マダリアーガ, pp. 400-401.
[13] Antonello Gerbi, p. 140.
[14] Gonzalo Fernández de Oviedo, p. 177.
[15] *Ibid.*, pp. 172-173.
[16] ホセ・デ・アコスタ, p. 364.

た後で，多くの大小の真珠を贈ったが，インディオたちは真珠には目もくれず，我々スペイン人が喜んでいるのを見ていた[18]」と述べ，先住民にとっては真珠があまり価値あるものとは映らなかったことが判る。従って，真珠の採取はスペイン人による独占市場となった。

採取された真珠は陸揚げされ，最寄りの港へ運ばれる。カルタヘナにはマルガリータ島から，そして，リオ・デ・ラ・アチャはカラカスを経て多くの真珠が集まった[19]。パナマも拠点の一つであった。実際，「真珠は，いろいろな風に細工され，数珠つなぎにするために孔をあけられる[20]」ため，カルタヘナには真珠に紐を通し，長さを調節するだけの専門の通りがあったが[21]，それ以上の細工を行う専門家はいなかった。

真珠は植民地でも使われた。やはり副王領政府の要人や高貴な女性たちの衣装に見られる。メキシコ市参事会の議員たちも祝祭の衣装には中国からの絹に真珠を縫いつけて豪華に見せようと躍起になった。18 世紀にルイス・デ・メナが描いた「混血のシリーズ Serie de Mestizas」の画には[22]，スペイン人を夫とする女性は，彼女自身がスペイン人でなくても真珠を身につけていることで判る。真珠は自らの社会的地位と権力を示すものであるが，ベネズエラでは真珠の輸出にたずさわる女性も登場していた[23]。

1512 年，カトリック王フェルナンドはインディアス各地のスペイン人に対して真珠採取を許可し，五分の一税（quinto real）を納めることを定めた。この税により採取した真珠のうち最も価値のあるものを王室に納めることが要求された。そのため，貝を陸揚げして開く際に，必ず財務担当官（Oficiales

---

[17] Francisco Hernández, p. 303.
[18] Baltasar Dorantes de Carranza, p. 118. 17世紀にメキシコを旅したイギリス人トーマス・ゲイジはアステカ王国では真珠の専門店が存在していたと記しているが，先スペイン期における真珠の価値については別の機会に譲ることとする。
[19] Thomas Gage, p. 190.
[20] アコスタ, pp. 364-365.
[21] *Ibid*, p. 192.
[22] 「スペイン人の男性とインディオの女性から生まれた子供はメスティソである」，「インディオの男性とメスティソの女性から生まれた子供はコヨーテである」などの混血の種類を描いたシリーズで，マドリードのアメリカ博物館（Museo de América）に展示されている。
[23] Ermila de Veracoechea, p. 75.

reales）が立ち会うことも定められ，良質の真珠を税金として確保した[24]。場合によっては代わりに現金や同額の価値のある物で支払うことも許された[25]。

五分の一税として納める真珠は決まった方法に従って本国へ送られた。まず書記官（escribano）が船長（maestre）の立ち会いのもとで真珠が本物である旨を証明しなければならなかった。そして，財務担当官が真珠の重さを量り，頑丈な錠がついた箱に納めた。この箱はセビリャへ向かうスペイン船の船長や提督に預けられ，本国へ送られた[26]。

五分の一税を納めると，残りを真珠を生業としている者が市場に出す。カルタヘナではマルガリータ島で採れる真珠の取引で栄えることになった[27]。マルガリータ島で採取される一艘分は，６万から８万ドゥカードあるいはそれ以上の価値があった[28]。当然の事ながら，海上でイギリスやオランダからの略奪に遭わないように護衛船団がついた[29]。また，おとりの大型船を出航させ，別の船で輸送する場合もあった[30]。

イングランドのチャールズ一世国王夫妻は有名な真珠コレクションの持主であり[31]，エリザベス一世は贅沢に真珠を縫い込んだ豪華な衣装に身を包んだ女王の姿を肖像画に多く残している。しかし，スペインの場合，カルロス一世の妃イサベルやフェリペ四世の妃マルガリータは真珠を身につけた肖像画があるが，歴代国王とりわけハプスブルグ朝の国王たちには真珠が見られない。これは王室に十分な五分の一税が納められなかったことや，スペインを経由せずにヨーロッパに真珠が流出した事実を間接的に物語っていないだろうか。

真珠が金や銀をはじめとした交易品と大きく異なっている点は，真珠は輸送の際にかさばらず，高い値段で取引が可能という価値ある交易品であった。従って，略奪の標的になるのも当然のこととも考えられる。

---

[24] *Recopilación de leyes de los reynos de las Indias*,（以下，*RLRI*と略す。）IV-XXV-xxxx.
[25] *RLRI* IV-XXV-xxix.
[26] *RLRI* IV-XXV-xxxxvi.
[27] Gage, p. 190.
[28] *Ibid.*, p. 193.
[29] *Loc. cit.*
[30] *Loc. cit.*
[31] Joyce y Addison, p. 94

セビーリャでは銀細工師が仕事を請け負い，真珠の鑑定も行った。宮廷のあったマドリードにも専門の真珠細工師は存在しなかったため[32]，遠方でも必要に応じてセビーリャから宮廷まで呼び寄せるのが常であった。

3．真珠の採取とその労働力

真珠の採取作業を円滑に行うために，「ランチェリア（ranchería）」を建設しなければならなかった[33]。そこではこの仕事に従事するスペイン人，インディオ，黒人が寝泊まりできるようにそれぞれ小屋を建てるように定めてあるが[34]，インディオたちは地べたに藁を敷いて眠り，逃亡しないように足枷をはめられた[35]。海賊の襲来などの非常事態に備え，真珠や貝を保管する倉庫も必要とされた[36]。

このランチェリアからは，判事（Alcalde ordinario）一名と議員（Diputado）一名が選挙によって選出された。任期は一年であった。彼らはニヶ月に一回の割合で参事会を開き，真珠採取に必要な経費分配や新たな真珠の棲息地の分割を請け負った[37]。

カヌーの所有者はこのランチェリアの持主であり，参事会メンバーを選出する権利を与えられていた[38]。参事会のメンバーもカヌーを1艘か2艘保有していた。20艘も所有している者もいた。また，カヌーには，後述するように当初は多くて10人ほどしか乗れなかったが，16世紀半ばには24人も乗れる大型のものもよく使用された[39]。

1526年のオビエドの記述によれば，クバグア島ではサント・ドミンゴやサン・フアン在住のスペイン人がインディオを雇って真珠の採取を行わせていた。例えば，パナマで真珠採取に従事していたディエゴ・カバリェロは35人のインディオを潜らせていたが，平均年齢は31歳で，一番年下は12歳で，一番年上が50歳であった[40]。インディオたちは真珠の量に応じて5人から10

---

[32] Juan Ignacio Arnaud Rabinal, p. 53.
[33] *RLRI* IV-XXV-i.
[34] *RLRI* IV-XXV-i.
[35] Las Casas, III, p. 609.
[36] *RLRI* IV-XXV-ii.
[37] *RLRI* IV-XXV-vii.
[38] *RLRI* IV-XXV-x.
[39] Otte, p. 48.
[40] *Ibid.*, pp. 509-510.

人ほどのグループで海へ出た[41]。一人だけ舟に残り，残りの者が素潜りで貝を採った。高波の場合は，石を背負って潜り，海中でバランスを取れるように工夫していた[42]。舟に残るのはスペイン人で，長時間潜って疲労しているインディオや黒人に向かって発砲し，何度も潜らせた[43]。日の出から日没まで潜り，夜に島へ戻り，雇われ先に真珠を届けるのが常であった。夕食には魚とパンをあてがわれ[44]，採取量に応じた給金が支払われた[45]。大量の場合はその場で貝を開き，真珠を取り出す作業を行った[46]。貝の中身はその場で食べることもあれば捨てることもあった[47]。

早くも1529年にこのクバグア島でのインディオによる真珠採取を制限する勅令が発布された。この勅令によって，冬または気温が低い場合に海に潜らせることが禁じられ，夏や天気が良好であっても1日4時間までで，水深5ブラサ[48]までの漁に限られた[49]。大量の場合は1日3時間までで，水深5～8ブラサまでと定められた[50]。更には，真珠採取の前後に労働させないこと，食事とは別にワインを一人一人にふるまい，漁の往復のための衣服を与えることも命じた[51]。

さらには1585年の勅令では，インディオに真珠採取させることを禁じ，代わりに黒人奴隷を導入することを定めた。インディオを使用した場合は死刑に処するとした[52]。その後の1590年にアコスタが次のように記しており，勅令に反したインディオ擁護の実態を伝えている。「真珠採りのやり方を見たが，それは，気の毒な潜水夫たちの労力と犠牲において行われる。彼らは，6，9，12ブラサの海底までもぐって真珠貝を探す。貝はふつう海の岩や暗礁にへばりついている。そこから取って，背に負うと，海面に上ってカヌーアの上に投げこみ，貝の口を開けて，中から宝を取り出す，海中の水温はひどく低い。貝を探す間，しばしば15分，いや30分も息を止めているのは息

---

[41] Oviedo, p. 172.
[42] Oviedo, p. 172.
[43] *Loc. cit.*
[44] Las Casas, III, p. 609.
[45] Oviedo, p. 172.
[46] *Loc. cit.*
[47] *Loc. cit.*
[48] 人間が両腕を開いた時の右の手先から左の手先までの長さを1ブラサとした。
[49] *Cedulario*, Tomo 8, Fol. 298, Núm. 393, citado en Ayala, p. 110.
[50] *Loc. cit.*
[51] *Loc. cit.*
[52] *RLRI* IV-XXV-xxxi.

を止めていられるようにするために，哀れな潜水夫たちには，味気のない食料をほんの少し与えるにとどめて節制させる。」[53]

海での潜水作業は過酷であった。疲労から溺死したり，鮫，ワニの餌食になって多くの潜水夫が死んだ[54]。ラス・カサス神父は，クバグア島の先住民は真珠採取にかり出されたために絶滅したと伝えている[55]。インディオに代わって黒人奴隷が使われたが，彼らの死体は回収されなかったため，漁区に鮫が多く集まり，危険極まりなかった。そのため，死者が出た場合は，真珠採取に優先し，死体回収を行うことが勅令により命じられた[56]。

こうした犠牲を減らし，また，更に深い場所で真珠採取を行うための道具も幾つか開発されたが[57]，結局は人間が海に潜って採取する方法が一般的であった。そして，この作業によって犠牲になったインディオについては，鉱山やアシエンダにおける労働と同様，植民地の経済基盤の根幹に拘わる問題としてスペイン王室にとって看過できないものであった。

おわりに

1665年頃に描かれた『騎士の夢 El sueño del caballero』という作品がある[58]。騎士の夢は富や権力を手中にし，教養を身につけることであり，作品にはこうしたものを象徴する品々が緻密に描かれている。騎士が居眠りをしている脇のテーブルの上には，貨幣，トランプ，金の時計，馬具，銃，書物，譜面，仮面，地球儀，生花，しゃれこうべなどが乱雑に配されており，その中央には蓋が開いた宝石箱がある。そこには装飾品が投げ入れられたように無造作に置かれている。大粒の真珠のネックレスが一本，小粒の真珠の長い三重のネックレスが二本（あるいはさらに二重になっている），大輪の花を形取ったような小粒の真珠のブローチ一個である。ほかには長い金の胸飾り一本と金の指輪一個のみである。このように当時のヨーロッパ人にとって真珠は金に勝るとも劣らない魅力を持っていた。

---

[53] アコスタ, p. 364.
[54] Las Casas, III, p. 609.
[55] *Ibid.*, III, p. 575.
[56] *RLRI* IV-XXV-xxxv.
[57] Arnaud Rabinal, p. 50.
[58] 画家アントニオ・デ・ペレダ（1611年～1670年）による作品で，マドリードのサン・フェルナンド王立美術アカデミーに収蔵されている。

新大陸発見当時，金の採掘量が期待を裏切り，銀鉱山の開発が軌道に乗るまでの間，真珠はスペインにとっては重要な交易品であった。実質的な利益の獲得というよりは，王家の財宝としてあるいは王侯貴族の宝飾品としての価値が強かったことは否定できないが，真珠をめぐってヨーロッパ列強がカリブ海に注目し，スペイン船の略奪に躍起になった。その後の真珠をめぐる争いは，この地域の植民地統治の縮図とも言える。また，真珠採取にはインディオや黒人が投入され，その生命さえも顧みられなかった。スペイン人は本国あるいは大陸の植民都市から真珠交易で利益を獲得し，仲介人らはその利益をごまかした。イギリスやオランダは輸送船を襲撃し，真珠はセビリャを経ずに宝石市場として賑わったニューレンブルグやアウスブルグに近いアンベーレスで取引された[59]。

ヨーロッパにおける真珠への強い関心は，17 世紀に途絶えた。世界の真珠供給地が採り尽くされ，枯渇したからであった。また，プロテスタントを中心に禁欲が声高に唱えられたために贅沢が慎まれるようになり，イギリスでは真珠好きの統治者たちの時代が終わった。模造真珠が登場し，宝石研磨技術の改良により天然真珠はそれほど珍重されなくなっていった。

真珠の取引についてはまだ不明な点が多く残されている。これは，採取された真珠が本国にすら送られなかったり，略奪されたりと，産出量や輸出量に関するデータが欠如していることや，真珠採取を許可された者がスペイン本国に住んでおり，そこからヨーロッパ市場に出回ったり，贈答品として使われたため，全体像が把握しきれないという事情が関係している。

しかしながら，真珠はインディアスにおける植民地支配構造の枠組みにおいて，金や銀と同様に，それを獲得し，そこから富を得ようとする者たちを魅了した。バロックの時代を反映して，単なる宝飾品というよりはエリート層の権力と富を象徴し，彼らの虚栄心を満たすとともにその美意識を際立たせる貴重品としての価値を有していた。一方，真珠採取に際して，スペイン王室はインディオや黒人の労働力を確保せねばならず，陸と海の違いはあるにしても，後にエンコミエンダや銀山開発でも生じた問題に早くも直面した。とりわけインディオ擁護という深刻な問題を抱えることになったのである。

---

[59] *Ibid*, p. 56.

参考文献

Acosta, José de, *Historia natural y moral de las Indias*, Historia 16, Madrid, 1986.

Antonello Gerbi, *La naturaleza de Indias Nuevas*, FCE, 1978.

Arnaud Rabinal, Juan Ignacio, "Perlas y aljófar", *Buenavista de Indias*, Aldaba, Sevilla, pp. 48-63.

Ayala, Manuel Josef de, *Diccionario de Gobierno y Legislación de Indias*, Instituto de Cooperación Iberoamericana, Cultura Hispánica, Madrid, 1993.

Colon, Cristobal, *Diario de a bordo*, Historia 16, Madrid, 1985.

Dominguez Compañy, Francisco, "Municipal Organization of the Rancherías of Pearls", *The Americas*, XXI, Núm. 1, Julio, pp. 58-68.

Dorantes de Carranza, Baltasar, *Sumaria relación de las cosas de la Nueva España*, Editorial Porrúa, México, 1987.

Durán, Diego, *Historia de las Indias de Nueva España*, III vols., Porrúa, México, 1967.

Fernández de Oviedo, Gonzalo, *Sumario de la natural historia de las Indias*, Historia 16, Madrid, 1986.

Gage, Thomas, *Nuevos conocimiento de las Indias Occidentales*, Conaculta, México,1994.

Hernández, Francisco, *Obras completas*, V vols., UNAM, 1959.

Ibyll, C. P., "Las perlas de la Margarita", *Américas*, XIX, Núm. 9, Septiembre, pp. 8-14.

Joyce, Kristin y Addison, Shellei, *Pearls: Ornament & Obsession*, Simon & Schuster, New York, 1993.

Kuns, George Frederick, *The book of the pearl*, 1908.

Las casas, Bartolomé, *Historia de las Indias*, 3 vols., Biblioteca Ayacucho, Caracas, 1956.

Lorenzo Sanz, Eufemio, *Comercio de España con América en al época de Felipe II*, 2 vols., Institución Cultural Simancas, Valladolid, 1986.

Mosk, Sanford, "Spanish Pearl-fishing operations on the Pearl Cost in the XVIth century", *HAHR*, XVIII, 3, pp. 392-400.

Otte, Enrique, *Las perlas del Caribe: Nueva Cádiz de Cubagua*, Fundación John Boulton, Caracas, 1977.

Recopilación de leyes de los reinos de Indias, 5 vols., Miguel Ángel Porrúa, 1987.

Veracoechea, Ermila de, "Más allá del abanico y el peinetón: La mujer en la sociedad colonial venezolana", *Nueva Sociedad*, Marzo-abril, 1988, pp. 73-79.

アコスタ，ホセ・デ　『新大陸自然文化史』全２巻　増田義郎訳・注　岩波書店　1965年。

ポーロ，マルコ　『東方見聞録』全２巻　愛宕松男訳・注　平凡社　1980年。

マダリアーガ，サルバドール・デ　『コロンブス正伝』　増田義郎・斉藤文子訳　角川書店　1993年。

日本人のスペイン論（その三）

坂東省次

３．３．内戦後

３．３．１．野上弥生子（明治１８－昭和６０年）

１９３６年7月１７日夕方、スペイン領モロッコで勃発したスペイン内戦は、３年近くにおよび、百万人もの犠牲者を出して３９年４月１日に終結した。

内戦終結間もないスペインを訪れた日本人は、作家の野上弥生子その人であった。

野上は英文学者で能の権威として知られた夫、野上豊一郎（明治１６－昭和２５年）が客員教授として渡英するのを機に、夫婦で欧米旅行を企て、その途中にスペインを訪れたのである。時に１９３９年8月１６日のことであった。

野上夫妻は当時の矢野スペイン公使とは昵懇の間柄であったようで、神戸からヨーロッパに向かう同じ船で長旅を楽しんでおり、その後、野上夫妻がパリからスペインに行く際にも、矢野公使はスペインからボルドーまで車で出迎えている。

スペインにはエンダヤから入国したが、内戦直後のこと、普通の旅行者は「指紋」までとられるなどスペイン入国ははなはだ困難な時代であったというが、公使の車で入国した野上夫妻はパスポートの提出だけですんだという。

入国したところは、スペイン随一の避暑地サン・セバスティアンであった。夏の３ヵ月は、日本の公使館もサン・セバスティアンに移動していたようであり、野上夫妻はこの公使館を根城にして、「贅沢な自動車旅行」[1]でスペイン各地を見てまわったという。サン・セバスティアン、ロヨラ、オニャーテ、ビルバオ、ブルゴス、バレンシア、ビトリア、マドリード、トレド、セゴビア、バリャドリード、リオハである。

これだけの国内旅行をして、どうして南スペインに行かなかったのか、疑問を抱くのは筆者一人ではあるまい。じじつ、野上夫妻もまた南スペイン旅行を予定していたのだ。しかしながら、ピレネー以北では戦局が急を告げてきた。スペインからの出発日を早めることを余儀なくされた両名は、南スペイン旅行をしかたなく断念したのであった。野上弥生子のスペイン南アンダルシア紀行が読めないのは残念至極である。

くり返すが、野上がスペインを訪れたのは、内戦終結からわずか４ヵ月半後のことであった。つまり、内戦の傷痕が各地にまだ生々しく残っているときであった。野上は訪問先で出会ったそれらの傷痕を次のように書きしるしている。

「そこにも籠城したカジノの大きな円屋根を頂いた灰白い石の壁には、弾丸のあとがなまなましくついている。」[2]

「町はずれの台地にあって、もとはどんなに美しかったろうと思われる大学都市がもっとも無惨に破壊されていた。焼かれた森の樹は、難破船の帆柱のように、ところどころに枯れて突っ立ち、各科の建物は歪んだ骨になって残っているか、煉瓦の屑の堆積かであった。」[3]

野上の眼は、戦争の中で失われた生命とともに、生の奇跡の誕生にも向けられていた。

「死んで行くものばかりでなく、生まれて来るものもそこにはあった。二ヵ月近くの籠城のあいだに二人の赤ん坊が生まれた。一人の父は、戦闘のただ中に奇しくも生をこの世に得た子

供の祝福を聖母に祈り、記念のためにアルカサールと名づけるということを、壁上に大きく書き留めている。明日をも知らぬ生命ぞと思いつつ書いたのであろう、となにかただならぬ感懐をその文字は旅人にも与えるのであった。」[4]

しかし、スペインは戦後の廃墟の中から、平和の行進を着実に始めようとしていたこともまた事実であった。野上はそれを民衆の生活の中に確認するのであった。

「娘たちは浮き浮きとはしゃぎたち、小さい写真屋の前で、自分たちの撮さした写真をのぞき合って笑ったりしている。この頃やっと出たというコルセットや、桃いろの乳当を並べた店も、彼女らをひきつけている。二十五ペセタから三十八ペセタの正札がつき、下は十六ペセタからある。ハンドバッグも二十ペセタのから六十ペセタ。ぽんぽんのうちあいが止んでから五ヶ月目で、パンの、オリーヴの、肉の不足に悩みつつも、一方こんな胃の袋に関係ないものが安物ながら現れる程度に、スペインの平和は恢復して来たのである。」[5]

野上は「正岡子規系の精緻な観察と堅実な構成から成る写生文に出発した小説の方法を土台としている」[6]と言われる。むろん、その方法が旅行記に生かされていることは言うまでもない。野上の旅行記つまり「スペイン日記」には、当時のスペインが生き生きと描かれている。しかし野上が描いたのは、スペインの宮廷世界でもなければ上流社会でもない。民衆の日常生活そのものであった。野上は旅先では何よりもまず市場を見たという。市場には人間の生活の原点があり、そこからその国の人間模様がよく見えるからであった。

「どこの土地に行っても、私は市場を見て廻った。町の誇りの大寺院や、美術館や、大学や、議事堂を見物する以上に旅人には大事なことだ。人間は考えたり、着たり、飾ったりするまえに、まず第一に食べなければならない。どんなものを、どんな代価で食べているか、豊富か乏しいかは、表口からはわからない生活をはっきり覗かせてくれる。そうしてまたどこの国もたいてい同じようなものを食べて生きるのを知るのは、人類的な親愛を湧きたたせる酵母にもなる。」[7]

では、野上の眼は当時のスペインとスペイン人をどのようにとらえたのであろうか。その一部をあげてみよう。

スペイン時間について

「スペインは朝食は先ず十時、午食二時、夜は十時頃の食事で、人の訪問は十二時から一時二時との事である。」[8]

「さすがはカトリック教の根強いスペインで、不幸があると、身につける一切のものを洗濯屋が一と晩で黒に染め直してくれる。ほかの注文は期日がでたらめなくせにこれだけは間違いなしだという。」[9]

宗教について

「カトリック教の根強いスペイン」[10]

「貴族と並んで僧侶の勢力の根強いスペイン」[11]

「僧侶が貴族や金持ちと組んで民衆の敵となる」[12]

闘牛について

「この土地では総理大臣よりは闘牛士になるのを名誉とする」[13]

自然について

「日本などの耕地に較べると、もの悲しいほど荒涼とした眺めである。」[14]

「スペインでもっとも美しいナヴァ・セラダの森林地帯をドライヴする愉しみが与えられたわけである。土の色さえ灰色に変じている砂漠のような高原地帯や、わけても、越して来たばかりのシエラ・デ・ガダラマの黒い石塊の山を思うと、これが同じスペインかと嘘のような感じがした。どこの国でもそうであるが、地質的なこうした多様性は、スペイン人にも、一般にスペイン人らしいものとして私たちが大ざっぱに考えている以外の性格を、いろいろもたせているに違いない。」[15]

陽気なスペイン人について

「スペイン人らしい陽気な高笑いが聞こえて来そうな気さえする」[16]

美しいスペイン女性について

「女たちがなんと多く、またなんと美しいだろう。私の正直な付記が許してもらえるなら白状しよう。三日後にパリに帰った時、夜のシャン・ゼリゼの女たちがまるでオタフクのように見えたことを。」[17]

そして、野上にとってもまた、スペインとはドン・キホーテとサンチョ・パンサ、そしてカルメンとドン・フアンの国であった。

「そこへ必ず現れなければならない二人の人物が思い描かれた。騎士姿で馬上に長槍を横えたドン・キホーテと、驢馬に乗ったサンチョ・パンサである。そう云えば、スペイン人の顔をはっきり分類する二つの型、グレコの描く顎の長い楔形と、ゴヤの描く頬のふくやかな円顔をこの二人に当てはめれば、ドン・キホーテはグレコ型、サンチョ・パンサはゴヤ型である。」[18]

「カルメン！ああスペインだ。私はその瞬間強くそれを感じながら、人波を分けて近づいて来る、口紅のまっ赤な、ゴヤ型の豊麗な若い女を眺めた。」[19]

「河ぞいの小公園にはこうしたドン・ホワンがカーキー服でぞろぞろしていた。」[20]

野上はこうして、スペインを夫と訪れ、北半分を車で駆けめぐり、内戦直後のスペインを観察した。野上はスペインの現実直視の中から、スペインとスペイン人の特徴をいくつか浮かびあがらせている。そして、それまでの日本人のスペイン旅行記と同様に、野上もまたヨーロッパで作られたスペイン像の影響を受けて、スペイン女性をカルメン、スペイン男性をドン・フアンと呼んでいるが、スペインの生んだ世界的小説家のミゲル・デ・セルバンテスの名著『ドン・キホーテ』の主人公ドン・キホーテとその従士サンチョ・パンサを、野上はついにスペイン旅行記の中に登場させた。当時、日本で、『ドン・キホーテ』は人口に膾炙し始めていたのであろうか。

3．3．2．須磨弥吉郎（明治２５－昭和４５年）

スペイン公使としてスペインに赴任した須磨がスペインに到着したのは、内戦（１９３６－３９年）終結後間もない１９４１年3月のことであったが、須磨は１５年前の１９２６年にすでにスペインを訪れており、初めてのスペイン旅行をこう回想している。

「・・・一九二六年秋、世界周遊の旅の途すがら、バルセロナに寄航して、マドリッドとトレードをのぞいたことがあった。この最初のスペインへの旅が、わたくしの藝術愛欲の魂を興

奮させた。第二のスペイン行きの願望はこの時から培われてゐた。

マドリッドのプラドー博物館を最初に訪れた一九二六年晩秋の或午後の印象は、わたくしを完全に虜にした。その世界周遊の旅では、世界の文明の淵叢ともいうべきところを、ひととほり回遊した。印度錫敦崙嶋のアヌラダプーラの佛蹟、カルタゴの遺跡、エルサレムの聖蹟、アンカラの舊都、アテネ、ローマ、フィレンツェ、ミラノ、ヴェニス、チュニス、巴理と世界の歴史と藝術とに因んだところを見た上で一そのうちの数ヶ所はその前にも見てゐたのだが一訪れたスペインが、わたくしに最も深い印象を残した。」[21]

スペイン行きは須磨にとって待望の赴任地であったが、スペイン行きの本当の理由をこう説明している。

「外務省に奉職した三十年近い間で、任地なり、仕事なりに希望を申出たのはたった一度であった。それはスペイン行きであった。

戦乱のヨーロッパで、世界の事情がよく判るのは中立国である。それに最も適しているのがスペインであった。単なる中立国であるばかりでなく、フランコ将軍は、ドイツやイタリアの援助で勢力を張った主権者だから、自然と日本に対し最大級の好意をもっていた。

それに、マドリッドには、どこの国からも、大ものの外交官が蝟集していた。いわば大戦中のヨーロッパの観測台である。阿蘇山のような大観台のような所だ。こう考えて僕は志願した。」[22]

須磨は海路ニューヨークからポルトガルのリスボンに到着し、ここから陸路大使館の車でスペインに入国したのであった。しかし、１９４１年と言えば、スペイン内戦終結からわずか２年後のことであり、まだ戦火のなまなましい跡が見られた。

２月末に着任した須磨は３月１日（土）の１２時、当時の外務大臣セラノ・スニュエルに就任の挨拶の初会見をした。会見までの時間を利用して須磨は、市内をしばらく一巡して戦後間もない首都の痛々しい姿を見ながら１５年前のマドリードを想起していた。

「外相との初会見には未だ時間があったので、私はマドリッドの市中をぶらりと散歩したついでに、十五年前訪ねた郊外の大学街へ行ってみると爆撃のため見る影もない廃墟になっていた。」[23]

「わたくしのマドリッドについたのは、三年半も續いた血なまぐさい内亂の創痍がマザマザと残つてゐる頃であつた。一九二六年最初のマドリッド訪問の頃は、緑蔭に紅い瓦を美しくならべてゐた郊外の大學町も一物も残さない曠野に変つてゐた。銀座通りにあたる、グラン・ヴィアでさえ、そこ此處の建物に弾痕が數多く見られた。街の男女の服装は實に惨めな姿であった。」[24]

スペインの銀座通りとして知られるグラン・ビア通りにさしかかったところで画廊カサ・ヴィルチュスを見つけた須磨は、持ち前の絵画癖から画廊に飛び込み、何十点という絢爛な絵の中から、とくに惚れた絵画を２点を買い求めた。金額を聞けば相当なもので画廊で一番高いものであった。須磨はこの２点を持って大臣との会見に望んだ。

会見で大臣から趣味を聞かれた須磨は、「色々道楽があるけれども美術が一番です。もうここに来る前に二点求めてまいりました。僕は全然知りませんが、ソラナという人のものです。」[25]と答えると、大臣はこう言ったという。

「　これは驚きました。ソラナは前スペインの美術批評家が最も注目している人で、イワヘニオ・ドールスという第一流の批評家は世界第一の作家だと云いますが、人によってはなっていないというわけで、まさに問題の大家です。それを第一印象で摘み上げるとは大変な目利きですね。」[26]

記者会見のために待機していたカメラマンと記者たちが、このビッグ・ニュースを見逃すはずはなかった。翌日の新聞は、「美術通の代表者着任す」という見出しで、須磨と画家ソラナと２点の絵の大きな写真入りで、一斉に長い記事を掲げたという。これがその後の須磨の外交官としての仕事に大いに役立ったことは言うまでもない。[27]

須磨は１８９２（明治３５）年に秋田県に生まれている。１９１１年に秋田中学を卒業すると、当時、英語・英文学の権威が集っていた広島高等師範（中退）と、東京帝国大学文科大学英文科選科に学び、英語劇の創作や上演に熱中していたという。この間、高等試験行政科試験と外交科試験の受験準備のために中央大学法学部にも学び、１９１９年には東京帝国大学を中退して中退後に外務省に入省。中央大学の方もこの年に卒業している。１９２１年、外交官補として最初の任地であるイギリス赴任を皮切に、ドイツ、中国、アメリカそしてスペインに赴任するが、行動派の須磨は赴任先ではとにかくよく歩きよく見てよく学んだことは自著の中で述べている通りである。著書は３０冊を越えるが、なかでも『米国及び米国人』（講談社，１９４１年）と『中国見聞記』（産経新聞社，１９５６年）と『スペイン芸術精神史』（みすず書房，１９４９年）は、それぞれ中国、アメリカそしてスペイン滞在の研究成果であろう。そして外交官としてとくに在勤が１１年の長きに及んだ中国と５ヵ年に及んだスペインは、須磨の人生において大変重要な意味をもった。須磨は、芸術精神史の観点から、中国とスペインは大変よく似た国であり、世界的普遍性の芸術の国であり、世界的水準の芸術の国である判断したからであった。

文人外交官は少なくない。スペイン語圏で活躍した文人外交官には、古くは堀口九萬一[28]がいるし、元スペイン大使林屋永吉[29]そして元コロンビア大使の色摩力夫[30]は現在も活躍中である。一方、文人外交官須磨には絵画の趣味があった。

「もう一つの趣味であった絵画も秋田中学時代からのものである。絵筆と画帖はどの任地でも手放すことはなく、７０歳までに一万点にものぼる水彩画や水墨画を描き、戦後には数回の個展を開くほどであった。須磨にとっては単に趣味というよりも生活の一部であったかにみえる。」[31]

先に触れたスペインでの絵の買い物とて決してまぐれではなかったであろう。須磨の画家としての眼にかなったからである。須磨の画家の眼は中国という芸術の都で幾重にも磨かれたことは想像に難くない。中国文明の本質を捉えた須磨の豊かな眼は、こんどはスペインというこれまた芸術の都でおおいに冴えた。そして須磨は両国の芸術精神史のなかに重要な共通点を多数見つけたのである。

「わたくしは、十有一年も中国の南北を馳驅した。濛々たる砂塵の北、落葉の荘厳な北京、漫々たる黄河と長江の水、姻る柳の江南、木綿の眞紅の花綻びる南支、詩と絵の大自然に囲まれつつ中国二十有幾朝の興亡の跡を稽へた頃を追憶せば、わたくしは、心ならずも思慕の涙をさえ覚える。中國には、漢の高祖、唐の太宗、元の世祖、明の大祖、清の聖祖の偉業があった。

わたくしのスペイン滞留は五年に過ぎなかつたにしろ、世界一大變轉の時期、祖國大轉落の危機に居たものだから、心情自づから一日また千秋であった。五年も半生の感すらあった。北に南に、モロッコまで足を伸ばして上来陳べたやうに、闘牛の血に、乙女の唄と舞に四時雪を戴くシエラ・ネヴァダに、望郷よりも黄土文明のを慕ふ切なる想ひを絞つた。

スペインにも、アルフォンソ十世賢帝、ペラヨ、アブダルラーマン一世、カロロ五世、フェリップ二世の帝業があった。

中国には、幽玄、雄渾、奔放と多彩な詩歌文章もあれば、気韻生動の繪畫もあれば、透明華麗な陶磁もあつた。

スペインにも、神秘悠遠、曲折、清空な詩歌もあれば、寫實三昧の繪畫もあれば、精緻艶麗な陶磁もあつた。

わたくしは、中國とスペインの両國に滞留したせいか、両国の併行性が、數え切れない程去来する。」[32]

須磨は公使としてスペインに、１９４１年３月から１９４６年１月までの約５年を過ごした。この間、「よくスペインの東西、南北を観て廻った。風物はもとより、その土地の人間に接し、文化をのぞき、芸術品を子細に観て廻った。」[33] また、書を通してこの国の歴史を遡り、偉人の残した作品を鑑賞し、文人と交流もした。そんな中で、須磨はスペインとスペイン人についてこんな印象を抱いている。

○スペインはロマンチックな国である。

○スペイン程州の別に依つて違つた雰囲気の生ずる國はない。

○スペインは瑞西に次いで山嶽の重なつた國である。

○地方色がスペイン程明截な国も少いであろう。

○スペインはヴァラエティーの国である。

○広い意味でスペイン人は総て今日に生きている。刹那に生きている。

○呑気といえば呑気、楽天といえば楽天である。

○ 彫刻でも各州に依って格段の相違がある。ここにもスペインの多様性が窺われる。

○ スペインは絵の国であり、また彫像の国である。・・・

しかし、須磨はもっと本質に目を向けた。スペインの歴史を遡り、この国がフェニキア、ギリシア、ローマ、西ゴート、イスラム教徒、ユダヤ人などさまざまな異文化要素を採り入れながら独自の精神文化を形成してきたことに注目し、とりわけ７１１年から１４９２年までスペインを支配したイスラム教徒のもたらした東洋性すなわちオリエンタリズムこそが混淆のスペイン精神文化を独自なものにしていると考えたのである。

「そのスペインの東洋性がひとり藝術の上丈ではない。スペインの生活の各部門に亙つて東洋性が羽蔽いている。」[34]

例えば建築におけるオリエンタリズムについて、須磨はこう述べている。

「・・・八世紀にマウル族が侵入して以来は、スペイン・サラセン式ともいふべき特殊な様式を確立したのみか、それがやがて、夫れぞれの時代のヨーロッパ建築と混和し、自然と、現代に至るまで各時代の様式に一層特有なエキゾティックで、わけても東洋的であるスペイン趣味が浸潤拭うべからざる域に達するのであった。その様式がコルドバのメスキータ、猶太人の

建てたシナゴグ、セヴィリアのアルカサル、グラナダのアルハムブラ宮殿のやうな純正アラブ式のものの外に、ムデハール様式として、モリスコの手に依つて基督教式と回教式とが混入したものを生んだ。

それがロマネスク時代即ち十一・十二世紀でもスペインの様式はマウル族の趣味を混入して著しく東洋的なそしてグロテスクな風韻を添えた。それはトロの本寺院などに出たものであった。それがゴシック時代（十二世紀末から十五世紀）でも、スペイン特有な東洋趣味が顕著に混入し、特にファサードには、驚く程繁褥な装飾が施され、例えばヴァイアッドリのサン・ジョルジオ寺院に見るような鍍金細工すら加へられるのであった。

ルネサンス時代（十六世紀から十九世紀）でも、プラテレスコ式とか、グロテスク式とか、バロッコ式とか、ロココ式とかと、發展はしたが、その全段階を通じて、例のスペイン獨特の東洋的な味が、何時でも加へられて現代に及ぶのであった。」[35]

そしてスペインの独特の建築はガウディの登場によってついに頂点に達するのである。しかし、ガウディ建築に東洋性を見る人はどれだけいるであろうか。

「このガウデの建築に對する基本的な考え方は、實は東洋的である。中國古来の天人合一の藝術道徳觀とも一致する。・・・ガウデは、その畏敬してゐた著名な建築家、ホアン・マルトレイエやホセ・マリア・ボカベイアなどの示唆にも基いて、當時既に現業からは退いていたヴィイアルの下で、一八八二年始めたのがバルセロナのサグラダ・ファミリア教會堂である。そしてそれが全スペインのみならず、世界建築界の驚異となった。それは完成はし得なかつたが、幾世紀かの變遷を経てスペイン建築がやつと到達したスペイン本来の面目たるモニュメントであつた。その外觀はメスキータの風をも尻目にかけ、ゴシック様式の天を衝くような気宇だけは取り入れられてゐるが、總體として阿房宮の上に尖塔を戴せたやうにすら見える。バルセロナに建てられたサンタ・テレサ寺院や、カサ・ミラやカサ・バトイヨなどは、グロテスクな様相を具えてゐることは明らかであるが、一見、印度の寺院をも想はせる。又その細目は如何にも東洋的な風韻に充満している。」[36]

オリエンタリズムすなわちアラブの遺産、アラブの精神は元来南スペイン・アンダルシアに起こり栄えたものであり、その後スペイン全土に広がった。須磨は「アウル族の遺産はスペイン全土でいまも呼吸してゐる」[37] と表現し、アンダルシア精神はスペイン精神であるという大胆な結論に辿り着く。

アンダルシア精神＝スペイン精神の図式は、スペインに旅した日本人のスペイン像によく見られる。彼らは南スペイン、アンダルシアにこそスペイン的なものを見つけたのである。しかし、それはヨーロッパ・ロマン主義のスペイン再発見が作りだしたスペイン像であった。太陽とフラメンコと闘牛とイスラム遺跡の南スペインは、ヨーロッパの旅行者の憧れの地であった。日本人はヨーロッパのスペイン像の影響を受けて、南スペインに急いだのだった。

須磨のアンダルシア讃歌はそうした日本人のスペイン像とは一線を画している。須磨は素晴らしいアンダルシアの世界に憧れた人ではない。アンダルシアの奥底に流れる東洋の精神を発見し、それがスペインの芸術精神史の特色となっていることをスペイン各地で確認したのであった。オリエンタリズムは須磨独自のスペイン像なのである。

３．３．３．その他

その後、１９５０年代まで、志賀直哉（作家）、堂本印象（画家）、式場隆三郎（精神病理学者）、門田勲（随筆家）、火野葦平（作家）らがスペインを訪れている。しかし、旅行記はほとんどマドリードかトレドに関するもので、スペイン的なスペインとしてその名も高い南部アンダルシアの旅行記は皆無に等しい。しかも、旅行記はあくまで旅行記であって、スペインとは何かといったような深い問はない。

では、彼らのスペインの印象とは何であったのか。

１９５３年にマドリードにいた火野は、「スペイン人は深夜の民族」[38]といい、志賀も１９５２年に「此処は特によいっ張りで晩めしは十一時から十二時位。明け方の三時四時まで遊んでいる。それ故町は四時を過ぎても賑やかで、その騒ぎで眼がさめる。」[39]と述べている。

堂本は１９５２年にマドリードで、「昼間の二三時間はすべての活動を休止し安息する」[39]とシエスタ（昼寝）に触れている。堂本はまた、フラメンコを「スペインは激情の国と云われるほどあって酒場ではあのカスタネットで多くの若い男女が獣のように踊り狂う」[40]と表現している。また、スペイン料理の中でもポピュラーな料理パエリャを「パエチェ」[41]と呼んでいる。

堂本は「スペインは闘牛の国」[42]だといっている。スペインを訪れる日本人はことごとく闘牛を見物するが、闘牛理解とはほど遠く、火野は「これはゲームでもスポーツでもなくてショウである。闘牛ではなく屠殺だ。」[43]と書き、村松は「残忍極まりない闘牛こんなものを面白がる人間の心理が私には分からない。」[44]とまで闘牛を見下している。

このころになると空路スペインに入国する日本人もいた。かつてフランから列車でスペインに入国した日本人が、窓外に広がる両国の景色を比較していたが、今は機上から眼下に広がる両国の風景を比較している。

式場隆三郎は１９５２年、イキリスからスペインに、また村松は１９５５年フランスから空路スペインに入国した。これらは日本人が始めて上空から見たスペインの光景であろうか。

「九時にスタート。天気がよく視界がきいて美しかった。イギリスの海岸線が白い絶壁で、きれいだ。まもなく英仏海峡がすぎて、フランスの上空へ出た。景色が平凡になった。朝食が出て、すっかりたべたら、ねむくなってきた。アナウンスの声に眼がさめたら、もうスペインの上だ。木の一本もない禿山の上をとんでいる。まるで地図の色刷をみているようだ。」[45]

「フランスはどこまで何処までいっても緑の沃野である。二時間くらいで山岳地帯に入る。見渡す限り赤土のはげ山、その中に道路が白く光っている。山ばかりで人家は見えず風景はにわかに一変する。隣りの紳士に、ここはフランスかスペインかと問えば、スペインなりと答える。ピレネー山脈である。途中で一度エアポケットへ入る。五時茶が出る。はてしなき山岳で、やがて山間の小都が見える。六時十五分マトリードへつく。四辺の光景索漠として、何となくヨーロッパにいるような気がしない。富めるフランスと貧しいスペインとを土の色に感じる。」[46]

１９５０年代にスペインを訪れた日本人のスペイン観は、スペイン理解には程遠い印象は拭えない。日本人はスペインを貧しい国、つまり後進国としてしか見ておらず、闘牛とフラメンコで代表されるスペイン文化は「野蛮」としてしか評価していなかったようである。その意味で、１９４０年代のスペインを研究した須磨のスペイン論はスペインの独自性を見事に捉え、

これまでの数多く日本人のスペイン論の中でも異彩を放っている。

スペインが日本人によって積極的に評価されるのは、１９６０年代から１９７０年代の到来を待たなければならない。フラメンコなどを学ぶ日本人のスペイン留学がはじまるのも、この頃からであると言われる。

註

1. 野上弥生子 「スペイン日記」志賀直哉ほか監修『世界紀行文学全集 第四巻 イギリス・スペイン・ポルトガル』修道社 1954年 p.279.
2. 同上, p.279.
3. 同上, p.277.
4. 同上, p.302.
5. 同上, p.294.
6. 瀬沼茂樹「解説」(野上弥生子『秀吉と利休・一隅の記』＜新潮現代文学 4＞新潮社 1982年 p. 6.
7. 前掲書, pp.295-296.
8. 同上, p.278.
9. 同上, p.279.
10. 同上, p.279.
11. 同上, p.278.
12. 同上, p.300.
13. 同上, p.287.
14. 同上, p.289.
15. 同上, p.303.
16. 同上, p.290.
17. 同上, p.298.
18. 同上, p.290.
19. 同上, p.287.
20. 同上, p.291.
21. 須磨弥吉郎『スペイン芸術精神史』みすず書房 1949年 p.3.
22. 須磨弥吉郎『外交秘録』商工財務研究会 1956年 p.215.
23. 須磨弥吉郎『須磨弥吉郎外交秘録』創元社 1988年 p.247.
24. 『スペイン芸術精神史』p.15.
25. 『外交秘録』p.224.
26. 同上, p.224.
27. 同上, p.225.
28. 堀口九萬一：大正２～６年に、臨時代理公使としてスペインに在勤。著書に『ジプシーの明暗』(萬里閣書房)、『南米及び西班牙』(平凡社) がある。
29. 著訳書に『スペイン黄金時代』(共著)、『コロンブス航海誌』などがある。

30. 著書に『オルテガ』、『オリバーレスとリシュール』、『フランコースペイン現代史の迷路』などがある。
31. 波多野澄雄「情報外交 須磨弥吉郎」『外交フォーラム』1988年10月号 p.56.
32. 『スペイン芸術精神史』pp.321-322.
33. 同上, p.6.
34. 同上, p.14.
35. 同上, p.228.
36. 同上, pp.230-231.
37. 同上, p.308.-
38. 火野葦平 「スペイン印象記」志賀直哉ほか監修 前掲書 p.333.
39. 志賀直哉 「マドリッドにて」前掲書 p.314.
40. 堂本印象 「マドリッド」前掲書 p.317.
41. 同上.
42. 同上.
43. 同上.
44. 同上, p.332.
45. 村松梢風「スペイン」志賀直哉ほか監修 前掲書 p.337.
47. 式場隆三郎「マドリッドの夜」志賀直哉ほか監修 前掲書 p.324.
48. 同上, p.334.

Condiciones gramaticales de la coordinación copulativa de los pronombres, artículos y adjetivos determinativos

Ichiro Miki

1. Restricciones de las condiciones gramaticales.

Una vez establecidas y admitidas las condiciones de la coordinación copulativa [1] distamos aún de haber descrito las restricciones gramaticales de la coordinación copulativa con exhaustivida, puesto que no todas las unidades lingüísiticas que cumplen los requisitos de equifuncionalidad, identidad de nivel jerárquico y contigüidad obligatoria son coordinables. Georges Mounin Yerra, sin duda, cuando afirma [2] : "La expansión por coordinación puede afectar a cualquier categoría o función sintáctica en la lengua." Hay un grupo de palabras que se sustraen por completo a la coordinación copulativa, es decir, que no pueden intervenir nunca como miembro en una coordinación copulativa. Este fenómeno no se limita a una sola función sintáctica sino que abarca varias:

(1) * [DET & DET]
(1a) * [mi y tu] hijo
(1b) * [el y la] niños

(2) * [CD & CD]
(2a) * [Lo y la] vamos a acompañar. / * Vamos a acompañar[lo y lo].
(2b) * [Te y me] están mirando. / * Están mirándo [te y me].
(3) * [CI & CI]
(3a) * [Os & le] voy a contar un chiste.
(3b) * [Te y me] llamarán la atención.

(4) * [TERM $_1$ & TERM $_1$]
(4a) * Este regalo es para [mí y ti] [3]
(4b) * Van a conceder a [Juan y ti] lo que habéis solicitado.

Algunos autores alude a este hecho, pero la descripción y la explicación que ofrecen dejan bastante que desear. Lo cierto es que las palabras reacias a la coordinación copulativa pertenece a un grupo categorial más o menos cerrado aunque no hay una rúbrica general que las englobe todas. En general puede decirse que se trata de los pronombres, articulos y adjetivos determinativos. Sin embargo no se excluyen todos de la coordinación copulativa, ya que hay pronombres y adjetivos determinativos que sí pueden ser coordinados sin reparos ni dificultad:

(5) [El y yo] somos buenos amigos.
(6) el hijo [mío y tuyo] (admitido por Rojo, G,; 1975, p.194)
(7) en [primera y segunda] persona

El problema que se plantean es, pues, encontrar un criterio unitario y eficiente que en el cuadro morfológico dado permita discernir las palabras que admiten la coordinación copulativa de las que rechazan.

Entre los escasos lingüistas españoles que dedican un trabajo a un aspecto parcial de la coordinación copulativa he localizado tres alusiones e intentos de explicación en torno al problema que nos ocupa aquí.

2. Tres criterios

2.1. Carmen Bobes Naves, refiriéndose a los casos que se dan en el interior del SN afirma [4] : "Quedan excluidos en el uso una serie de esquemas posibles teóricamente. Así el Artículo no puede nunca ser elemento de una coordinación, a no ser incluido en la red de dependencia de un Nombre. En sí mismo, como categoría morfológica, no interviene en la coordinación y, sin embargo, teóricamente la suma de artículos podría utilizar para expresasr la suma de géneros, cuando la base nominal se repite [...]" La explicación es en opinión de Carmen Bobes Naves la siguiente [5] : "Algunos Determinativos (Artículos, Numerales, Demostrativos, precisamente los que no admiten la posición postnominal) no pueden ser nunca sumados, ya que su función con-

siste en limitar la extensión del Nombre y no añaden información cualitativa: tres mesas, esta casa, la silla, [...] Por esta razón, el castellano admite la coordinación en los Adjetivos calificativos, pero rechaza la de éstos con Determinantes [6] ."

2.2. Gillermo Rojo, quien consagra solamente una breve nota al asunto, escribe [7] : "Está claro que hay restricciones en cuanto a las posibilidades de coordinación en las que, por su carácter concreto no es necesario entrar aquí. Así, por ejemplo, parece que no se pueden coordinar artículos aunque estén situados al mismo nivel de estructura jerárquica; * el y la niños están jugando (= el niño y la niña están jugando). Tampoco se pueden courdinar posesivos cuando van antepuestos al sustantivo, pero sí cuando van pospuestos: * mi y tu libros; los libros tuyo y mío."

2.3. La tercera y última alusión al problema en cuestión es la de Ofelia Kovacci [8] : "Los constituyentes de una coordinación pueden ser clases de llenado de funciones lexotácticas - palabras o construcciones - , excepto en aquellas manifestaciones que forman por sí mismas grupo acentual (artículos, concetores de coordinación, subordinantes, los pronombres llamados átonos y los relativos). " A pie de página la autora agrega: "En un caso como Te veré donde y cuando quieras los dos relativos o el primero solamente lleva acento fuerte."

3. Crítica de estas posturas

En cuanto a la descripción de las palabras incapaces de intervenir en una coordinación copulativa Carmen Bobes Naves no pasa de los determinates [9] , Rojo no va mucho más lejos y Ofelia Kovacci, aunque se aproxima más a la exhaustividad, no es muy precisa.

Por lo que atañe a las diversas hipótesis explicativas está claro que, al considerar ejemplos como (1a) y (1b), podría caerse en la tentación de tomar la posición como criterio. De hecho, tanto Bobes como Rojo destacan que las partículas que sólo admiten la posición prenominal son incoordinables. No obstante, el criterio distribucional está

lejos de ser pertinente y exhaustivo. En los ejemplo (2a), (3a) y (4a) es imposible hablar de postnominal o prenominal, ya que se mueven fuera del SN, es obvio que en caso de dos complementos directos, por ejemplo, no es lícita la coordinación copulativa, cualquiera que sea la posición de los pronombres:

(8) * La y lo estamos ayudando.
(8a) * Estamos ayudándola y lo.

Tampoco vale el argumento aducido por Carmen Bobes de que sólo pueden coordinarse las partículas que añaden información cualitativa. Así excluye, por ejemplo, la coordinación copulativa de dos numerales cardinales sospechas por cuanto es perfectamente aceptable la consturcción "cuarenta y tres mesas". Por lo demás, el criterio de la información cualitativa, que es de índole semántica, parece difícilmente aplicable a los casos (2a), (3a), (4a). Por otro lado, téngase en cuenta que es aceptable "el hijo mío y tuyo" sin que se añade información cualitativa.

Queda finalmente el rasgo prosódico del acento, argumento esgrimado por Ofelia Kovacci. Hay efectivamente ejemplos, como el de " el hijo mío y tuyo". Sin embargo, se desvirtúa enseguida, pues en (4a) y 4b) los elementos incoordinables son acentuados. Además el acento depende en amplia medida de cómo el hablante focaliza la oración. En la pregunta:

(9) ¿Seguro que es tu toalla?

el pronombre podría muy bien ser tónico pero no por eso pasaría a ser coordinable, ni mucho menos. Sería, por cierto, más bien curioso que el acento fuera un criterio decisivo en un proceso de tipo sintáctico.

Debería haber quedado claro que los tres intentos de explicación dejan los pronombres más o menos donde estaban, pues hay una serie de dudas que no resuelven. Para subsanar estas deficiencias es menester buscar una solución viable que abarque la totalidad de los casos enumerados. En primer término creo que el criterio no debe ser ni semántico ni

distribucional ni acentual, sino, por coherencia metodológica, de tipo funcional. Por eso propongo el siguiente criterio:

De los pronombre, artículos y adjetivos determinativos pueden participar en una coordinación copulativa solamente las formas susceptibles de ejercer autónomamente la función sintáctica "SUJETO" (con o sin artículo) en un contexto determinado.

Tomemos como botón de muestra los pronombres personales. Existen los cinco paradigmas siguientes:

Tónicos

1)		2)			3)	
	yo		prep.	mí		consigo
	tú		prep.	ti		contigo
	él/ella, -o/usted		prep.	él/ella, -o/usted		(consigo)
	nosotros, -as		prep.	nosotros, -as		
	vosotros, -as		prep.	vosotros, -as		
	ellos, -as/ustedes		prep.	ellos, -as/ustedes		

Atonos

4) CD:	5) CI:
me	me
te	te
lo/la/le [10]	le
nos	nos
os	os
los/las/les	les

De todas estas formas son coordinables las de nominativo, que tal vez se llamen mejor propias de sujeto:

(10) [Juan y yo] hacemos buenas amigas.
(11) Entre [él y yo] hemos conseguido mover la pierda.

y las últimas cuarto formas del paradigma 2), que coinciden con las del paradigma 1). Por eso es posible decir:

(12) Este regalo es para [nosotros y vosotros].

pero no:

(13) * Este regalo es para [nosotros y ti].

Como por lo visto, del paradigma 2) sólo la primera y la segunda persona del singular bloquea la coordinación copulativa en estos casos, hay una tendencia entre los hablantes a utilizar tras ciertas preposiciones las formas propias de sujeto "yo" y "tú" en lugar de "mí" y "ti", que son reliquias del sistema de los casos latinos. He aquí un ejemplo:

(14) Mi primo y su novia jugaron unas veces contra mi padre y yo y otras contra mi madre y mi hermana. [11]

Las formas no nominativas no pueden ser nunca sujeto, cualquiera que sea el contexto. Además se evidencia que los argumentos de posición y acento son inoperantes.
En cuanto al artículo queda claro que siempre, ya sea determinado o indeterminado, se sustrae a la coordinación copulativa. De ahí que lo excluya de las consideraciones que siguen.

3. Analisis del corpus

Los datos del corpus parecen confirmar lo acertado y rentable de esta nueva visión, que trataré de legistimar a continuación tomando como base el cuadro de pronombre publicado en la Gramática Española de Alcina/Blecua [12] :

- Indiciales de campo
  - Personales — yo, mi, me, conmigo; tú, ti, te, contigo, etc.
  - Posesivos — mío, tuyo, suyo, nuestro, vuestro, etc.
  - Demostrativos — éste, ése, aquél, etc. y otro.
  - Locativos
    - especiales — aquí, ahí, allí, acá, allá, etc.
    - temporales — ahora, entonces; hoy, ayer, anteayer, mañana

- Determinativos
  - Cuantitativos
    - gradativos — mucho, muy, poco, basante, demasiado, harto, todo
    - existenciales — alguien/nadie; alguno/ninguno; algo/nada
    - intensivos — más, menos, tanto, tan
  - Numerales
    - cardinales — uno, dos, diez, ciento, mil, etc.
    - ordinales — primero, segundo, décimo, vigésimo, etc.
    - múltiplos — doble, triple, etc.
    - partitivo — medio, tercio, etc.
    - distributivos — sendos y cada
  - Identificativos — mismo, tal, así, sí, también/no, tampoco

Relativos

Enunciativos	que, cual, quien, cuyo, cuanto, cuando como, donde, do
Interrogativos	qué, cuál, quién, cúyo, cuánto, cuándo cómo, dónde, dó
Exclamativos	qué, cuál, cuánto, cuán, cómo

Me doy perfecta cuenta de que este cuadro es algo discutible, ya que contiene palabras dificimente clasificables como pronombres, es decir, como proformas del nombre. Por ejemplo, los gradativos y los numnerales son más bien adjetivos determinativos y no pronombres. No obstante tras haber llamado la atención sobre los defectos, me voy a basar igualmente en este cuadro, toda vez que las palabras enumeradas, incluso las de dudosa clasificación, cumplen fielmente el crterio que terio que propongo.

Personales: Según lo dicho pueden coordinarse nada más las formas de nominativo o propias de sujeto: yo, tú, él, etc.

(15) Si decide quedarse, [mi madre y yo] nos marchamos ahora mismo.
(García Pavón, *Las hermanas Coloradas,* p. 247)

Posesivo: Son coordinable las formas del paradigma tónico: mío, tuyo, etc. ya que son susceptibles de asumir la función SUJ, por ejemplo, en El mío es éste:

(16) El hijo [mío y tuyo] ...

Demostrativos: Todas las formas aceptan la coordinación copulativa aun cuando pierden el acento para convertirse en adjetivos determinativos, ya que son capaces de desempeñar la función SUJ:

(17) [Ese y aquél] cometieron robo.
(18) Le llamé la atención [una y otra] vez.
(19) [Estos y aquellos] niños ...

Espaciales: Todos pueden ser sujeto y permiten, por lo tanto, ser coordinados:

(20) ... significa - [aquí y en todas partes] - ayuda del Estado. (*El país*, 3.9. 1991, p. 14)

Temporales: Lo dicho de los espaciales tiene también vigencia para los temporales:

(21) [Ayer y anteayer] hizo un sol radiante.

Gradativos: muy y harto rechazan la coordinación copulativa pues nunca pueden ser sujeto:

(22) La carne que nos quisieron fue [poca y mala].
(23) ... cada día con menores reservas y [mayor y más viciosa] función. (Cela, *Viaje a la Alcarria*, , p. 10)

Existenciales: Se excluyen de la coordinación copulativa las formas apocopadas algún y ningún puesto que como tales no pueden hacer papel de sujeto:

(24) [Pedro y alguien que no conocemos] han ido juntos al cine.
(25) Vinieron [él, ella y nadie más].

Intensivos: Tan (que no es pronombre) no puede ser nunca sujeto, por lo que no admite la coordinación copulativa:

(26) Don Lotario se reía [tanto y con tales aspavientos], que algunos transeúntes lo miraban con gusto. (García Pavón, *Las Hermanas Coloradas*, , p. 196)
(27) Cada día pedían [más y más] dinero.
(28) La Alcarria, ¿sabe Usted?, quiere su agua, [ni más ni menos]. (Cela, *Viaje a la Alcarria*,, p. 49)
(29) Y hasta me atrevo a avanzar que obras como esa mía pueden contribuir a hacerlo [más y mejor] conocido. (Unamuno, *Niebla*, p. 23)

Cardinales: Todos los cardinales son coordinables aunque en la ortografía normativa conforme a un riguroso sistema:

(a) Formas lexicalizadas: dieciséis , diecisiete , ... veintiuno, etc.
(b) Coordinación copulativa de décimas y unidades desde treinta y uno hasta noventa y nueve.
(c) A partir de ciento uno se suprime el coordinador entre millones, millares, centenas, décimas y unidades cuando la unión de dos cifras o números equivale a la suma matemática: mil quince (= 1000 + 15), pero quince mil (≠ 15 + 1000).

Ordinales: Son coordinables:

(30) Acabamos de leer el [cuarto y último] capítulo del libro.
(31) Este verbo se emplea solamente en [primer y tercera] persona.

Múltiples: Son coordinables:

(32) Se ofrece el sistema electrónico en configuración [doble y triple].

Partitivos: Son coordinables:

(33) Han sobrado botellas [medias y enteras].
(34) Las bolsas de [tercio y cuarto] kilo están mal etiquetadas.

Incluso sería posible:

(35) Las bolsas de [medio y cuarto] de kilo están mal etiquetadas.

aunque con ciertas reservas dado el diferente régimen: medio kilo (medio = adjetivo) / cuarto de kilo (cuarto es sustantivo).

Distributivos: Tantos sendos como cada son incoordinables. Nunca pueden ser sujeto.

Identificativos: Son coordinables mismo y tal.

(36) ... una [única y misma] autonomía para todos.
(*El País*, 3-IX-1981, p. 14)

(37) El corazón, el estómago y la cabeza son los tres una [sola y misma] cosa. (Unamuno, *Niebla*, p. 159)

La coordinación con tal conoce coordinaciones ocasionales pero también algunas prácticamente lexicalizadas, que principalmente son éstas: tal y cual, tal y tal, un tal y un cual así como tal y cual cosa [13] :

(38) [Cada cual y en cada día], se echa a la calle. (García Pavón, *Las Hermanas Coloradas*, p. 207)

(39) ... llamó a Liduvina, y al verla ante sí, tan serena, tan rolliza, sonriéndole maliciosamente, fué [tal y tan insólito] el sentimiento que le invadió, que diciéndole: "¡Vete, vete, vete!", se salió a la calle. (Unamuno, *Niebla*, p. 127)

Enunciativos: No pueden coordinarse. No aparecen nunca como sujeto por introducir siempre una proposición en función MOD ; (=subordinación adjetiva) [14].

Interrogativos: Salvo cuyo , que en su calidad de forma genitiva es inconciliable con la función SUJ, todos los interrogatrivos son coordinables:

(40) - Pero si deben tener noventa años.
- ¿Y qué? ... (García Pavón, *Las Hermanas Coloradas*, p. 191)

Exclamatrivos: Son coordinables excepto cuán y qué :

(41) ¡[Cuántos y qué] preciosos erán!
(42) ¡No, hombre, no! Pues ¿no has visto [cuántos y cuán] grandes

filósofos ha habido solteros? (Unamuno, *Niebla*, p. 115)

Notas

1) Miki, I.; 1991
2) Mounin, G.; 1980, p. 47
3) Antiguamente, antes del siglo XVIII, esta construcción era posible. El Esbozo (R.A.E.; 1973, p. 502, 3.17.3.c) cita los ejemplos: "Passe entre tí y mí otra cosa que te quiero dezir."
4) Bobes Naves, C.; 1972, p. 287
5) Ibíd., p. 289
6) En cuanto a la coordinación copulativa de adjetivos, la situación es más compleja.
7) Rojo, G.; 1975, nota 1
8) Kovacci, O,; 1972, p. 1
9) El problema rebasa naturalmente estos límites. Cf. (4)-(5).
10) Este "le" se comprende aquí como sustituto pronominal de a Usted en función de CD. No se tienen en cuenta las formas leístas o laístas.
11) Tomo este ejemplo de Narbona Jiménez, A,; 1983, pp. 469-470. El autor, que ha titulado su artículo "Contra mi padre y yo: otra lanza por Bello", escribe en la p. 469 que tal construcción resulta habitual en la conversación espontánea incluso de los hablantes cultos y no está ausente de la lengua escrita.
12) Alcina Franch, J./Blecua, J.M.; 1975, p. 595
13) Cf. Moliner, M.; 1977, II, pp. 1252-1253, s. "tal"
14) No se confunden con las conjunciones homónimas "donde" y "cuando": "Nos podemos encontrar donde y cuando quieras."

Bibliografías

Alcina Franch, J/Blecua, J.M.; 1975, *Gramática española*, Barcelona, Ariel.

Bobes Naves, M.C.; 1972, "La coordinación en la frase nominal

castellana, I", en *Revista Española de Lingüística*, 2-2, pp. 285-311.

Kovacci, O.; 1972, "Acerca de la coordinación", en: *Boletín de Humanidades* 1, Universidad de Buenos Aires, pp. 1-29.

Miki, I.; 1991, "Las condiciones gramaticlaes de la coordinación copulativa en español", *Academic Bulletin*, Kyoto Univesity of Foreigin Studies, Vol. 36, pp. 395-410.

Moliner, M.; 1977, *Diccionario de Uso del Español*, 1 reimpresión, 2 vols., Madrid, Gredos.

Mounin, G,; 1980, *Diccionario de Lingüística*, Barcelona, Labor.

Real Academia Española; 1973, *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.

Rojo, G.; 1975, "Sobre la coordinación de adjetivos en la frase nominal y cuestiones conexas", en: *Verba* 2, pp. 193- 224.

ペルーの社会運動
— 首都リマの低所得者居住区に見られる人民食堂について —

小林 由記子

はじめに

ラテンアメリカでは社会運動として労働運動，農民運動，学生運動などが存在するが，1970 年代の後半からこうしたものとは異なる新しい動きが誕生している。

本研究ノートでは大串の研究において示された当該地域における社会運動の範疇を基礎とし[1]，その中でも「ポブラドーレスの運動に含まれる生存・生活のための自助組織の運動」について，ペルーにおける事例を挙げ，その特徴及び問題点を整理していく。ここでは，リマの低所得者居住区（プエブロ・ホーベン＜pueblo joven＞またはバリアーダ＜barriada＞と呼ばれる）における共同調理活動の「人民食堂＜comedor popular＞」を取り上げる。

リマ社会には都市中央部の「市民」社会と，バリアーダに代表されるような「大衆層＜sector popular＞」[2]が形成する社会が共存しているという二重性がしばしば指摘される。この大衆層は主として 1950 年から 1970 年代に農村から移住してきた人々によって形成されている[3]。1950 年代の外国資本導入により製造業が発達し都市化が進むと，農村に住んでいた人々は職を求めて都市に出てくるようになった。この大衆層の女性たちによって人民食堂は結成された。同じような自助組織（チリにおける共同鍋＜olla común＞など）はラテンアメリカ各国で見られたが，ペルーの人民食堂にはその特徴や問題点が集約されていると思われる。

ペルーで人民食堂が初めて結成されたのは 1970 年代末であり，最も運動が興隆した時期は 1980 年代末から第一次フジモリ政権期半ばまでである。その後，人民食堂の活動自体は衰退傾向にあるが，人民食堂の活動は食事の提供にとどまらない社会的効果をもたらしたと思われる。特に組織に参加した女性に見る政治意識の高まりなどはペルーの社会運動を捉える上で考慮していくべき点であると考える。

---

[1] 大串和雄 『ラテンアメリカの新しい風 社会運動と左翼思想』 同文館 1995 年 pp.19-44.

[2] 重冨恵子 「ペルー低所得者居住区における共同調理活動」 『ラテンアメリカ・レポート アジア経済研究所 1996 年 p.18.

[3] Blondet, Cecilia y Montero, Carmen, *Hoy: Menú popular*, 1995, pp.100-101.

1. 人民食堂の特徴

人民食堂は食材を大量に購入し集団で調理することにより安価な食事を提供する組織である。1990年における食堂一件あたりの平均参加人数は23人であり，40人以下の食堂が全体の約80%となっている[4]。食事は組織に参加する女性たちが交替で準備をする。この食事当番を引き受けることで食事が無料となり，貧困に直面した大衆層が日々の食費を削減できる仕組みになっている[5]。

人民食堂は自立的に結成された自主管理人民食堂＜comedor popular autogestionario＞と政府によってその結成が促された食堂と大きく二つに分けられる[6]。前者の食堂の誕生にはカトリック教会[7]と開発NGOが関わっている。とりわけ自主管理人民食堂はカトリック教会の影響が大きく，また運動の方向性の選択においては教会が重要な役割を果たしている[8]。後者の食堂には，ベラウンデ政権下の「家族キッチン＜cocinas familiares＞」[9]やガルシア政権下で既存の母親クラブ＜clubes de madres＞が結成した食堂[10]などを挙げることができる。

人民食堂への参加者は大衆層の女性＜mujeres populares＞で，主たる年齢層は25歳から44歳である。初等教育を受けていない者や初等教育中退者など，一般に教育レベルの低いことが特徴であり，安定した収入を得ることのできる仕事に就いている者はごくわずかである。彼女たちの多くは結婚もしくは同棲をしており，独身の参加者は少ない。つまり家庭を持った女性たちが，家族や特に子供に食事を与えるために組織に参加している。家族の長が失業中であったり，行商などで収入が不安定である場合に組織への参加率が高くなっている点も指摘されている[11]。

人民食堂は参加者と利用者から成り立っている。参加者は組織に登録されており，3人から4人のグループを作り交替で食事を準備する。そのため参加者が利用者より食事を安く手に入れることができるが，組織との関係が密

---

[4] *Ibid.*, p.77.
[5] Fernández, Arturo, "Análisis de los resultados de la investigación sobre <Comedores Populares> de Lima", *Movimientos de mujeres y pobreza en América Latina: Reflexiones a partir de un estudio de caso en el Perú*, 1994, p.40.
[6] Blondet y Montero, *op. cit.*, p.89.
[7] Craske, Nikki, *Women and Politics in Latin America*, 1999, pp.125-130.
[8] 大串 前掲書 p.53.
[9] Rosa Barbi, Carmen, *Lima: aspiraciones, reconocimiento y ciudadanía en los noventa*, 1997, p.110.
[10] 重富 前掲書 p.21.
[11] Blondet y Montero, *op. cit.*, pp.100-102.

接で必ず当番制の仕事を行わなければならず，組織の中で役職に就くなど責任を持たされる[12]。一方，誰でも利用者となれるが，参加者と同じく食堂の仕事に一時的に参加することで食事を安価で入手できることになっている。

人民食堂の食事は低価格で提供されるが，いかに更にコストを下げるかが課題となっている。そのため，海外からの食糧援助[13]が必要不可欠となる。外国からの援助はペルー国内で政府や分配担当の慈善団体が受け取り，人民食堂へ分配する。援助が多ければ，当然食事の値段が安くなる。たとえ小規模の人民食堂であっても運営のためには政府や海外との結びつきが重要となる。

人民食堂が成立した背景として，経済危機とフェミニスト運動との関係を挙げることができる。第二次ベラウンデ政権（1980-1985）は対外債務問題を解決するために自由主義的経済政策を行ったが，製品やサービスに対する国内需要が低下し，失業者の増加や景気が後退する結果となった。また，社会サービスに対する投資も減少した[14]。ガルシア政権（1985-1990）は前政権の政策を批判し，国内産業を保護しながら輸入を抑制し経済回復を行うことを計画したが，経済は回復しなかった。1980 年代の経済安定化政策は成果が上がらなかったのである。特に，貧困層そして中間層の生活にも打撃を与え，新しい貧困の図式を作った[15]。つまり，行政によって国民生活の改善が望めなくなり，このような状況下で新しい社会運動としての自助組織が誕生したのである。

また，フェミニスト運動も追い風となった。ペルーでフェミニスト運動が始まったのは 1979 年の軍事政権下であり[16]，中産階級の女性を中心に展開してきた。人民食堂のような下層階級を中心とした女性の運動との連帯を今

---

12 *Ibid.*, p.78.

13 *Ibid.*, pp.37-38. 食糧援助はアメリカ合衆国が第２次大戦のヨーロッパでの食糧難を解決するため，農業の拡大期にヨーロッパにその生産余剰分を提供したことが始まりである。その後ヨーロッパ経済が回復し，1950 年代からアメリカ合衆国の援助先がヨーロッパから発展途上国へと変わった。海外からの援助をペルー国内では政府と慈善団体が分配を担当している。食糧分配を担当している団体には，CARITAS, SEPAS, CARE などがある。

14 社会支出の額については Blondet y Montero, *op. cit.*, p.34, cuadro 1 を参照。ペルーでは社会支出の 98%が教育，福祉部門に充てられているが，国内総生産に占める割合が低いのが特徴である。1979 年にペルーでは一人当りの福祉部門における社会支出の割合は US$9.7（1990 年には US$4.6 へと低下）であったが，同年にチリで US$39，ベネズエラで US$85 となっている（Gonzales de Olarte, Efraín, 1995, pp.56-57）。

15 Blondet y Montero, *op. cit.*, p.32. 貧困の定義については同書 p.35 を参照。貧困の状況については表 1 を参照。

16 大串 前掲書 p.21.

後注目すべき点と考える。

2. 人民食堂と第一次フジモリ政権

人民食堂の活動の活発化は，人民食堂が政治の中に組み込まれる結果をもたらした。貧困が拡大し組織への参加者が急増すると，政府は彼らを支持基盤に取り込むことを考えるようになった。ペルーでは貧困層の割合が高く（表 1），政党にとって食堂への参加者である貧困層の支持を獲得できるかどうかは選挙結果を左右することになる。例えば，1985 年総選挙前にアプラ党によって結成が促された人民食堂への援助は，政党支持拡大が目的であった[17]。政党は彼らの支持を食糧援助という形で得ようとしたのである。人民食堂向けの援助物資はばらまき型の援助とは異なり，母親の手によって確実に調理され児童のために消費されるため，援助効果が高いとされる[18]。特に 1988 年以降，経済危機の中で貧困化が進み，人々が食糧を求めて人民食堂に集まるようになった。食糧に対する需要が急増したため，食堂の数（表 2）とそこで働く女性の数も増加した。貧困に直面した人々にとって，人民食堂は生きる手段として不可欠な存在となったのである。

第一次フジモリ政権期（1990-1994）には，その経済政策の影響で人民食堂の重要性がさらに増すことになった。フジモリ大統領は貧困層の支持を得て当選し貧者救済のための政策を実施すると思われたが，彼の政権下の経済政策は国民の生活を直撃した。財政健全化の名のもとに政府支出を抑えるため社会支出は大衆層の期待ほど増額されず，公共料金や各種価格の引き上げ（表 3）が実施された。さらに国営企業の民営化により大量の公務員が失業し，労働市場の自由化などの影響により 1981 年から 1996 年の間に実質賃金は約 3 分の 1 に低下した[19]。このため，1990 年から 1995 年にかけて特に都市の貧困が悪化したことが指摘されている[20]。その結果，1991 年にはリマで 5 千ヶ所以上の人民食堂が存在した。1992 年におよそ 12 万世帯が人民食堂に参加しているが，これはリマ全体の世帯数の約 9%に相当する。1991 年の調査では，一件の食堂で用意された食事は一日平均約 100 食，リマ全体では 50 万食以上に上った[21]。

フジモリ大統領は 1995 年選挙での再選を狙い，貧困層向けの社会プログ

---

17 重富 前掲書 p.24.
18 同上.
19 日本輸出入銀行海外投資研究所 『海外投資研究所報』 1997 年 p.46.
20 Sheahan, John, *Searching for a Better Society: The Peruvian Economy from 1950*, 1999, p.167.
21 Blondet y Montero, *op. cit.*, pp.93-95.

ラムを実施した。1992年から実施された食糧援助国家プログラムPRONAA＜Programa Nacional de Asistencia Alimentaria＞では，人民食堂に対して補助金を与えることが決められた。しかし，このプログラムの予算は不十分で，援助が与えられた人民食堂は与党とのつながりの強い食堂であった点を注目しなければならない[22]。

援助食糧の分配方法[23]にも問題が見られる。援助食糧が人民食堂の提供する食事に占める割合は同一ではないが，全食材量に占める援助食糧の割合は減少傾向にあり[24]，さらに1990年代に入ると政治目的のために選別的に援助が行われた。組織運営の性格上，援助が行われなければ食堂は食事の提供が難しくなるため，食糧援助や政府の補助金は欠くことができない。自主管理による人民食堂の参加者たちにとっても，施しを与えられるほうが楽なため，政党を支持し援助を受けようとする傾向にある。従って，第一期フジモリ政権のもとでは貧困が拡大し組織の重要性が増す中で食堂数が減少していった。また，女性たちの手で，自分たちの手で助け合って生きていこうとする本来の人民食堂の姿が変化し，安価な食事の提供という活動自体が衰退し続けていることは否めない。

3．人民食堂と女性

最後に人民食堂に参加した女性について注目する。

主婦である女性たちは家事，とりわけ食事の支度に費やす時間が多いだけでなく，子供の世話などで家庭の外に出る機会が制限されてきた。しかし，経済状況の悪化により夫の収入が低下し，妻が働かざるを得なくなった。人民食堂は家事労力と食費の削減により，主婦に「時間と金」を節約する場を提供し家族を養っていく一つの機会を提供したのである[25]。

人民食堂は食事の提供のほかに，民衆教育[26]も行っている。職業訓練[27]や女性支援プログラムを実施している点は注目に値する。貧困に直面した女性たちはその経済的な必要性を満たすために食堂に集ったが，組織に参加する

---

22 *Ibid.*, p.147.

23 *Ibid.*, p.62. アメリカ合衆国のUSAIDO(la Agencia de los Estados Unidos para el Desarrollo Internacional) から提供される援助食糧はペルー国内で政府とCARITASやCAREなど複数の民間団体が受け取り，食堂に分配していた。しかし，政府はUSAIDOからの援助を政府とCARITASのみに限り，分配先が選別されると同時に人民食堂への援助は制限されるようになった。

24 大串 前掲書 p.59.

25 Blondet y Montero, *op. cit.*, pp.117-119.

26 大串 前掲書 p.59.

27 Blondet y Montero, *op. cit.*, p79.

ことは経済的利点だけでなく副次的効果を生むことになった[28]。ここでは二つの側面について言及する。

第一に，女性が家族のほかに友人を持つことの効果を挙げることができる。女性はペルー社会に伝統的に存在する家父長主義＜paternalismo＞によって社会から疎外され，孤立してきた。彼女たちは人民食堂で単なる友人を作るのではなく，自分たちの問題を共有する仲間を作るのである[29]。1990 年以降，人民食堂は衰退していったが，女性は食堂に参加したことで社会に進出するようになった。そして女性たちは生活の場を守る中で権利意識に目覚めていったのである[30]。

第二に，教育機会の場が生まれたことである。民衆教育活動として，具体的には健康に関するプログラムや子供の栄養面での教育が行われている。これらの活動は教会や NGO がその指導にあたり，人民食堂はその活動場所となっているのである。

4. おわりに

人民食堂結成当初の食事を安価で提供するという活動は，フジモリ政権期にその政策の影響で衰退していった。ラテンアメリカの社会運動の限界として，物質的利益を要求する運動は，その視野の狭さとともに運動の直接の目的が短期的に達成されないとすぐに消滅してしまう傾向が指摘され，社会運動の持つ社会変革能力に疑問が持たれている[31]。しかし，大衆層の女性が社会に進出するようになったという社会的な効果は大きいと思われる。その効果の一つとして，大衆層の女性の中から指導的な役割を果たす女性が誕生していることに注目したい[32]。上流階級や中間層の女性たちは 1990 年代に入り，中央もしくは地方で政治の場に進出するようになっている。彼女たちは女性問題を取り扱う機関や国会で女性委員会を設置するなどの動きを見せている[33]。しかし，ラテンアメリカでは社会運動への参加者の政治化や意識化が遅れており，政治レベルでのオルタナーティブ・プロジェクトを提出できない。その点を考慮すると，階級の異なる女性たちの連帯は極めて困難に

---

28 大串 前掲書 p.59.
29 S. Jaquette, Jane, *The Women's Movement in Latin America: Participation and Democracy*, 1994, p.167.
30 浅香幸枝 「ペルーの新しい社会と女性－グローバル化と参加噴出の社会に生きる女性たち」『ラテンアメリカ新しい女性と社会』2000 p.207.
31 大串 前掲書 p.100.
32 Blondet y Montero, *op. cit.*, pp.130-131.
33 浅香 前掲書 pp.299-301.

満ちているという指摘がある[34]。しかし，大衆層の女性が自分たちの意見を政治に反映させ，社会変革の担い手となるためには，階級間の連帯が必要であると思われる。ペルーの女性が階層の壁を打破して社会変革を行えるのか，今後はその点を検証していきたい。

表

(1) 貧困の状況　　(家族数) (%)

	貧困層 (極貧層)
1970 全国	50 (25)
1980 全国	46 (21)
1986 全国	52 (25)
1991 全国	54 (22)

出所：*Mujeres latinoamericanas en cifras*, 1993, p.18 より筆者作成

(2) 人民食堂の数

年	人民食堂の数	年	人民食堂の数
1980年以前	119	1987	1,383
1980	172	1988	1,861
1981	199	1989	2,958
1982	236	1990	3,259
1983	303	1991	5,112
1984	523	1992	—
1985	884	1993	—
1986	1,117	1994	2,273

出所：*Hoy: menú popular*, 1995, p.34 より筆者作成

[34] 大串 前掲書 p.22.

(3) 1990年8月の物価上昇率　(リマを中心とした首都圏地域)

項目	%
灯油　(gal)	3,100
ガソリン (84oct·gal)	2,968
プロパンガス　(924lbs)	2,632
パン (36g)	1,150
ジャガイモ (kg)	650
小麦粉 (kg)	531
牛乳 (l)	383
食用油 (l)	236
米 (grade A·kg)	230
卵 (kg)	218

出所：『貧困の世界化 IMFによる構造改革の衝撃』1999　p.193より筆者作成

参考文献

BLONDET, Cecilia, *Mujeres latinoamericanas en cifras: Perú*, Instituto de la Mujer, Ministerio de Asuntos Sociales de España y Facultad Latinoamericana de Ciencias Sociales (FLACSO), Madrid, 1993.

·····, "El movimiento de mujeres en el Perú 1960-1990", *Perú 1964-1994: Economía, sociedad y política*, pp.103-148, IEP, Lima, 1995.

BLONDET, Cecilia y MONTERO, Carmen, *La situación de la mujer en el Perú: 1980-1994*, IEP, Lima, 1995.

·····, *Hoy: Menú popular*, IEP-UNICEF, Lima, 1995.

CRABTREE, John y THOMAS, Jim, *Fujimori's Peru: The Political Economy*, Institute of Latin American Studies, University of London, London, 1998.

CRASKE, Nikki, *Women and Politics in Latin America*, Rutgers University Press, New Jersey, 1999.

FERNÁNDEZ, Arturo, "Análisis de los resultados de la investigación sobre <Comedores Populares> de Lima", *Movimientos de mujeres y pobreza en América Latina: Reflexiones a partir de un estudio de caso en el Perú*, pp.39-56, Homo Sapiens Ediciones, Rosario, 1994.

GONZALES DE OLARTE, Efraín, "Transformación sin desarrollo: Perú 1964-1994", *Perú 1964-1994: Economía, sociedad y política*, pp.41-68, IEP, Lima, 1995.

JELIN, Elizabeth (ed.), *Women and Social Change in Latin America*, Zed Books, London, 1990.

ROSA BARBI, Carmen, *Lima: aspiraciones, reconocimiento y ciudadanía en los noventa*, Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, 1997.

SHEAHAN, John, *Searching for a Better Society: The Peruvian Economy from 1950*, Pennsylvania State University, Pennsylvania, 1999.

S. JAQUETTE, Jane (ed.), *The Women's Movement in Latin America: Participation and Democracy*, Westview Press, Colorado, 1994.

浅香幸枝 「ペルーの新しい社会と女性 ーグローバル化と参加噴出の社会に生きる女性たちー」 国本伊代編 『ラテンアメリカ新しい社会と女性』 283-303頁 新評論 2000年.

ミッシェル・チョスドフスキー著/郭洋春訳 『貧困の世界化 IMFと世界銀行による構造調整の衝撃』 柘植書房新社 1999年.

日本輸出入銀行海外投資研究所 『海外投資研究所報』 1997年.

大串和雄 『ラテンアメリカの新しい風 社会運動と左翼思想』 同文館 1995年.

遅野井茂雄 『現代ペルーとフジモリ政権』 アジア経済研究所 1995年.

重冨恵子 「ペルー低所得者居住区における共同調理活動」 『ラテンアメリカ・レポート』 Vol. 13 No. 2 15-26頁 アジア経済研究所 1996年.

Bodas de sangre de Federico García Lorca y el instinto

Naoka Mori

Federico García Lorca es el escritor español más estudiado en Japón después de Cervantes. Sin embargo, el hispanismo japonés se ha demorado en subrayar su carácter andaluz o el regionalismo de sus obras. Aunque sea cierto que tales elementos son abundantes en sus obras, su arte dramático excede el ámbito local sistemáticamente, lo que, precisamente, hace de su teatro algo universal y que le ha proporcionado, en parte, su éxito en todo el mundo. Es más, aunque algunas de sus producciones parten de acontecimientos periodísticos, que la crítica no ha dejado de señalar reiteradamente, Lorca nunca opta por conectar la historia con un lugar concreto de Andalucía, ni acomoda el habla de los personajes a esa norma. Por otro lado, este teatro se relaciona con impulsos elementales y enlaza fácilmente con elementos del inconsciente colectivo, siendo muy eficaces los acercamientos críticos antropológicos, míticos o psicoanalíticos, lo que redunda en una visión alejada de cualquier tipo de reduccionismo espacio-cultural, si bien su modelación hipánica es evidente.

En este artículo vamos a centrarnos en uno de sus tres dramas rurales, *Bodas de sangre*, tratando de mostrar la preeminencia del instinto como motor de la historia y como caracterización de los personajes, dentro de la consabida lectura de conflicto entre razón y pasión, individuo frente a sociedad, expresión individual de la sexualidad / institución matrimonial. Los habitantes de este drama no tienen nada que ver con los que aparecen en el drama burgués de la época, emblemas de la ideología dominante y preocupados por las convenciones sociales. Aquéllos se polarizan en dos grupos: unos obedecen al sistema ciegamente, otros se oponen al mismo. Se trata, como acabamos de señalar, de encarnar los conflictos entre la pasión de los seres humanos y la razón tanto como los conflictos entre los individuos y la sociedad, de una forma violenta, reproduciendo, en

cierta medida, los mecanismos que la represión producen en el autor.[1]

Gwynne Edwards realizó una afirmación que merece ser recordada: <<Dentro de cada individuo existen fuerzas opuestas que pueden estar bien compensadas o encontrarse, en cambio, entrañadas en difícil tensión ... En un sentido, el impulso de *Bodas de sangre* es constructivo y esta tendencia se manifiesta en los esfuerzos de hombres y mujeres por integrar sus tierras y familias dentro de esquemas armoniosos, y ordenados, tratando de resistir superar esas fuerzas internas que amenazan con destrozar sus vidas.>> [2] El individuo se polariza en dos naturalezas opuestas; la racional y la pasional. La meta de la primera es la propagación de la especie, y la manera de realizarla es fundirse con su grupo, la raza y la tribu, para mantener su grupo social y así poder conseguir la eternidad a través de la casta. De tal forma, racionalidad se une con maternidad[3] estrechamente. El objetivo de la naturaleza pasional es el de realizar el deseo personal, en concreto, la sexualidad. Estos dos aspectos del ser humano provienen del instinto, pero sus orientaciones de realización son opuestos, y de aquí nace el conflicto fundamental de la obra. El instinto de conservación de la especie quiere perpetuar a los individuos y conseguir un tipo de inmortalidad que se remite a la propia en su tribu. Para sustentar al grupo social los seres humanos hemos creado el orden social. En *Bodas de sangre* este orden aparece en forma del código restringido, sobre todo mediante el concepto del honor y tomando la pasión personal como la fuente que destruye la estabilidad de la sociedad. El orden común al grupo debe matar las desviaciones para mantener el grupo, porque la excesiva singularidad del individuo constituye una amenanza mortal. Normalmente, estas

---

[1] Véase a este respecto las sugerentes lecturas de C. Feal Deibe, *Eros y Lorca*, Barcelona, Edhasa, 1973; *Lorca: tragedia y mito*, Ottawa, Dovehouse Editions, 1989; Inés Marful Amor, *Lorca y sus dobles. Interpretación psicoanalítica de la obra dramática y dibujística*, Kassel, Reichenberger, 1991; C. Busette, "Libido and repression in García Lorca's theatre", *Drama, sex and politics*, Cambridge University, 1985, pp. 173–182.

[2] Cit. Gwynne Edwards: *El Teatro de Federico García Lorca*, Madrid, Gredos, 1983, p. 198, traducción por Carlos Martín.

[3] En este artículo utilizamos el término, "maternidad", como el mero deseo de tener hijos. Minako Nonoyama define este concepto: <<La maternidad no es lo moral, sino impulsivo ligado con el instinto de la conservación de la especie.>> "Vida y muerte en *Bodas de sangre*", *Arbor*, vol. 83 (1972), p. 309.

dos fuerzas opuestas del instinto del ser humano mantienen el equilibrio, pero tan sutilmente, que su pérdida llevará a la tragedia y a la muerte. En *Bodas de sangre* Lorca describe el conflicto entre estas dos fuerzas y la Naturaleza que interviene en la trama como la gran existencia sobrehumana. [4]

El título por sí mismo es una paradoja y dentro de él ya describe los conflictos entre aquellas dos fuerzas que forman el tema central de la obra. La impresión que da la palabra "boda" es creativa y armoniosa. En contraposición, "sangre" hace referencia a la violencia, a la destrucción y a la muerte. Para Lorca, la sangre tiene un significado especial, y aparece en muchas de sus obras. Para él la sangre es lo que parte de una religiosidad mítica y arcaica. En *Bodas* aparece la imagen de la sangre derramada con frecuencia, y es el símbolo de sacrificio. La boda es un rito para conseguir la meta de la conservación de la especie, y la sangre es la fuerza de la pasión que puede estropearla. A través del título, que es una mezcla de dos elementos opuestos, ya sabemos cómo va a discurrir la fábula. Al mismo tiempo, Lorca nos indica que el rito del matrimonio ocupa un papel importante como símbolo del convencionalismo, utilizando el término "boda". Originalmente, el objetivo del matrimonio era la realización de la maternidad, es decir, mantener el linaje a través de tener hijos, lo que aparece mencionado varias veces en la obra, sobre todo, por la Madre (la madre del Novio) y por el Padre (el padre de la Novia); en este sentido, la palabra "sangre" puede tener un significado positivo, lo que simboliza el linaje. En los tiempos antiguos, la sangre era considerada como un vehículo de la vida por ciertos pueblos. También, la sangre alude a la imagen de la virginidad de la novia; en dicho contexto, la sangre es el símbolo del sacrificio para la fecundidad. De ese modo, el título contiene una

---

[4] <<En todas ellas (en la trilogía) hemos podido observar que se debaten dos fuerzas en conflicto: por un lado el peso de la tradición y por otro, las ansias de libertad. Las tres se enmarcan en un tipo de sociedad arcaica cuyas características son: prejuicios, apariencia, autoridad, orden, honra que podremos reducir a <<tradición>>, frente a principios tales como: pasión, instinto, individualidad que, por reducción a su esencia, pueden asociarse al concepto de <<libertad>>.>> María Rosa Cabo Martínez, "Fuerzas en conflicto en la dramaturgia de Lorca", *Castilla*, 12 (1987), p. 9.

gran paradoja. [5]

El tema de las dos fuerzas humanas enfrentadas se expresa de forma magistral por el medio de los personajes de la obra. Ahora los clasificamos según estos dos aspectos del ser humano.

1) la racionalidad > la pasión : la Madre, el Novio, el Padre;
2) la racionalidad = la pasión: la Novia;
3) la racionalidad < la pasión: Leonardo.

Los personajes que pertenecen al grupo 1) valoran la racionalidad y el objetivo de la conservación de la especie más que la pasión personal e intentan llevar adelante el matrimonio entre el Novio y la Novia. En cambio, el del grupo 3), Leonardo, actúa de acuerdo con su deseo personal, el grupo social quiere omitirle. Como el grupo 2) está situado en el medio del 1) y el 3), la Novia prefiere llevar a cabo su matrimonio cuando tiene el contacto con los del 1), y se refleja una actitud negativa para su boda cuando tiene contacto con Leonardo.

Los personajes centrales son los cuatro siguentes: la Madre, el Novio, la Novia y Leonardo. Sobre todo, la Madre es la figura más vigorosa y la mayor víctima de la tragedia. Ella no puede escaparse de los sentimientos de odio y venganza hacia los Félix. En su deseo y obsesión de venganza encarna su pasión personal; sin embargo, consigue reprimirla con la esperanza de tener nietos. Su vida está dominada por el deseo de obtener descendientes, o sea, por el instinto de la maternidad. Busca instintivamente fertilidad y creatividad por el matrimonio y lo ve como un medio de prosperidad de su descendencia obedeciendo a las convenciones y las tradiciones que continúan desde tiempos antiguos. El Novio obedece la voluntad de su madre, intentando realizar la conservación de la especie y, por medio del matrimonio, promete a la Novia la realización de la continuidad y

[5] <<El título de la obra contiene un soprendente elemento de paradoja que capta la esencia de movimientos contrarios y enfrentados que hay en la acción. La boda, por un lado, nos habla de todo lo que es creativo y armonioso ... La sangre, en cambio, nos sugiere todo lo contrario: la violencia, la muerte, la destrucción, hombres y mujeres enfrentados entre sí individual o colectivamente, y la amarga tristeza y agonía que siguen a semejantes conflictos.>> Edwards, p. 179.

la perpetuación dentro de la tribu, y la paz y la fertilidad dentro de la Naturaleza. Por lo tanto, le ofrece la unidad entre los humanos y la Naturaleza. Al mismo tiempo, intenta poner a la Novia debajo de la dominación de ese orden, lo que significa asimismo obedecer al linaje y fundirse dentro de la tribu, que es tanto como decir que abandona su pasión personal.[6] Mientras tanto, Leonardo simboliza la pasión personal, que está lejos de la armonía social. Es el único personaje con un nombre propio en la obra, lo que significa que tiene individualidad, con una base más real, que no se disuelve en el grupo social, que actúa de acuerdo con su deseo y que se rebela contra el orden social, mientras a otros personajes se les hace referencia solamente por medio de nombres genéricos, y la mayoría de ellos intentan fundirse en el grupo. Los demás aceptan lo que les ocurre; él, en cambio, busca un camino para realizar su pasión y provoca las acciones. En toda la obra se refleja la imagen del caballo, sobre todo en la nana, que es un símbolo de la fuerza, la sexualidad, y que sugiere el dominio de la naturaleza, del instinto, y estando él relacionado estrechamente con esa imagen.[7] Él ofrece a la Novia la separación de la tribu y la satisfacción de la pasión personal que se puede conseguir sólo cuando se libera de la tribu. Mira hacia el interior del individuo donde habita la pasión personal y busca la realización del deseo propio. El primer paso para esto, cuyo requerimiento es la individualización, es el aislamiento del grupo.[8] La Novia tiene dos alternativas entre sí: la continuación del linaje que el Novio le ofrece a través del matrimonio y que supone un tipo de inmortalidad, y la satisfacción de la pasión que Leonardo le

---

[6] Véase R. A. Zimbardo: "The Mythic Pattern in Lorca's *Blood Wedding*", *Modern Drama*, 10 (1968), pp. 366 y 369.

[7] <<The the horse in the Lullaby is to be identified with Leonardo's horse and his wounds with the fate of Leonardo is indicated by the action accompanying the song.>> <<The tone of the Lullaby is portentous, foretelling the fatal wounds and the grief to come. And the "black water," the "snow wound," the "silvery dagger," and the singing stream itself are echoed in subsequent references to Leonard's fate.>>Touster, Eva K., "Thematic Patterns in Lorca's *Blood Wedding*", *Modern Drama*, 7, 1964, p. 23. <<As the bridegroom and his father are bulls, Leonardo is the "snow-wounded" horse, more specifically the horse sho "won'nt drink from the stream.">> Zimbardo, p. 368.

[8] Véase. Arango L., pp. 173-175, Robert Barnes: "The Fusion of Poetry and Drama in *Blood Wedding*", *Modern Drama*, 2 (1960), p. 395, Zimbardo, pp. 366 - 369.

promete. Ella tiene dos fuerzas opuestas, la racionalidad y la pasión, las cuales heredó de sus padres. Tanto como la Madre, el Padre desea la propagación de la especie a través del matrimonio. En cuanto al carácter de su madre, la Vecina menciona: <<VECINA. A su madre la conocí. Hermosa. Le relucía la cara como a un santo; pero a mí no me gustó nunca. No quería a su marido. (p. 420)>>[9] En su juventud, el Padre cultivaba sus tierras en busca de una mayor productividad y la riqueza. Sin embargo, se encontró con la esterilidad de ambas, de la tierra y de su esposa fría que no lo quería, por lo que necesitaba castigarlas para suscitar una mayor fertilidad.[10] Siendo la hija de los dos, hereda la voluntad de su padre, que busca la fertilidad, y la esterilidad, y la frialdad de su madre. Estos dos aspectos pueden explicar los motivos de sus acciones. Para satisfacer el deseo de su padre decide casarse con el Novio, y de acuerdo con la cualidad que ha heredado de su madre, la esterilidad, huye con Leonardo por el impulso de su pasión. Pero, ella es más objeto que sujeto del amor, y sus acciones y sus palabras son pasivas. No lucha consigo misma como la protagonista de *Yerma*.[11] Hay un personaje excepcional que no pertenece a ningún grupo de los tres, que es la Criada. Ella consigue el equilibrio de las dos fuerzas opuestas. Tanto como la Poncia, en *La casa de Bernarda Alba*, entiende la importancia de la sexualidad en el matrimonio.[12]

Podríamos dividir la obra según sus escenas y los acontecimientos principales. Se puede dividir la obra en tres partes. El Acto I trata sobre los preparativos para el matrimonio, y dentro del rito de la boda promete el nacimiento de la siguiente generación como la realización de la maternidad acentuando la unión dentro del grupo

---

[9] Federico García Lorca, *Obras completas II, Teatro*, Valencia, Barcelona,Círculo de Lectores, Galaxia Gutenberg, 1997, p. 151.

[10] <<PADRE. En mi tiempo, ni esparto daba esta tierra. Ha sido necesario castigarla y hasta llorarla, para que nos dé algo provechoso.>> p. 429.

[11] Véase Barnes, p. 397, Nonomiya, p. 319, Zimbardo, p. 367.

[12] <<Con un papel dramático de menor relieve, la Criada forma parte de esa serie de personajes que, a pesar de ajustarse a los deberes y obligaciones sociales, viven acechados por la fuerza de sus pasiones y de sus instintos más primitivos.>> Cabo, p. 19. Se ve tal actitud suya en las siguientes palabras: <<CRIADA. ¡Dichosa tú que vas a abrazar a un hombre, que lo vas a besar, que vas a sentir su peso!>> p. 434, <<CRIADA. ...¿Una boda, qué es? Una boda es esto y nada más. ¿Son los dulces? ¿Son los ramos de flores? No. Es una cama

social. Es muy interesante que el Cuadro II, que está dominado por Leonardo se encuentra encajado entre los Cuadros I y III, donde la Madre y el Padre desean los nietos, la nueva generación, a través de la unión de la familia. En el Acto II se celebra la boda como el clímax, donde contienden las dos fuerzas. Por fin, en el Acto III, llega el destino de la muerte como la consecuencia del conflicto. Así, la muerte restringe la vida del ser humano. [13]

Esta estructura de la obra la podemos identificar con la fase lunar: el nacimiento, la evolución, la muerte. En general la luna tiene una imagen siniestra en la obra de Lorca, que alude al misterio de la vida y de la muerte. La Luna que aparece en la figura del leñador joven en el Cuadro I del Acto III es el personaje que encarna la muerte. En esta escena, el simbolismo de la luna nos aleja del mundo de la realidad y evoca una imagen universal del destino del ser humano. Podemos identificar la fase de la luna con la vida humana: nacer, engendrar y morir. Durante tres noches la luna desaparece del cielo, pero al cuarto día reaparece, o sea, renace. Este simbolismo también afirma que el destino de los seres humanos es un ciclo. La Luna pide la sangre, y la muerte es algo necesario para completar el círculo de la vida humana.[14]

Para los seres humanos ambas fuerzas, la racionalidad y la pasión, son indispensables, y sólo podemos vivir manteniendo el equilibrio de las dos. En *Bodas de sangre*, el impulso que conduce la obra es el conflicto y el desequilibrio de las dos, es decir, a los que les importa demasiado la conservación y a los que niegan la existencia de la pasión se les invita a la tragedia. El destino de la muerte ocupa un papel importante en ese conflicto en toda la obra. Como la vida de un individuo está tan restringida por la muerte, uno intenta satisfacer el deseo de la conservación de la especie continuando el linaje y consiguiendo la eternidad a través de su fusión con el grupo social. Al mismo tiempo, la vida humana siempre está amenazada por la muerte imprevista que puede cortar su linaje. Pero, la muerte por sí misma

---

relumbrante y un hombre y una mujer.>> p. 435.
[13] Véase Zimbardo, p. 366.
[14] Véase Arango L., pp.58-60, pp. 114-121 y pp.123-129.

no es tragedia, puesto que llega como el último momento de la vida para todos, la tragedia está en que no podemos elegir cúando y cómo morimos, y así, tememos la muerte. El temor hacia la inesperada muerte aparece muchas veces en la obra. Lo más simbólico es la obsesión y el odio al cuchillo de la Madre. El cuchillo es un símbolo de la muerte y de la venganza. Éste simboliza la fuerza misteriosa de la muerte que puede amenazar con destruir el linaje que los humanos intentan continuar. Es el material para el asesinato y el instrumento del sacrificio. Causa la muerte al Novio y a Leonardo.[15]

El Acto III se abre con el bosque de noche cuyo efecto es poner al Novio y a los amantes, la Novia y Leonardo, debajo de una luz imparcial y sugerir la inevitabilidad de la tragedia. Y su inevitabilidad está expresada en el personaje de la Madre. Ella es la mayor víctima de la tragedia y la transmisora de la situación de los hombres. [16] Ella nos hace entender la inevitabilidad del sino representando a todos los humanos. Además, circula el dolor de la vida que nunca se puede evitar. Todo está decidido por el destino desde el principio, lo que es evidente en el paralelismo con que la obra se abre y se cierra; la obsesión de las navajas por la Madre. También en la experiencia del hijo de la Vecina, Rafael, quien se ha cortado los dos brazos con una máquina, está repetida la muerte del hijo mayor de la Madre. Las tres mujeres, la Mujer, la Madre y la Novia, están en una situación parecida en el Cuadro final. La Mujer ha perdido al hijo que pudiera tener con Leonardo, y la Novia al que pudiera tener con el Novio, y el hijo de la Mujer se asemeja al Novio en el sentido de no tener padre. Aunque ellas tienen un lamento común, están muy alejadas y aisladas, y es imposible su comunicación mutua. Así, no pueden compartir su tristeza y su dolor.[17]

---

[15] Véase Arango L., pp. 97–100 y pp. 127 y 128. << En las religiones arcaicas, el cuchillo era un símbolo de muerte. Como elemento esencial para la inmolación, él evoca un sentimiento a la vez de repulsión y de fascinación. Él hace parte del patrimonio del sacrificio. En estos poemas, Lorca da al cuchillo y al puñal un sentido fúnebre.>> p. 98.

[16] Véase Gaskell, Ronald: "Theme and Form: Lorca's *Blood Wedding*", *Modern Drama*, 5 (1963), p. 434, Touster, Eva K.: "Thematic Patterns in Lorca's *Blood Wedding*", *Modern Drama*, 7 (1964) p. 18.

[17] Véase Edwards, p. 210.

En resumen, somos incapaces de escapar del dolor y de la angustia de la vida, del ritmo de la Naturaleza, del destino, y sólo podemos obedecerlos y aceptarlos. La vida humana se halla rodeada en su pequeñez e ignorancia por fuerzas que la controlan. No podemos evitar el destino de la muerte. Cuando llega esa hora fatal y la fatalidad se cumple implacablemente, sentimos cierto alivio porque el presentimiento se convierte en realidad. En la obra la muerte finaliza el conflicto entre la racionalidad y la pasión: <<MADRE: Aquí. Aquí quiero estar. Y tranquila. Ya todos están muertos. A media noche dormiré, dormiré sin que ya me aterren la escopeta o el cuchillo ... (p. 471)>> Por lo menos la muerte le trae la serenidad psicológica al mismo tiempo que la renunciación.

Todos los personajes son víctimas del destino. Intentan perfeccionar la tierra y la familia con la armonía y superar la fuerza de la pasión que les amenaza con la destrucción de la vida. Sin embargo, no pueden cambiar la realidad y el destino de la Naturaleza y aceptan la muerte como la solución final. La tierra envuelve y ampara el cuerpo herido del hombre tiernamente. Al final vuelve la imagen de la tierra y nos hace reflexionar acerca del destino humano. La muerte consigue un final apropiado y la tierra es muy amable con el cuerpo herido: <<MADRE: ...Benditos sean los trigos, porque mis hijos están debajo de ellos; bendita sea la lluvia,porque moja la cara de los muertos. Bendito sea Dios, que nos tiende juntos para descansar. (p.473)>> Es la reconciliación entre la Madre y la muerte. Ella es una parte de la tierra y su tristeza y su dolor viene de lo más hondo de su existencia. No utiliza la palabra, "cementerio", porque la considera como el lugar donde descansan los hombres y comparten su dolor con la Madre Tierra que ampara a sus hijos. [18]

[18] Véase Edwards, pp. 209 y 210, Touster, p. 25.

Bibliografía

Amor, Inés Marful: *Lorca y sus dobles. Interpretación psicoanalítica de la obra dramática y dibujística*, Kassel, Reichenberger, 1991.

Arango L., Manuel Antonio: *Símbolo y simbología en la obra de Federico García Lorca*, Madrid, Editorial Fundamentos, 1995.

Busette, Cedric: "Libido and Repression in García Lorca's Theatre", *Drama, Sex and Politics*, London, Cambridge University Press, 1985, pp.173-182.

Burton, Julianne: "The Greatest Punishment Female and Male in Lorca's Tragedies", *Woman in Hispanic Literature, Icons and Fallen Idols*, Edited by Beth Miller, Berkeley, University of California Press, 1983, pp.259-279.

Deibe, C. Feal: *Eros y Lorca*, Barcelona, Edhasa, 1973.

_____: *Lorca: tragedia y mito*, Ottawa, Dovehouse Editions, 1989.

Edwards, Gwyne: *El teatro de Federico García Lorca*, versión española de Carlos Martín, Madrid, Gredos, 1983.

García Lorca, Federico: *Obras Completas I-VI*, edición de Miguel García-Posada, Valencia, Barcelona, Círculo de Lectores, Galaxia Gutenberg, 1997.

_____: *Antología comentada*, sel. E. Martín, Madrid, Eds. de la Torre, 1989.

García Lorca, Francisco: *Federico y su mundo*, Madrid, Alianza, 1980.

Gonzales del Valle, Luis: *La tragedia en el teatro de Unamuno, Valle-Inclán y García Lorca*, New York, Eliseo Torres, 1973.

Greenfield, Summer M.: "Lorca's Theatre: A Synthetic Reexamination", *Journal of Spanish Studies Twentieth Century*, Volume 5, Number 1, Spring, 1977, pp.31-47.

Guardia, Alfredo de la: *García Lorca: persona y creación*, Buenos Aires, Schapire, 1944.

Halliburton, Charles Lloyd: "García Lorca, the Tragedian; an Aristotelian Analysis of *Bodas de Sangre*", *Revista de Estudios Hispánicos*, 1 (1963), pp.35-40.

Lecciones sobre García Lorca, Granada, Cincuentenario, 1986.

Materna, Linda: "Los códigos genéricos sexuales y la presentación de la mujer en el teatro de García Lorca", traducido por Asunción Horno-Delegado, *Estelas, laberintos, nuevas sendas Unamuno, Valle-Inclán, García Lorca. La Guerra civil*, Ángel G. Loureiro (Coord.) Anthropos, 1988, pp.263-277.

Martín, E.: *Federico García Lorca, heterodoxo y mártir. Análisis y proyección de la obra juvenil inédita*, Madrid, Siglo XXI, 1986.

Martínez Nadal, Rafael: *Cuatro lecciones sobre García Lorca*, Madrid, Cátedra, 1980.

Nonomiya, Minako: "Vida y muerte en *Bodas de Sangre*", *Arbor*, Vol. 83 (1972), pp.307-315.

Palley, Julian: "Archetypal Symbols in *Bodas de Sangre*", *HISPANIA*, L (1967), pp.74-79.

Touster, Eva K.: "Thematic Patterns in Lorca's *Blood Wedding*", *Modern Drama*, 7 (1964), pp.16-27.

Zdenek, Joseph W. : "La mujer y la frustración en las comedias de García Lorca", *HISPANIA*, XXXVIII (1955), pp.67-69.

Zimbardo, R. A.: "The Mythic Pattern in Lorca's *Blood Wedding*", 10 (1968), pp.364-371.

国立国語研究所編『日本語とスペイン語(1)(2)(3)』くろしお出版
1994年 223pp., 1997年 300pp., 2000年 326pp.

橋本　和美

『日本語とスペイン語(3)』は、国立国語研究所の日西対照言語学研究会から出版された報告書の第三弾である。国立国語研究所は国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究と、国語合理化の基礎を築く目的で、1948年に設置された。スペイン語教育の歴史は明治時代にまで遡ることができるが、ここ十数年における教材や辞書の作成・出版は特に著しい。当研究所において「日本語とスペイン語との対照言語学的研究計画」が始められたのも 1990 年であった。この研究計画が日西対照研究のみにとどまらず、スペインや中南米諸国における日本語教育及び日本におけるスペイン語教育に基礎研究のかたちで寄与することが念頭におかれ、言語学、スペイン語学、日本語教育学など様々な分野から客員研究員が招かれた。当初は両語の対照言語学的研究の現状把握(『日本語とスペイン語(1)』)から始まり、〈言語レベルと結合関係〉(『日本語とスペイン語(2)』)の研究を経て、今回は〈動詞とその周辺〉がまとめられるに至った。本書の刊行を機に、ここでは『日本語とスペイン語』について、『(1)』から『(3)』を総括して紹介する。

報告書は2部で構成される。第一部には、理論・応用研究を問わず各研究員のテーマがまとめられている。関心の対象は研究員によって異なるが、いずれも共通項として決められた研究課題が論考の中核をなす。たとえば『(2)』の〈言語レベルと接合関係〉は、「日本語から見たスペイン語の複文ート、トキ、タラと *cuando* の場合ー」で、複文(*oración compleja*)や時制(*tiempo*)、アスペクト(*aspecto*)をキーワードに両語を比較対照する。また「日本語とスペイン語のボイス」においては、日西両語の対応を能動と受動に限らず、使役や自動詞・他動詞、日本語の「〜てもらう」、スペイン語の *se* を使った再帰動詞も含めて丁寧に考察されている。つまりこの研究課題では〈接合関係〉を軸に、日本語とスペイン語を異なる〈言語レベル〉で対照させている。

各報告は、研究課題に関するすべてのテーマを網羅することを第一の目的とはしていない。それよりも地道に息の長い研究を続けることが言

語教育の基礎研究としての使命であると、研究室長は報告書に添えて述べている。研究員もこれを意識し、学習者が語学習得の過程で必ず立ち止まるような点を常に探っているのが随所に感じられる。スペイン語の動詞活用は学習過程における難関の一つであるが、『(3)』の「日本語とスペイン語の拡大活用論」では、表面的にはまったく異なる両語の活用に「成分」という単位を設けて共通点を見出す。また『(1)』の「日西対照研究とエラーアナリシスとトランスリンガル・アプローチ」の著者は、誤答が語学習得の過程を如実に示す貴重な資料であるという建設的な立場をとっている。そして自らの教室をフィールドワークの場として活用し、誤答の要因を図式なども用いてあらゆる角度から綿密に分析する。このような観点での洞察は、教師だけでなく学習者にとっても同様に有益な研究テーマといえるだろう。

第二部は、三巻を通して日西対照、関連研究及び教材の概観が中心となる。スペイン語研究では、音韻、形態・語彙、統語研究や文法全般について、未だ示唆に富む古典的必携書から、これまでの論文や名著まで簡潔に解説している。科学技術の急速な進歩によって膨大なデータ処理が可能になり、国境を越えての情報交換が活性化した点も見逃せない。スペイン語圏にとどまらず、質の高さが際立つドイツやフランスをはじめ、世界各地の研究動向が把握できるのは魅力的である。対照言語学や日本語学ついての刊行物も詳細に記され、ぜひ参照しておきたい文献リストが並ぶ。

このような先行研究の概観は、今後の課題の指摘にもつながる。日本語文法では、理論研究の成果を述べた上で、今後は日本語教育に応用できる実践的な研究の必要性を明らかにしている。この点で、談話関連のテーマは注目に値する。スペイン語の談話研究は 1964 年、メキシコ国立自治大学がスペイン語圏の言語学機関へ呼びかけたことにより始まった。大都市における知識人階級の話しことばを、厳密かつ包括的に記述し、音声、語彙、文法など諸側面から研究することが提案されたのである。このプロジェクトの成果は 1990 年代に入って数多く発表されるようになった。「～の都市における話しことば」といった類の著書は、現地から離れてスペイン語に携わるわれわれに、生きたスペイン語という貴重な資料体を提供してくれる。

近年日本とスペイン語圏とのあいだで、人々の交流は勢いを増すばか

りである。このような社会的状況を背景に今後は語学研究の場でも、スペイン語圏における研究の受信一辺倒ではなく、日本語研究とスペイン語研究の連携による科学的かつ客観的な研究の重要性がより一層高まるだろう。多岐にわたる分野を扱うこの研究書を通読するには、少々の困難を伴うかも知れない。しかしながら、意表をついた切り口で両語を検討する論考から、国内外のリアルタイムな研究報告まで濃やかに記述されている『日本語とスペイン語』は、語学を研究する者にはもちろんのこと、スペイン語に関わるすべての者にとって座右の書といえよう。

『 象徴としての女性像 』
—ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象—

若桑みどり著　筑摩書房　2000年　501pp.

加藤　さやか

「シンボルのないところに統治はない」。近代国家研究家アンダソンの言を引き、著者若桑みどり氏は、ジェンダーも国家と同様、人為的に構築された権力構造だとする。自然の中に何ら基盤を持たないので、その存続と維持の為には、基盤を内面から支えるシンボルとイメージが不可欠である。古代ローマのキリスト教改宗より始まる家父長制社会において、女性は男性との肉体的差異にもとづき、身体と労働を収奪され、社会の中心から排除されてきた。本来自然が生んだ男女の性差自体には優位も劣位も無い。男性支配の社会を構築し、女性の劣性を人々の意識に浸透させるために、最も効果的に利用されたのが表象であった。言い換えれば、古代より美術史に登場する様々な女性像は、女性そのものを「描いた」というよりは、時の社会権力によって意図的に生産された表象だということである。イコノロジー研究家の著者によれば、美術史の分野においてこのように表象がとらえられるようになったのは近年のことである。それまでは、表象はその共同体の社会的現実や心性を反映するものであるという理論が一般的であった。

本書は五章から構成されている。各章では17世紀のスペイン画家ベラスケスの「織女たち」をはじめ、いくつかの具体例をあげ、西洋美術の女性像がどのような意図をもって生産され、やがて人類の歴史の中で女性たちをどのような状況に追い込んでいったのかを考察する。

第一章では、先史・古代の母系制社会で中心的な意味を持っていた「女神」たちが、父権社会の中でいかに没落していったかを示し、続く第二章では父権社会の初期に男性たちによって生産された、肉体と罪の根源としての女性像を取り扱う。ここで興味深いのは、聖母像が人間の女性の「穢れ」を強調するために生産されたものであるという指摘である。男性権力は、女性を低次元の肉体的存在と定義づけることで、その社会的価値を低いものにとどめておこうとした。そこで女性の身体やセクシュアリティのみならず、生殖能力そのものまでも「穢れ」として侮蔑の対象とした。そして、それを社会の心性に強烈に刷り

込むために生み出したシンボルが「聖母」なのである。男性たちは、肉体を持つ人間の女性の「穢れ」から一切解放された処女、虚像の理想像「聖母」を信仰の対象に置くことによって、彼女以外のすべての女性の「穢れ」を一層鮮明に際立たせることに成功した。つまり、聖母信仰は母性への尊敬や崇拝から生じたのではない。それはむしろ女性たちへの絶え間ない、抵抗不可能な懲罰であった。

第三章では、古代ローマの歴史家リウィウスの『ローマ建国史』に語られている“ルクレティアのレイプ”に焦点を当てる。男性の性こそ人類の性活動の中心であるという観念は、家父長制社会の基本構造から生じていることが指摘されている。

第四章で登場するシンボルは“糸紡ぎ”である。すなわち女性と労働の問題に着目する。機織という伝統クラフトと女性の関係をテーマにヨーロッパの産業史を追いながら、女性がどのような地位に押し込められ、社会で、また家庭でいかに搾取されてきたを論じ、最終的に「“糸紡ぎ”＝“女性の美徳” ―貞節・忍耐・謙遜―」という図像の成立を導き出す。注目すべきは章の後半である。上記の図像伝統をふまえて、ベラスケスの「織女たち」に新解釈を試みる。稀代の名画と称えられながら、その真の主題が謎に包まれたこの作品に対し、著者は、「かような天才画家には、解釈する側も、常識を超えた独自な視点で立ち向かわねばならない」と主張し、かつての研究者が誰も触れなかった点から論を展開する。まず、ベラスケスという画家の環境から推察して、彼は糸紡ぎの行為が女性の美徳を表すことを知っていたはずであるという。そして最終的に、問題の名画は、配置・明暗の対比によって、下級労働と上級芸術の上下関係を表したものであり、図像解釈学的には、ギリシャ神話の寓意とキリスト教の中世美徳図像を合体させたものと読み解く。17世紀西洋史、社会史、ギリシャ神話、キリスト教哲学など様々な面から論拠を挙げ、独自の結論を導き出す過程は、まさにパズルの一片一片を正確にはめ込んでいくような見事な展開である。最後の第五章では、女英雄ユーディットを登場させ、強い女について論じている。

本書全体を通して特筆すべきことは、今日のジェンダー研究家たちの成果が各所でふんだんに引用されている点である。人類学、哲学、文学、科学、経済学、産業史、文明史。ジェンダー研究は、人類の全史・全領域に及ぶ。その中で、表象をキーポイントに美術史の視点からアプローチするということは、「イメージ・アンド・ジェンダー」研究会の中心的メンバーである著者だからこそ実

現した画期的試みであったと言えるだろう。今から二十年前、著者は『寓意と象徴の女性像』を出版し、西洋文化には女性の尊厳を象徴する裸婦像が存在することを広く世に知らしめた。その以来、欧米の女性研究者たちによってジェンダー研究は飛躍的に進展し、発表される論文・モノグラフの数は今なお日を追って増加している状態である。こうして様々な学問分野が新しく書き換えられていく中、著者は、西洋美術の女性表象について再度書き直したいという強い思いに駆られて本書の執筆に至ったという。そこには、女性美術史家としての強い自負 —ジェンダーの視点に立つ美術史の仕事とは、男性社会の構築・維持のために利用された女性像の生産プロセスと消費のメカニズムを明らかにすることである— が窺われる。

一方の性が他方の上に位置することを止めさせるには、社会的プロセスだけでなく、文化面からの概念の再構築が不可欠であると著者は主張する。人類史数千年間にわたって築かれ伝えられてきた文化的カノンを破壊することは、なみなみならぬ難事業である。当然、自然と思っていたことが覆され、新しい目で歴史を眺めることになる。しかし、この歴史の再解釈という作業を「野放図に面白い仕事」と言い切る著者の言葉に、読者はこの分野にかける著者の情熱を感じ、さらなる研究の進展を期待することであろう。

スペイン関係文献目録（１９９９年－２０００年）

歴史

岡住正秀　「アグロタウンにおける民衆労働者のアソシアシオン－セビーリャ県コンスタンティーナ（1900-23年)－」スペイン史研究 14, 2000

中嶋茂雄　「カタルーニャにおけるB.C.アリバウ「祖国」の受容と変容」スペイン史研究 14, 2000

渡部哲郎　「スペイン・サンティアゴ巡礼」　横浜商科大学公開講座委員会編『２１世紀へのツーリズム：国際的異文化交流のあり方をもとめて』南窓社　2000

中塚次郎　「地中海的規範とアンダルシーアの農民運動」歴史学研究会編『社会的結合と民衆運動』青木書店 1999

中川和彦　「カスティーリャの興隆とその法」成城法学 54, 1998

坂東・川成編　『スペインと日本－ザビエルから日西交流の新時代へ』行路社 2000

清水有子　「書評　岸野久『ザビエルと日本』」歴史学研究　2000年９月

芝修身　「中世末期の低地アンダルシア地方におけるミニフンディオの形成」南山経済研究　15(1), 2000

三輪公忠　「米西戦争（１８９８年）－世界史の転換点－」イベロアメリカ研究　20(2), 2000

三輪公忠　「米西戦争（１８９８年）－世界史の転換点－」上智大学ラテンアメリカ・モノグラフシリーズ 10, 1999

David F.Trask　"How the Cold War Influenced U.S.Historians of the War with Spain in 1898" 上智大学ラテンアメリカ・モノグラフシリーズ 10, 1999

Juan Avilés Farrré　"El Desastre de 1898 desde España" 上智大学ラテンアメリカ・モノグラフシリーズ 10, 1999

Eusebio Leal Spengler　"Meditación ante el 98" 上智大学ラテンアメリカ・モノグラフシリーズ 10, 1999

足立　孝　「メスキーヌス－１１世紀アラゴン地方における農民隷属の形態」西洋史学 CXC, 1998

足立　孝　「９・１０世紀アラゴン地方の農村構造－地域的類型化の試み－」史学雑誌 107(3),

石原結實　『日本を変えた！種子島の鉄砲とザビエルの十字架』青萌堂 2000

横田庄一郎　『キリシタンと西洋音楽』朔北社 2000

深澤安博　「スペイン内戦」講座世界史 8 『戦争と民衆』東京大学出版会 1996

ジュゼッペ・クアトリーリオ　（箕浦万里子訳)『シチリアの千年－アラブからブルボンまで』新評論 1997

梅本浩志　「スペイン内戦と映画」軍縮問題資料　235, 2000

芝　紘子　「ジェンダーの生成と変容－スペインの事例への一考察」ジェンダー研究 2, 1999

飯田敏彦　「「スペインの興隆」を支えた商人たち－カトリック両王の時代（１４７４　－１５１６）を中心に」商経論叢　35(2), 1999

立石博高　「研究ノート「スペイン王国」の成立とコンベルソの問題に関する覚書」*Quadrante*

1, 1999
長岡礼美　「カタルーニャ・ナショナリズムの形成ースペイン独立戦争を中心に」関西大学西洋史論叢 2, 1999
林邦夫　「スペインとポルトガル」佐藤ほか編『西洋中世研究入門』名古屋大学出版会 2000
石橋辰夫　「ザビエルの軌跡撮り歩く」　日本経済新聞文化欄　2000年4月18日
関哲行　「１４－１６世紀の巡礼路都市アストルガの兄弟団」『中・近世西欧における社会統合の諸相』九州大学出版会　2000
関哲行　「中世のサンティアゴ巡礼と民衆信仰」『巡礼と民衆信仰』青木書店　1999
林　邦夫　「中世スペインのマイノリティームデハル」『岩波講座世界歴史』 8 岩波書店　1998
岡村　一　「中世地中海世界と馬－11 世紀 ～ 12 世紀のイベリア半島を中心に」熊本学園大学文学・言語学論集 6(2), 2000
西川和子　『スペイン十八世紀への招待』彩流社　2000
西崎文子　「スペイン内戦とアメリカ」アメリカン・スタディーズ（東大）3, 1998
宮本靖介　「スペイン内戦の衝撃」『ジョージ・オーウェルの栄光と悲惨』英宝社 1995
高井貴一　「George Orwell とスペイン内戦－Homage to Catalonia を中心にして－」『G.オーウェル研究ー初期作品研究とエッセイ』松柏社 2000
深澤安博　「スペイン内戦とモロッコ（上）」茨木大学人文学部紀要　33, 2000
林邦夫　「スペインとポルトガル」佐藤ほか編『西洋中世史研究入門』名古屋大学出版会 2000
杉浦　勉　「幻視する女たちースペイン異端審問とジェンダー／セクシュアリティ」坂口ほか編『宗教への問い　5　宗教の闇』岩波書店　2000
大住広人　『ザビエルとヤジロウの旅』葦書房　1999
奥野良知　「毛から綿へーカタルーニャ農村部への綿業の拡大に関する一考察（１７７９－１８０６）－」スペイン史研究 13, 1999
中本香　「１８世紀セゴビア市における毛織物の発展と限界」スペイン史研究 13, 1999
宮崎和夫　「フェリペ４世紀の宮廷社会の諸問題－その政治的機能から見た研究活動を中心に－」スペイン史研究 13, 1999
中塚次郎　「第８章　地中海的規範とアンダルシーアの農民運動」（写し）歴史学研究会編『社会的結合と民衆運動』青木書店　1999
池田　実　「スペイン憲法史の座標」『憲法政治学叢書１　近代憲法への問いかけ』 1999
Pedro M. Arbella　"Sinapia: una utopía española en el siglo XVIII" *CUADERNOS CANELA* 11, 1999
Vicente Arribas Montes "Enrique Dupuy de Lome -un diplomático español en Japón en el siglo XIX-" *CUADERNOS CANELA* 11, 1999
川成　洋　「日本人とスペイン内戦」講演記録 VI（１９９６－１９９８）（京都外国語大学イスパニア語学科）　1999
川成　洋　「スペイン内戦とイギリス人の反応」法政大学教養部紀要 109 人文科学部編 1999

川成　洋　リチャード・ウェーランほか著／高田ゆみ子訳　『ロバート・キャパ　スペイン内戦』大原社会問題研究所雑誌　502, 2000

上間　篤　「<<社会と人と者と>>- アル・アンダルスを理解する一助に- 」REHK 7, 1999

飯田敏彦　「「スペインの興隆」を支えた商人たち－カトリック両王の時代（１４７４－１５１６）を中心に」商経論叢（神奈川大）35(2), 1999

林　邦夫　「シスナンド・ダビーディス－１１世紀スペインの一貴族の生涯」木村尚三郎編『学問への旅』山川出版社 2000

河原　温　「ファン・ルイス・ビーベスと中世末期の貧民救済論」木村尚三郎編『学問への旅』山川出版社 2000

立石博高編　『スペイン・ポルトガル史』山川出版社 2000

遠藤美純　「スペイン・フランコ体制下におけるカタルーニャ・ナショナリズムの再生－カタルーニャ社会の変容と民族運動の諸主体」創価大学大学院紀要 20, 1999

Alberto Angulo Morales　"La influencia del tabaco americano en la España del Antiguo Régimen (siglos XVI-XVIII)" イベロアメリカ研究 21(1), 1999

中山直次訳「スペイン資本主義の起源」日本大学総合文化研究 5(1), 1999

色魔力夫　『フランコ　スペイン現代史の迷路』中公叢書 2000

中村幸太郎　「ビーベスの救貧論」社会福祉評論　3, 1952

白沢久一　「J. L. Vives の貧民救済制度論（１５２６）について」北星論集（北星学園大）10, 1973

池田　実　訳　「資料　スペイン 1812 年憲法（カディス憲法）」山梨大学教育人間科学部紀要 1(1), 1999

上間　篤　「テリアカとハスダイ－中世スペインの視点から」イスパニア図書 3, 2000

足立孝　「８・９世紀アラゴン地方の農村構造」史学雑誌　107(3), 1998

梅本浩志　「スペイン内戦と映画」軍縮問題資料　235, 2000

スティーヴン・ハンター　『さらばカタロニア讃歌』上・下　扶桑ミステリー 2000

Antonio Cabezas García　"Los países hispanos ante el siglo XXI"『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

Kishiro Ohgaki　"Confrontación cultural en 1549 – Situación previa y posterior a la llegada de Francisco de Xavier a Japón, vista a partir de los escritos de Rodrigo de Vivero"『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

語学

浅香武和　「日本におけるスペイン語教育の創始者」イスパニア図書 3,2000

江藤一郎　「現在分詞の用法の再検討」*HISPANICA* 44, 2000

原　誠　「スペイン語のいわゆる「既然形」の創出文法的解釈」*HISPANICA* 44, 2000

Enrique Balmaseda Maestu　"La aventura de la castellanización en América" *HISPANICA* 44, 2000

Pilar Lago Mediante　"Hipótesis acerca de las mezclas lingüísticas aplicadas a una niña en español-japonés" *HISPANICA* 44, 2000

仲井邦佳　"Tan bien... como en español medieval y el origen de también" *HISPANICA* 44, 2000
寺崎英樹　「日本語と対比したスペイン語の受動表現」東京外国語大学百周年記念論文集 1999
高垣敏博　「語彙アスペクトとスペイン語の<estar+ 過去分詞> 」東京外国語大学百周年記念論文集 1999
青木文夫　「スペイン語のgustar類の動詞の格構造についての再考」福岡大学総合研究所報 229号　人文・社会科学編 158, 1999
山村ひろみ　「estar + gerundio の記述と考察（上・下)」九州大学言語文化論究 11, 2000, 独仏文学研究 50, 2000
山村ひろみ　「Ser コピュラの pretérito による表出について」独仏文学研究 47, 1997
山村ひろみ　「Smith(1991)のアスペクト理論とスペイン語の pretérito 」独仏文学研究 48, 1998
江澤照美　「「講読」から「読解」へ－スペイン語の授業改善の試み」愛知県立大学紀要　言語・文学編 32, 2000
江澤照美　「外来語とスペインの地方語の使用について」愛知県立大学紀要　言語・文学編 31, 1999
石崎優子　「現代スペイン語における中動態について」*LINGUA* 10,1999
高橋節子　「スペイン語教科書の諸問題」白鴎大学論集 7(1), 1993
堀田英夫　「コンピュータを教育研究活用事例ＣＡＬＬ教室でのスペイン語教育－ＨＴＭＬで作成した教材を利用して」コンピュータ&エデュケーション 7, 1999
山口恙正　「スペイン語入門教材における文法シラバスのあり方について」 放送大学研究年報 17, 1999
石岡精三　「スペイン語の Exclamative 構文における素性〔＋emphatic〕と〔＋affirmative〕の付与について」長岡技術科学大学言語人文科学論集 13, 1999
三村友美　「ユダヤ・スペイン語現代イスタンブル方言の語彙にみられる外来要素について」地域文化研究 3, 2000
飯野昭夫　「アラビア語接続法についての一考察－従属節におけるスペイン語の接続法の対照」語学研究 92, 1999
広沢明彦　「受動性を使わないスペイン語の過去分詞の構造について」語学研究 93, 2000
中川　清　「旧陸海軍委託学生のスペイン語学習」駒澤大学外国語部論集 50・51, 2000
石原忠佳　「Spanish Arabic に関する一考察－その歴史的背景と音韻的特質」創価大学外国語学科紀要 10, 2000
小林和世　「日西対照研究－身体部位名称を用いた表現を資料として」*NIDABA* 29, 2000
渡辺志保　「日本語におけるスペイン語からの借用語－スペインの影響とラテンアメリカの影響に関する一考察」*NIDABA* 29, 2000
佐藤徳潤　"El contacto de la Lengua -el catalán y el castellano"　愛知県立大学　外国語学部紀要 29, 1997

近松洋男　「西ゴート法典 Forivdicvm, 681, スペイン法典 Fuero Juzgo, 1254」『新村猛先生追悼論文集』1998
廣康好美　「スペイン語の副詞とその機能（２）数量副詞 poco」神奈川県立外語短期大学紀要 21, 1999
堀田英夫　「スペイン語に使われている品詞の認定と原形形成」愛知県立大学言語・文学編 29, 1997
杉山朱実　「フランス語とバスク語との聖書の構造分析比較－バスク語の能格への一考察」サピエンチア 31, 1997
寿里順平　『６０歳からのスペイン語入門』三修社 2000
出口厚実　「スペイン語における胴上げ文とその意味」大阪外国語大学論集 18, 1998
三好準之助　『簡約スペイン語辞典』大学書林 2000
田尻陽一 / 西川喬　『初級スペイン語講座』芸林書房 1999
Hagio Sho, "Basque Nationalism and its Discourse in Language" MIYAJIMA Takashi & Others eds. *Regionalism and Immigration in the Context of European Integration.* National Museum of Ethnology, 1999.
ミゲル・アンヘル・カタラン / 松田廸　『はじめてのスペイン語単語集』ナツメ社 2000
Jesús Maroto López-Tello "Psicología del lenguaje. <Animismo> y <Logicismo> del español" *CUADERNOS CANELA* 11, 1999.
原　誠　「スペイン語の呼び掛け語句の、創出文法理論による処理法」拓殖大学論集 226, 1997
石井久生　「バスク自治州における地域分化の空間的パターン：バスク語属性を中心に」共立国際文化（共立女子大学）16, 1999
荻原　寛　「マニラ湾沿岸部のスペイン語系クレオールの語順をめぐって」長崎県立大学論集 33(2), 1999
橋本和美　「迂言法 (tener + 過去分詞, llevar + 過去分詞) について」REHK 7, 1999.
岡本信照　「生成文法の先駆者サンクティウス」イスパニア図書 3, 2000
高橋節子　「語りのテキストにおける語り手の介入－スペイン語の時制に関して－」白鴎大学論集 13(2), 1999
アベル・カルデナス　"Nosotros y el Departamento de Estudios Hispánicos: Un proyecto de integración de destrezas" アカデミア語学・文学編 67, 1999
大岩　勉　「サラゴサ県における言語状況について」アカデミア語学・文学編 67, 1999
川上茂信　「スペイン公用語事情」言語 2000 年 8 月号
フランシスコ・マテオ・ハエン　「スペインにおける言語と方言」慶応語学視聴覚教育研究室紀要 31, 1999
西脇エステラ　「メキシコにおけるスペイン語教育を通して」慶応語学視聴覚教育研究室紀要 31, 1999
加藤ナツ子　「スペイン語の否定極性と不定性」駒澤女子大学研究紀要 5, 1998
三木一郎　「スペイン語の "Oración" の機能別分類に関する考察（下）」京都外国語大学研究論叢　LIII, 1999

田澤　耕　「カタルーニャ語－日本語辞書学の現状について」 法政大学教養部紀要 107・108, 外国語学・外国文学編 1999

福嶌教隆　『NHK スタンダード４０　スペイン語』ＮＨＫ出版　2000

桜庭雅子 / 貫井一美　『しっかり学ぶスペイン語－文法と練習問題』ベレ出版 2000

佐藤邦彦　『ゼロから話せるスペイン語ー会話中心』　三修社 2000

国立国語研究所　『日本語とスペイン語（３）日本語と外国語の対照研究 VI』 くろしお出版 2000

アンドレ・ファーブル　「カタルーニャ語と朝鮮語」三浦/ 糟谷編『言語帝国主義とは何か』藤原書店 2000

Joaquín García Palacios　"La terminología en los diccionarios académicos del nuevo siglo"『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

Luis López Rodríguez　"El español y el sexismo lingüístico"『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

María Victora Romero Gualda　"El profesor de E/LE, ***hablante de calidad*** para el nuevo milenio"『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

近松洋男　「西葡語仮名翻字の歴史的変遷－ローマ字混じり新仮名遣いへー」『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

Cecilia Gómez Bobadilla　"Dialectología para hablantes de una segunda lengua"『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

三木一郎　「文法理論における「省略」の概念とその推移について」『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科　2000

新田　増　"Siturris y la pirdida de p- inicial latina"『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科　2000

文学

牛島信明　「ボルヘスの先駆者セルバンテス」幻想文学 59, 2000

牛島信明　「書評　ジャン・カナヴァジオ著『セルバンテス』 法政大学出版局　２０００」週間読書人　2000年12月１日

牛島信明　「新しき人、ドン・キホーテ」イスパニア図書 3, 2000

岩根圀和　「カルデロン作『三つの裁きをひとつに』父と子と母に」イスパニア図書 3, 2000

佐竹謙一　「カルデロンの<<マントと剣>>の喜劇に見る夜の効果」イスパニア図書 3, 2000

志賀一郎　「「９８年世代」再考－１００周年を振り返って」イスパニア図書 3, 2000

高橋博幸　「『フエンテ・オブフナ』の上演をめぐって」イスパニア図書 3, 2000

樋口正義　「四体液説から見たドン・キホーテ」イスパニア図書 3, 2000

興津憲作　「あるロマンセの思い出」イスパニア図書 3, 2000

桑原真夫　「ロサリア・デ・カストロという詩人」イスパニア図書 3, 2000

山崎信三　「『ドン・キホーテ』のことわざ（E)」イスパニア図書 3, 2000

中野忠和　「猪こわいサンチョ・パンサ」イスパニア図書 3, 2000

Caferina Puebla Pedrosa "*Señas de identidad*: Desarrollo alienante y revisión cultural" *HISPANICA* 44, 2000

磯野吉美 「アントニオ・ブエロ＝バリェホの空間」*HISPANICA* 44, 2000

Alfredo López-Pasarín Basabe "La poesía de Vicente Aleixandre: guía de lectura" 早稲田大学教養諸学研究 39(3), 11

桜井厚二 「ドストエフスキイの作品における「ドン・キホーテ」」早稲田大学教育学部学術研究(外国語・外国文学) 48, 2000

古家久世 「ドン・キホーテの狂気」京都外国語大学研究論叢 LIII, 1999

古家久世 「日本におけるスペイン文学（Ⅰ)、(Ⅱ）－ガルシア・ロルカを中心に－」京都外国語大学研究論叢 LIV, 1999; 環日本研究 7 号, 2000

古家久世 「セルバンテスの肖像画 I－スペイン王立アカデミア公認セルバンテス像を中心に－」『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

武部修子 「ケベドの幸福観」『２１世紀とスペイン語世界』京都外国語大学イスパニア語学科 2000

カルメン・パボン "El último Delibes" アカデミア語学・文学編 67, 1999

佐竹謙一 「ミラ・デ・アメスクアの『悪魔の奴隷』にみる劇構造」アカデミア文学・語学編 67, 1999

剣持武彦 「セルバンテス『ドン・キホーテ』の一挿話「無分別な物好きの話」と落語「包丁間男」「日本における『ドン・キホーテ』」『受容と変容・日本近代文学 －ダンテからジッドまで－』おうふう 2000

杉浦勉 「幻想する女たち－スペイン異端審問とジェンダー／セクシュアリティ」坂口ふみほか編 『宗教への問い５ 宗教の闇』岩波書店 2000

牛島信明 「スペイン・ラテンアメリカ文学」原 卓也 / 西永良成編『翻訳百年』 大修館書店 2000

Hiroyuki Takahashi "La estructura dramática de *Fuente* Ovejuna" *The Journal of Intercultural Studies* 26, 1999

Kenji Inamoto "Pedro de Morales entre Lope de Vega y Cervantes" 言語文化（同志社大学言語文化学会）2(4), 2000

Kenji Inamoto "La mujer vestida de hombre en el teatro de Cervantes" *CERVANTES* XII, No.2, 1992

Kenji Inamoto "Fama póstuma de Cervantes: el caso de Lope de Vega" *Actas del Tercer Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas*, Palma, Universidad de les Illes Baleares, 1998 [1999]

立林良一 「書評 セルバンテス著『ラ・ガラテア/ パルナソ山への旅』」週刊読書人 2283 号 1994 年 4 月 30 日

Montse Watkins "Reflxiones sobre la traducción de literatura japonesa al castellano" *CUADERNOS CANELA* 11, 1999

Alfredo López-Pasarín "Procedimientos formales y visión del mundo en la poesía de Vicente Aleixandre", *CUADERNOS CANELA* 11, 1999;「教養諸学研究」(早稲田大学政経学部) 107, 1999

María del Mar Jorge de Sande "Narrativa española actual: Julio Llamazares" *CUADERNOS CANELA* 11, 1999.

María Lourdes Doménech Alonso "Temática de la obra de Miguel Hernández" *CUADERNOS CANELA* 11, 1999.

Fernando Rodríguez-Izquierdo y Gavala "La traduccción literaria y poética con especial aplicación al Haiku" 講演録 IV (1996-1998) (京都外国語大学イスパニア語学科) 1999

フアン・デ・サバレタ (高橋博幸訳)「芝居」REHK 7, 1999

高橋博幸 「黄金世紀における娯楽としての芝居見物について―フアン・デ・サバレタ『祝日の午後』にみる」REHK 5, 1997

鈴木正士 「もう一人のドン・キホーテ: アンセルモー『ドン・キホーテ正編』内挿話「無分別な物好き」についての一考察」神戸国際大学紀要 56, 1999

ミゲル・デリーベス (喜多延鷹訳)『エル・カミーノ [道] 』彩流社 2000

カミロ・ホセ・セラ (野々山真輝帆 / 日比野和幸監訳)『アンダルシア紀行』彩流社 1999

大楠栄三 「クラリンの批評概念「典型的なモノ lo tipico 」について―クラリンの「現実のイリュージョン」とは何か?(第二部) 」慶応義塾大学日吉紀要 (社会科学) 1999

ジェズス・ムンカダ (田澤佳子／田澤耕訳)『引き船道』現代企画室 1999

ジャン・カナヴァジオ (円子千代訳) 『セルバンテス』法政大学出版局 2000

哲学・思想

ホセ・ヨンパルト 「スペインにおける世俗化の問題」社会と倫理 9, 2000

アントニオ・ペリスタイン 「スペインからの刑法学・神学的な一考察」三島淑臣 / 稲垣良典編『人間の尊厳と現代法理論: ホセ・ヨンパルト教授古稀祝賀』成文堂 2000

ホセ・ヨンパルト / 桑原武夫 『人民主権思想の原点とその展開－スアレスの契約論を中心として－』成文堂 1985

杉山 武 「「生の思想」について―オルテガによる新しい形而上学の試み」広島修大論集 40(2) 人文編, 2000

Tomoko Takamatsu "Cerrarse dentro de si en el japonés coloquial en el marco de Zen Budismo y pensamiento Heideggeriano" 教養諸学研究 (早稲田大学政治経済学部) 108 号 2000

布施 温 「ラモン・リュルの思想(1) 」愛知県立大学外国語学部紀要 言語文学編 2000

安藤真次郎 「(書評) Angel Gómez-Hortigüela Amillo: El pensamiento filosófico de Juan Luis Vives, Institució Alfons el Magnànim, Valencia, 1998.

政治・経済

前田美千代 「スペイン民法債権譲渡論序説－「引渡」に関する Titulus et modus 理論の景気として」慶応義塾大学法学政治論究 43, 1999

長岡礼美　「カタルーニャ・ナショナリズムの形成」西洋史論叢　2, 1999
諏佐マリ　「スペインにおける不正競争行為の規制」上智法学論集 41(4), 1998
佐藤修一郎　「スペインの議会制度に関する憲法学的考察」中央大学大学院研究年報 37(2), 1997
池田　実　「二院制議会の現状と諸問題ー現代スペインの場合」憲法研究 31, 1999
池田　実　「スペイン憲法史の座標」憲法政治学研究会編『近代憲法への問いかけ』 成蹊堂 1999
Inés Planes Navarro　"Desarrollo de la siderúrgia en la Comunidad Valenciana" *Cuadernos CANELA* 11, 1999
池田実　「スペイン立憲主義の曙－１８０８年バイヨンヌ憲法」社会科学討究 44(2), 1999
石塚秀雄 / 坂根利幸監修　『共生社会と協同労働』同時代社 2000
黒田清彦　「スペイン憲法２０年」南山法学　23(1・2), 1999
岡部史信　「スペインにおける労働権と障害者労働統合政策に関する序説」『高田敏 / 畑博行編『憲法と行政法の現在』北樹出版 2000
岡部史信　「現代スペイン労働法秩序における『懲戒解雇』制度」創価大学比較文化研究 12, 1999
伊藤　満　「スペイン憲法ーその沿革と現況」創価大学比較文化研究 13, 1996
Kasmir, Sharryn （三輪昌男訳）　『モンドラゴンの神話: 協同組合の新しいモデルをめざして』家の光協会 2000
成田亮子ほか　「スペイン米の調整について」東京家政大学研究紀要 39(3), 2000
池田　実　「二院制議会の現状と諸問題ー現代スペインの場合」憲法研究 31,1999
倉田良樹　「英国、アイルランド、スペインの労使関係」グローバル経営 229,2000
富屋誠一郎　「近年のスペイン経済情勢等について」ファイナンス 36(2),2000

宗教

柳　時燦　「聖イグナチオの霊操による神の意思の選定」カトリック研究 68, 1999
阿部隆夫　"Francisco de Xavier: His correspondence and perspective on the Japanese mission" 九州女子短期大学部紀要 28, 2000
今野國雄　「銀河の道、サンチャゴ・デ・コンポステーラ」『巡礼と聖地ーキリスト教巡礼における心の探求』ペヨトル工房　1991
中川浪子　『聖イグナチオ・デメロヨラー１６世紀の偉大な巡礼者』中央出版社 1993
フランシス・トムソン　（中野記偉訳）『イグナチオとイエズス会』講談社 1990
イグナチオ・デ・ロヨラ著　門脇佳吉訳・注解『ある巡礼者の物語　イグナチオ・デ・ロヨラ自叙伝』岩波文庫　2000
Bernardo M.Villasán　"Francisco Javier y la identidad cristiana" 福岡大学人文論叢 31(1),1999
木間瀬精三　「西欧世界の巡礼ー聖人崇敬の経路」（コンポステラ巡礼含む）聖心女子大学キリスト教文化研究所編『巡礼と文明』春秋社　1987
田邉蕙　「ロヨラのイグナチオの巡礼ー場所の象徴ー」『巡礼と文明』春秋社 1987

丸山徹　「ザビエルとロドリゲス－１６・１７世紀イエズス会の言語研究」南山大学ヨーロッパ研究センター報　6, 2000
青山玄　「フランシスコ・サビエルの宣教の背後にある神学思想」南山大学ヨーロッパ研究センター報　6, 2000
植島啓司　『聖地の想像力－なぜ人は聖地をめざすのか』集英社新書　2000
鶴岡賀雄　『十字架のヨハネ研究』創文社 2000

絵画

木原武一　「ピカソは女性への憎悪を表現した」新潮 45, 2000 年 12 月号
雪山行二 / 木下亮　「『セアーン・ベルムーデス・アルバム』の再検討」国立西洋美術館研究紀要 4, 2000
斉藤繁 / 蝦名敦子　「ベラスケス「ラス・メニナス」における矮人たち」弘前大学教育学部紀要 82, 1999
林栄美子　「ビュートルの『ピカソ= 迷宮』およびその転生(1) 」日吉紀要フランス語フランス文学 29, 1999
雁津孝則　「イベリア半島のロマネスク教会－キリスト教イスパニア諸王国とフランスとの関係において－」宮澤霊岸先生古希記念関大西洋史論集 1996
坂崎乙郎　「スペイン　トレドーグレコとバロック、アルタミラー呪術師たち、マドリーーゴヤの壁画」『ヨーロッパ美術紀行』紀伊国屋書店 1965
粟津則雄　「スペインの旅、日記からースペイン・ロマネスク美術」『西欧への問い』 朝日新聞社 1978
R・M・ハーゲン、R・ハーゲン　（新井皓士訳）「マドリッドのハプスブルク家終焉」 『名画による歴史訪問』岩波書店　1996
安發和彦　「エル・エスコリアルのベアトゥリス写本　挿絵－＜＜第五のラッパの審判＞＞」地中海学研究 13, 1990
浅若みどり　「ベラスケスの裸婦<<鏡を見るヴィーナス>>」名古屋短期大学研究紀要 38 号 2000
野火晃　「パブロ・ピカソ」『物語・２０世紀人物伝　６　現代文化の開拓者』ぎょうせい 1999
ブラウン、J.　（岡田訳）「１７世紀スペインの絵画アカダミー」『西洋美術研究』2, 1999
ジェームス・ロード　（野中邦子訳）『ピカソと恋人ドラ』平凡社 1999
ミシュエル・レリス　（岡谷公二編訳）『ピカソ・ジャコメティ・ベイコン』人文書院　1999
飯田善國　『ピカソ』岩波現代文庫 2000
池川　直「スペイン初期キリスト教美術の源流－西ゴート美術について」鹿大教育研究紀要（人文社会科学編）50, 1999
岡部昌幸　[監修] 『ピカソの「正しい」鑑賞法』青春文庫　2000
岡田裕成「ボデゴンから<<ラス・メニーナス>>へ～絵画をめぐるまなざし～」REHK 7, 1999

岡田裕成　「ラス・メニーナス－作品と観者」『美のパースペクティヴ』鹿島出版会 1989.
西川和子　『スペイン十八世紀への招待－宮廷画家物語』彩流社　2000
イヴ＝アラン・ボア　（宮下規久朗監訳）『マチスとピカソ』岩波書店 2000
Krauss, Rosalind　（松岡新一郎訳）　『ピカソ論』青土社 2000

文化・紀行
小川祐子　「スペインにおける観光と行政」立教観光学研究紀要 2, 2000
小川祐子　「観光対象としての民間企業グループによる歴史的建造物の動態保存－スペインにおける「エスタンシア・デ・エスパニャ」を事例として－」立教観光学研究紀要 1, 1999
小川祐子　「EU における LEADER プログラムの現状と課題－スペインの事例を中心に－」日本観光学会誌 36, 2000
樺山監修・写真　和田久士『ヨーロッパの家 2 フランス・スペイン』講談社 2000
横川　潤　「スペインの超僻地に、史上最強の三つ星レストランを訪ねて」本 2000 年 11 月号
栗田玲子　「希有なピカソ版画との出会い」本　2000 年 7 月号
福本秀子　「サンチアゴ巡礼路のロマネスク美術の旅を終えて」ふらんす　2000 年 10 月号
陣内秀信/ 福井憲彦　『地中海都市周遊』中公新書 2000
加藤径子／小川英明／河田克博（他）日本建築学会計画系論文集『バルセロナの都市形態に関する復原的研究』2000
西本鶏介　「アントニオ・ガウディ」歴史街道 2000 年 6 月号
ポール・ジョンソン　「スペインの今」「ピカソなんかぶっとばせ」『ピカソなんかぶっとばせ』共同通信社 1999
竹中克行　「スペイン国内人口移動に関する時空間分析（1962-1993）－1970 年代における 移動パターンの変化をめぐって」地学雑誌 105 (1), 1996
竹中克行　「スペインにおける出生率の地域差」地理学評論 70 (7), 1997
竹中克行　「カタルーニャへの人口流入をめぐる議論にみる民族と社会階層」愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）31, 1999
浜口美由紀　「異文化間に生じるイメージ・ギャップに関する一考察ーステレオ・タイプのスペイン像を中心にして」長崎大学留学生センター紀要 8, 2000
矢島文夫　「アルダルシア逍遙　1，2，3」『知的な冒険の旅へ』中公文庫 1994
アントニオ・マーチン　「歴史的危機（スペイン）（特集：研究、滑落する日本製アニメ・マンガ）」中央公論　2000 年 9 月号
ローゼ・マリー・ソンマー＝バンメル（監訳 中村利治）「洒落男ダリも登場したマドリードの文芸カフェーカフェ・デ・ヒホン」『ヨーロッパのカフェ』
ＴＯＴＯ出版 1991
辻本千栄子　「スペインにおける学歴と女性雇用」流通科学大学論集　人文・自然編 10(2), 1998
辻本千栄子　「スペインの教育改革」流通科学大学論集　人文・自然編　12 (1), 1999
浅若みどり　「T`estimo, Barcelona」エピメレイア創刊号 1999

西本鶏介　「アントニオ・ガウディ」歴史街道　2000年6月号
ヴェレーナ・フオン・デア・ハイデン＝リンシュ　「スペインとイタリア　テルトゥリア」『ヨーロッパのサロン』法政大学出版会 2000
濱田滋郎　「500年前から、ヒターノたちはセビーリャを歩いていた」パセオフラメンコ　2000年2月号（No.187）
逢坂　剛　『フラメンコに手を出すな』パセオ 2000
辻勲　『スペイン料理』辻学園調理専門学校 1999
おおつき　ちひろ　『スペイン　熱い食卓』文化出版局 2000
野々山真輝帆　「フランコ以後の価値観の変遷」講演録 IV（1996-1998）（京都外国語大学イスパニア語学科）1999
武部好伸　『スペイン「ケルト」紀行』彩流社 2000
辻本千栄子　「スペインの教育改革」流通科学大学論集（人文・自然編）12(1), 1990
須藤哲生　「ピカソと闘牛（4）」明治学院大学論叢　633 フランス文学 32, 1999
吉永邦治　「パリ発ーマドリッド行き」『白と赤の十字路』京都書院 1984
ヴェレーナ・フオン・デマ・ハイデン＝リンシマ　『ヨーロッパのサロン』法政大学出版会 2000
中島智　『文化のなかの野性』現代思想社 2000
寺島実郎　「１９００年マドリッド」『１９００年への旅ーあるいは、道に迷えば年輪を見よ』新潮社 2000
巖谷國士　「マドリード、セゴビア、バルセロナ」『ヨーロッパ 夢の町を歩く』中公文庫 2000
志水久之　『スペイン９０日間の旅』文芸社 2000
茅野紘一　『スペイン巡礼街道一人旅ーカミノ・サンチャゴ旅日記』文芸社 2000
おぐに　あやこ　『ベイビーパッカーでいこう!』日本評論社 2000
渋谷宏治　『スペイン料理』柴田書店 2000

REHK投稿規定

(2000年11月23日一部改定)

1．本誌への投稿は修士会の会員に限る。ただし，本会が依頼した寄稿・講演の原稿等はこの限りではない。

2．本会が依頼した場合を除き，執筆者は所定の印刷費を支払うものとする。印刷費の額については，その都度連絡する。

3．原稿の種別は論文・研究ノート・書評・翻訳・資料とする。

4．原稿は9月末までに＜規定12＞の宛先に送付すること（期限厳守）。

5．エッセイ・回顧録等は記念号を除き本誌には掲載せず，会報に記載する。

6．原稿の採否は，編集委員会が審査し決定する。

7．提出された原稿について，編集委員会は意見を述べて修正を要請することがある。

8．編集委員会が要請した場合を除ぎ，提出後の原稿の書き足しや差し替えは認めない。

9．製本は，提出原稿を使用する。従って，提出原稿は，下記の要領で清書プリントされた完成原稿でなければならない。

記

（1）用紙
A4版の用紙を用い，REHK第1号～第4号に近い形で完成させる。製本の際には，A5版に縮小されることを念頭に置くこと。(A5版はA4版を70%縮小したもの)

（2）余白
上下左右とも25mmとする。

（3）文字数および行数
和文の場合：一行34文字(全角)，一頁33行を目安にすること。
欧文の場合：一行につき68文字(半角)，一頁35行を目安にすること。

（4）書き出し
第1行目：タイトル（太字，センタリング）
第2行目：空け
第3行目：氏名（右詰め）
第4行目：空け
第5行目：書き始め

（5）註
文末註でも脚註でもよい。

（6）原稿枚数
論文：和文で 10～14枚，欧文で 7～10枚
研究ノート：和文で 5～10枚，欧文で 4～7枚
書評：和文で 2～4枚
翻訳：10枚前後
資料：10枚前後

10. 前項の規定（1）～（6）に反する原稿は原則的に受理しない

11. 原稿送付時には，種別（＜規定３＞参照）を別紙に明示すること。
また，和文の場合は，スペイン語タイトル及びローマ字表記の氏名を
別紙に明記すること。

12. 完成原稿の送付先およびREHKに関する問い合わせ先：

〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
龍谷大学文学部　安藤真次郎研究室
Tel: 075-645-8521（研究室直通）
E-mail: shinjiro@let.ryukoku.ac.jp

以上

編 集 後 記

２０００年１１月発行予定のＲＥＨＫ第８号が大幅に遅れてこの度ようやく刊行の運びとなりました。早々に原稿を戴いておりました執筆者の方々には大変ご迷惑をおかけしたことと思います。この場をかりて深くお詫び申し上げます。

第８回大会では近畿福祉大学の長谷川高生先生を講師にお招きし、先生の長年のご研究の中から「ポストモダンにおける政治哲学の一側面」と題する大変興味深いテーマについてお話をいただききました。発表後も活発な質疑応答が繰り広げられ、大変有意義な一時を過ごすことができました。その講演の内容も併せて本誌に掲載してありますので、ご高覧下さい。

第６号から執筆者の完成原稿をそのまま製本する方式へ改めたため、体裁の面で多少の難があることは否めませんが、本号より巻末に投稿規定を掲載しましたので、今後は執筆者の方々にも協力をお願いし、順次体裁を整えていく所存です。本誌刊行にあたり、会員はもとより多くの方々のお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

本学の修士会も早いもので、２００１年秋の大会で１０回目を迎えます。記念大会ですので、実り有るものにすべく、その準備に余念がありません。

本誌は会員の研究成果の発表の場として出発しましたが、今では会員以外の方々の原稿も掲載しております。時は２１世紀に入りましたが、日本のイスパニスタの数も益々増えていくことでしょう。今後も会員以外の研究者にも執筆をご依頼し、論文のみならず、翻訳、書評、研究ノート等の多彩な研究項目を通じて内容がより充実したものになるよう努めたい思っております。今後も何とぞご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

（三木一郎）

REHK (Revista de Estudios Hispánicos de Kioto)
2000年11月23日　印刷
2000年11月23日　発行
発行所　京都外国語大学イスパニア語学科修士会
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6
発行責任者　三木一郎
印刷所　都印刷
〒600-8318 京都市下京区北小路新町西入る

REVISTA DE ESTUDIOS HISPÁNICOS DE KIOTO

No. 8

Conferencia:

Un aspecto de la filosofía política en el postmodernismo
-El fundamento antropológico : la objetividad, la temporalidad en el sistema de personalidad y la nada, el vacío en el Budismo-
……Kosei HASEGAWA (1)

Artículos:

La vinculación de Picasso con Barcelona …… Midori ASAWAKA (15)

En torno a Ziryab y al zéjel ……Atsushi UEMA (33)

Américo Castro y *La realidad histórica de España*
-Una aproximación a su interpretación de los españoles-‥ Sakie UMEDA (47)

Las perlas en las Indias……Reiko TATEIWA (59)

España vista por los japoneses (3.ª parte) ……Shoji BANDO (71)

Condiciones gramaticales de la coordinación copulativa de los pronombres, artículos y adjetivos determinativos … Ichiro MIKI (81)

Cuadernos:

Movimientos sociales en el Perú
-"Comedores Populares" de Lima metropolitana ‥ Yukiko KOBAYASHI (95)

Bodas de sangre de Federico García Lorca y el instinto‥ Naoka MORI (105)

Reseñas:

Midori Wakakuwa, *Las imágenes de mujeres como símbolo* (Chikuma Shobo, 2000) …… Sayaka KATO (115)

Instituto Nacional de Investigación de la Lengua Japonesa, *El japonés y el español,* (Kuroshio Syuppan, Vol. 1, 1994, Vol. 2, 1997, Vol. 3, 2000) ……Kazumi HASHIMOTO (119)

Datos:

Bibliografías sobre los estudios españoles (1999-2000) …· Shoji BANDO (123)

2000
Asociación de Licenciados
Departamento de Estudios Hispánicos
Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto